平成9年12月19日　第3種郵便物認可　2000年7月1日第284号(奇数月の1日)発行

わいふ

投稿誌

読んで書いて、みんなでつくる

わが家の歴史写真　母が遺していったもの

新連載●リラの花　桜の花

座談会●日帰り旅行に行ってみた

逐次刊行物
12. 6. 08
国立婦人教育会館

284

農文協

【税込定価】

〒107-8668 ☎03(3585)1141
東京都港区赤坂7-6-1
http://www.ruralnet.or.jp/

◎おいしさの秘密は「ティーアンラ」
沖縄家庭料理入門

渡慶次富子・吉本ナナ子【料理】●最新刊
ティーアンラは直訳すれば「手の脂」。愛情込めて、丁寧に作った料理のおいしさをあらわします。那覇で育ったおばあちゃん世代の昔ながらの家庭料理。その娘が作る、新しい感覚もとりいれた料理など、沖縄がもっと身近になる80のレシピ。 ＊1750円

▲ラフテー
豚の皮つき三枚肉の角煮。泡盛を使って煮るので、やわらかく仕上がります。

★好評既刊・アジアの家庭料理★
タイ家庭料理入門／フィリピン家庭料理入門／ネパール家庭料理入門／インド家庭料理入門／ベトナム家庭料理入門／中国家庭料理入門／韓国家庭料理入門 ＊1530～1750円

万病を治す冷えとり健康法

進藤義晴著 冷え症を放っておくと、頭痛や肩こりのみならず、内臓に関連した症状を併発することもあるので要注意。「冷え」の仕組みと、今日からできる冷えとり法の数々を紹介。88年刊の新版。＊1750円

図解・盆栽テクニック101条

木原進著 全国の栽匠から学んだ101ケ条の知恵袋。日頃よくある失敗や思い違いの原因を図解でわかりやすく解説する。 ＊1400円

自然の美でくらしを彩る

草を編む

谷川栄子著
道端のガマやスゲ、ススキなど、ありふれた雑草が見事に変身。自然であたたかいカゴやバッグ、花差し、小物入れなどの作品を作ることができます。伝統の技法を生かしながら現代生活にナチュラルな感覚を添えてくれる新しいクラフトの数々。豊富な写真と図解で一から手ほどき。 ●2700円

樹皮を編む

谷川栄子著
公園や街路樹、庭木のせん定枝を有効に利用して作品にします。簡単な技法とその組み合わせをイラストと写真で詳しく解説。 ＊2700円

あけびを編む

谷川栄子著 ＊2600円

田園クラフト
村から届いた手づくりノート

遠藤凌子著 道端のガマやスゲ、ススキなど、ありふれた雑草が見事、自然であたたかいカゴやバッグ、小物入れなどの作品に変身。 ＊2800円

「わいふ」を読む

「わいふ」に書く

あなたの人生が開ける

わいふ 284号

読んで書いて
みんなでつくる

目次

わが家の歴史写真
4 母が遺していったもの ◆山田暁生
写真提供・文・イラスト／山田暁生

9 新連載 リラの花　桜の花　浅野素女

19 家族のスケッチ
隅田美幸・和田美代子・荒木裕子
浅川涼子・田中慶子

80 父の死　林　直美

90 パソコンワールド
矢島紗恵

92 エンジェルス・トランペット　高梨陽子

96 コミック　これが子供の生きる道 ⑯　栗田　笑

100 座談会　私も言いたい
日帰り旅行に行ってみた
菊池裕子・高梨陽子・水落時子・山本郁子

110 小さい兄ちゃんはブラジル人（下）　三田サキ

116 私の意見・あなたの意見
河野弓子・井上暁子

118 子育てフォーラム ●NMSのページ●
小山佳世子・水沢瑞穂・十文字圭子・杉田みほ

デザイン／宮塚真由美
題　字／石渡希和子
表紙イラスト／箕輪絵衣子

イラスト／荒井知恵　荒田ゆり子
梅村　尊　奥島千恵子　小沢恵子
カステラネンコ　弘法堂建二
小林正子　佐藤瑞江子
Jasnime　田沼千恵　西宮さき
橋本美智子　長谷川てるみ

30 ブック情報

31 エッセイスト・クラブ
長谷部治子・中松ミナ子

35 一筆両断 ⑯ 西田淑子

36 情が仇 —私の事故顛末記— 小田多恵

41 フリートーク
柴田照代・柳本綸子・大沢陽子
島 初美・松本とみよ・安村豊子・浅田節子
須賀まり子・永田道子

55 おすすめの一冊 佐藤信子

56 連載3 いのち、はるか —老親介護の日々— 小林智枝

67 ズバリ一言
高松恭子・後藤 晶・匿名・神智 正

79 笑える！
太田啓子

128 おすすめの一冊 和田好子

129 あなたへスマッシュ
石井しのぶ・後藤 晶・野本美希子
青島典子・飯島まゆみ・伊藤琴子・長谷部治子

140 私もひとこと
砂原富美子・鴨川典子・ウイリアムス典子
伊藤てる子・太田啓子・渡辺早苗・島村君子
林 夏子・増井幸子・本間美恵

142 コミック 毎日が平日 海砂

144 情報コーナー

スタッフから —— 147
募集します —— 149
編集だより —— 152
わいふインフォメーション —— 148
投稿のきまり —— 150
文章講座のおすすめ —— 40
バックナンバー —— 66
自費出版はわいふへ —— 79
お友達にわいふを —— 91

■わいふホームページ
http：//www.t3.rim.or.jp/～nm01-wif/

■Eメール
nm01-wif@t3.rim.or.jp

わが家の歴史写真

母が遺していったもの

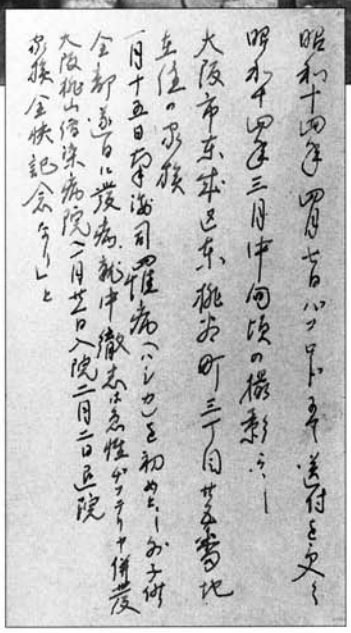
山田中学生問題研究所代表
山田暁生

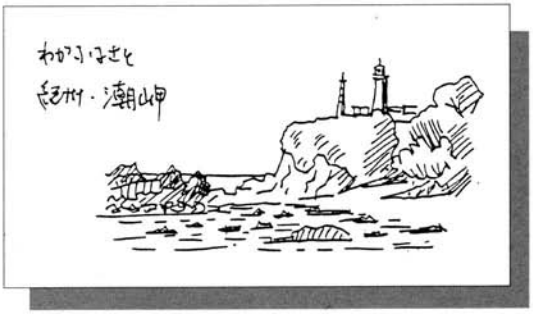
私の手元に親子七人が一緒に撮った唯一枚の写真が残っています。母三十歳、父三十七歳、そして、私、生後五カ月。父に抱かれた写真です。出生の年、一九三六年、日本国内では二・二六事件が起き、この写真を撮った翌一九三七年には中国南京での日本軍による「大虐殺」や、日独伊三国防共協定調印といった、いつ大戦が勃発してもおかしくないような状況のときでした。

フィリピン・イロイロ市に住んでいた私たちは父を残して、この写真を撮ったあと、日本に帰国しました。

その後、太平洋戦争勃発。父、持ち船と共に現地で軍属として召集され、敗戦の年一九四五年戦死。南海の藻屑となって、この世から消されてしまいました。あらかじめ送られてきてあった父の爪と数本の頭髪で葬式をした悲しい思い出があります。

この写真以後父と会ったことのない私は〈この写真のおじさん〉を全く知りません。父の味がわからないままです。

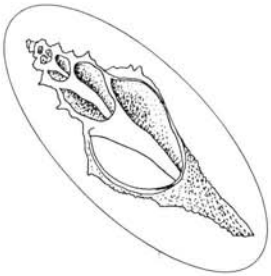


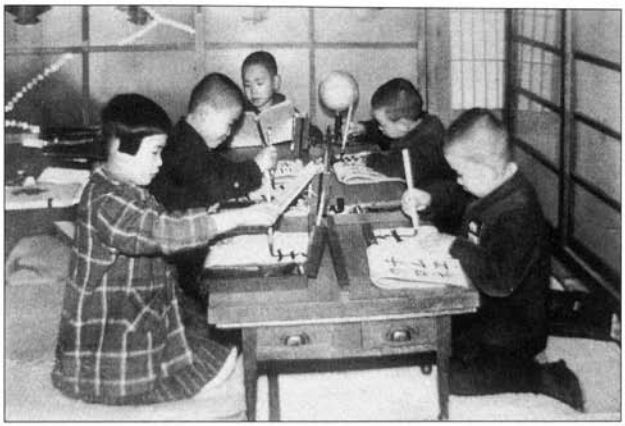


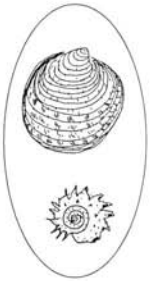
母は、聴覚に障害のある長男には何としてでも教育を受けさせ、自立して人生を送れる人間に育てたいと思い、夫と離れて、五人の子を連れ帰国したのでした。私をおんぶし、三男を抱き、あとの三人には自分につかまらせ船にゆられながらの帰国でした。

「子どもたちは、こんなに元気に育っていますよ」と、時折写真屋さんに撮ってもらい夫に送っていたようです。受けた写真は裏書きされて、ことごとく送り返されてきていました。太平洋戦争中は、いつどんなことが身辺に起こるかわからないからとの父の配慮から、母の元に返送されてきていたのです。

上の写真には左上のような裏書きがされています。四人がハシカ、一人はジフテリア。どれほど大変な思いをしたかも私たちに語り聞かせたことのない母も、遠く離れたわが夫には「苦難を何とか切り抜けて、いまこうして、みんな元気でいますよ。安心を」と知らせていたのです。







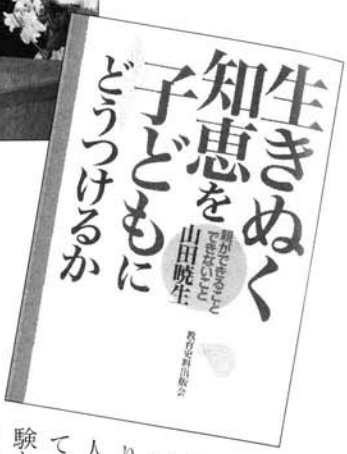
明治生まれで、小学校三年生までしか学校に縁のない母は、「教育は財産やで」とよく言っていました。遠く外地で働いている夫にも、右上のような写真を送っています。

母は娘時代、みんなは嫁入り仕度に和裁を習いに行っているとき、「日本もいずれは洋服の暮らしになる」と考え、仕立て賃の高い紳士服の勉強に仕立屋さんに見習いに入ったそうです。当時、「いい年の娘が男のマタに手を当てて寸法なんぞ計ってる。スケベエな女や」と笑われたそうですが、わが子にそんな話をして笑う母でもありました。

敗戦の日。一九四五年八月十五日の夕方、夕食の仕度をしながら私（小学校三年生）に、「これから日本も貫目からグラムに、寸や尺からセンチになるで」とつぶやくように言ったのを覚えています。

左上の写真にはフィリピンから持ち帰ったシンガーミシンが写っていて、大きな鎖で台とつないでいます。フィリピン、香港間を軍需物資を積んで往復していた軍属の父からの仕送りもままならなくなり、母の腕とこのミシンこそがわが家の命綱となっていたのです。これを盗られたらわが家は生きていけなくなるとの思いが、この鎖に込められているように思えてなりません。

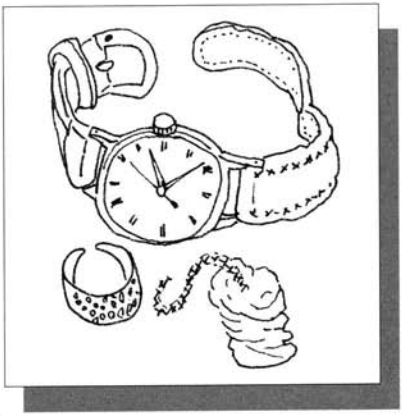
講演会にて



『生きぬく知恵を子どもにどうつけるか』（教育史料出版会）

父戦死。その後の母の暮らしぶりは表現し難いものがあり、わずか二人の子を育ててきた私の親体験とは比べものにならない大変なものがあったろうと思います。

二十五年前、母はガンでこの世を去りました。遺品と言えるほどの物がほとんどない母が大事に持っていた物の中に、三つのガラクタ（？）がありました。一つは私が大学生になって初めてアルバイトをしたお金で買ってプレゼントした腕時計。あとの二つは何万回も針の頭を押して、裏にまで穴があいてしまっているアルミニュームの指貫きと、糸通りを良くするためにロウソクに糸をこすりつけたデコボコだらけのロウソクのかけらです。



働きづめに働いていた子育て中のことを、これらを見ては思い出していたのかもしれません。

母は死後二十五年もたって末っ子の私がこんなことをしようとは知る由もないわけですが、母がいて私がこの世にいたのだという証を何とかして残したいと考えていました。長い教職生活を終え、自分も人生マラソンのゴールに近づきつつある今、自分の年齢と同じ六十三冊目の本『生きぬく知恵を子どもにどうつけるか』（母の遺言状のつもりで書きました）を母の二十五回忌に記せたことで、ホッとしている昨今です。

【写真提供・文・イラスト／山田暁生】

元気コミュニティ！秋津

学校を基地に まちづくり

習志野市・秋津コミュニティ会長
岸 裕司

学校と地域が
「蘇生」する本！

四六判・上製
定価：本体1800円＋税
208頁(うち写真8頁)

「できる人が，できるときに，無理なく，楽しく！」がモットー

飼育小屋・ごろごろ図書室づくり，園庭１泊キャンプ，
432人出演の秋津オペレッタ，まちをあげての秋津まつり，
地域ノリノリ大運動会，大人たちの29種のコミュニティルーム。
タブーのないＰＴＡをめざした、学校との新しい関係づくり……。

大人が楽しめば、学校が甦る！　地域が動きだす！

【推薦します】**佐藤一子**さん(教育学)生活者民主主義にねざすコミュニティこそ学校を甦らせる力。★**斎藤茂男**さん(ジャーナリスト)これからの教育を指し示している原動力。★**佐藤学**さん(教育学)21世紀の学校の先どりが、ここで起こっている。★**寺脇研**さん私など、こんなに楽しい街なら秋津に引っ越してみたい、とついつい思ってしまいます。(文部省生涯学習局 生涯学習振興課長)(『中学生を救う30の方法』から・講談社)

●書店にない場合は小社へ。代金引換の宅急便ですぐにお届けします。(送料380円)
〒113-0033 東京都文京区本郷5-32-7 ☎03-3815-0605 FAX03-3815-0698 **太郎次郎社**

教育史料出版会 〒101 千代田区西神田２－４－６ ☎03(5211)7175

自分にあった学校をえらぶ私立高校ガイド

ハイスクールレポート

入学してからでは遅すぎる！
服装・頭髪規定は？ 生活指導の中身は？
どんな行事があるのか？ 力を入れている教育内容は？ 進学への取り組みは？
学校生活がこの一冊で見えてくる！

関東版 わいふ編集部編 4月末刊★2000円＋税
関西版 公立校も収録／5月末刊★2000円＋税

子どもはなぜ 学校に行くのか

渡辺 位 ★1500円＋税

自分にあった 高校のえらび方

早川裕子 ★1602円＋税

●生徒・父母・教師が綴る 私の北星余市物語

やりなおさないか 君らしさのままで

北星学園余市高校編
中退生を受け入れる北の学園！ ★1500円＋税

新連載

リラの花 桜の花

浅野素女

ギヨームを産んだ日のことはよく覚えている。たったひとりだった。パリの東の端っこにあった産院の分娩室は、一方の壁一面に曇りガラスが嵌め込まれていて、部屋は乳白色のやわらかな朝の光に包まれていた。

「だれも立ち会う人はいないんですね」

看護婦はもう一度、私に念を押すように聞いた。

「いいえ、いません」

フランス人である子どもの父親は、前日から遠い国へ一カ月くらいの出張に出かけてしまっていた。連絡先も残していかなかった。家庭がある人だった。あえて長期出張を私の出産の時期にぶつけたのかどうか、それはわからない。少なくとも、その時期をはずしてはくれなかったということだ。

分娩室には赤ん坊の心音が響きわたっていた。検査の後、すぐ分娩監視装置につながれてしまったので、

誰にも連絡を取る余裕はなかった。いま、新しいいのちが生まれ出ようとしているということを、私以外の誰も知らない。私はこのいのちとたったひとりで向き合っている。そう思うと、私は淋しさや不安よりも、妙に清々とした気持ちに包まれた。その気持ちは、「覚悟」と呼べるものだったのかもしれない。

心音は高くなったり低くなったり、速度を速めたり緩めたり、私はその波にからだを委ね、待った。脳裏を、さまざまな光景がよぎっていった。二十代に経験した中絶手術の時の情景も、走馬灯の絵のように浮かび上がり、揺れながら消えていった。いや、いまは無事に産むことだけを考えよう。新しいいのちが生まれるのだ。どんな状況であっても、それはすばらしいことではないか。助産婦さんはセネガル出身のつやつやした黒い肌の持ち主だった。三十一歳の春のことだった。

それから七年後の春、私は再び分娩台に上がった。満月の夜だった。ギヨームの時とはちがって、傍らには夫が付き添ってくれていた。妊婦である時期を夫に助けられて過ごし、出産も夫に見守られて果たし、子育ても二人でする。なんとまあ、楽なのだろう。ギヨームをひとりで育てていた時は、「ほかの人みたいに旦那さんの世話をする必要がないから、かえって楽だわ」と口にしていたが、それは自分の状況に対するせめてもの気休めで、やっぱりたいへんだったのだ。

エレベーターのない最上階の六階に住んでいたから、片腕に十キロにもなる幼児を、もう一方の手には買物袋を抱えて日に何度、息を切らせて階段を上がっていっただろう。パリの日本大使館で、父親が認知していないならフランス人とはなりませんから、外国語表記はできませんよ、と言われ、胸を締めつけられるような思いでパスポートの〝Giyômu〟という奇妙なローマ字表記を見つめた。「認知はしてくれなくても、名前はパパがつけてくれたんだよ」、といつの日か言ってやりたかったから、フランス語の〝Guillaume〟が認められず〝Giyômu〟になっているのを見るのは、ギヨームがギヨームとして認められていない気がして辛かった。出産後しばらくは仕事量が激減し、当然、蓄えもみるみる減り、雨漏りの修理代として保険会社が振り込んできたお金を、修理には使わず生活費に回したりして切り抜けたこともあった——。

いまは、もうできないし、繰り返したいとは思わない。あの時の私は、「たいへんだ」とは決して自分に言わせないぎりぎりのところで、ひとりで必死に足を踏ん張ってギヨームを育てていた。

現在、私はギヨームとトマというふたりの男児の母親になり、トマの父親である夫と四人で暮らしてい

る。夫とは二年前に結婚した。この四年余り、ギヨームをめぐって父親との間で凄惨な闘いが続いていたし、夫とギヨームが「親子」になるまでの道も決して平坦なものではなかった。それでも私たちはとても幸せだと言える。

幸せとは、一瞬、一瞬の努力であろう。幸せであろうとする意志を、生活の細部において具体的に形にしてゆくことだろう。不幸な顔を日がな続けるのは本当に簡単なことだ。幸福は、ほんわかしたイメージからはほど遠い、とても厳しいものだと思う。幸福の裏には必ず闘いがある。愛も幸福も、鍛練と研鑽の末に美の瞬間が次々と紡ぎ出されるダンサーの動きにも似て、一瞬、一瞬の危うい創造なのだ。

愛と言えば、ある時、クリスチャンである日本の知人に言われたことがある。

「愛っていうのは、結局、その人のために死ねるかどうかってことなのよね」

当時、まだクリスチャンではなかったので、私はぎょっとしてその言葉を受け止めた。死ねるか否かなんて、まあ、なんて大袈裟な、と心底思った。しかし、いまはあの言葉に心から頷ける。それほどの内面的な変化が、三十代の私にあったということだ。

今年、私は四十歳になる。人生の半分を生きてきてようやく、本当にようやくのことで、自分のいた場

所、いまいる場所が見えるようになった。いや、そうは言っても、本当に見えているのだろうか。この書き物は、私にとって、それを確認するための作業なのかもしれない。

学生時代、私はフランス語を学び、在学中に留学のための奨学金試験を受けた。八〇年代初めといえば、経済はひたすら上り坂。私学であったし、学生はみな着飾って華やかだった。しかし、私は浮かれ調子の時代の気風と自分の間に、いつもずれを感じていた。父は社会的な成功とは無縁の人で、事業に失敗した後、当時は細々と広告の新聞折り込みの仕事をしていた。奨学金がなければとても留学などできる身分ではなかった。

試験結果は補欠だったが、運よく欠員が出て、大学四年の時に休学し、一年間、フランスに留学することができた。外国旅行など珍しくもないという級友がたくさんいる中、私は外国に出るのは生まれて初めてだった。

そういえば、私は中学も補欠で入った。当時から有名校だったところだ。大学は、一次志望は落ちて、二次志望だった。就職先も、望んだところはだめだった。試験に弱かったのかもしれないが、思えば、この補欠だったり一次志望はだめというのが、私の人生にいつもいい方向に作用してきた気がする。補欠というのは、一度は諦めるということだ。

「まあ、ほかにも道はあるさ」と、一度は思い定めることだ。だから、遅れてやってきた吉報を純粋な幸運として受け止め、その事実にしがみつかない。自分の得たものに対して、ちょっと距離を置いている。それに、一次志望がだめでも、思わぬところに別の道が開けたりして、後で「ああ、あの時受からなくてかえってよかったんだ」ということになったこともたびたびある。こうした経験は、十代、二十代初めの私にとって貴重だったような気がする。

小さい頃からいつも学級委員を務める優等生タイプだった。中学、高校時代の友人に会うと、「昔から落ち着いていたよねえ」などと言われるが、落ち着いていたというより、単に内向的な性格だったのだ。五分の休み時間も惜しんで、級友たちの喧騒をよそに読みかけの文庫本を開く。中学、高校時代で、あのわずかな読書の時間が私にとって一番充実した思い出になっていることに、我ながら驚く。やはり、文学少女だったのだろう。リーダーになって座を取り仕切るのは、やれと言われればやれるが、私には合っていなかった。生徒会など、本当は大きらいだった。

やれと言われればやってしまう器用さは、長所であり、短所でもある。器用なおかげで、偶然入ったテレ

ビ界に長居し、アシスタントからディレクターまで務め、時にインタビュアーやリポーターもしながら、二十代を駆け抜けた。テレビは自分の世界ではないとわかっていたが、その後、本来の自分の世界である書き物で食べていけるようになるまで、私はずいぶん遠回りをしてしまった。

ギヨームの父親と出会っていなかったら、テレビの仕事を始めることもなかったはずだ。話は留学が決まって、夏の出発を待っていた頃に遡る。

留学前に、就職のことも考えておかなくてはいけなかった。私は漠然と、新聞記者になりたいと思うようになっていた。シモーヌ・ド・ボーヴォワールの『レ・マンダラン』を読んで、記者である主人公たちにすっかり魅せられてしまった。ボーヴォワールの自伝が、フランスびいきの母の書棚にずらりとあったのを、小さい頃からかじり読みしていた。いまや大半は忘れてしまったが、若きボーヴォワールが初めてアパルトマンの一室を借り、手にした自由の味を噛みしめて歓喜する場面の感触だけはいまもまざまざと蘇ってくる。

自由とか自立とかフェミニズムとか、それが七〇年代の標語であったこと、私もまたそうした時代の趨勢の中で育てられたということを、いま、改めて思う。

大学のフランス語学科の二次面接試験で、ボーヴォワールの名を持ち出して、神父様でもある昔気質の教授たちの顰蹙を買った生徒がいると、後になって私の恩師が話していたが、あれは私のことだったのではないだろうか。女性である恩師は、「何でボーヴォワールがいけないんですか」と、擁護してくれたらしい。かなり頭でっかちな女の子だったのは確かだ。

その頃、決定的な出会いがあった。共同通信の記者であった、いまは亡き斉藤茂男さんとの出会いだった。共同通信のジャーナリスト講座、といってもそれは表向きの看板で実は青田刈りの場なのだが、それに参加し、講師が斉藤さんだった。なぜかその時私は最前列、斉藤さんの目の前に座っていた。斉藤さんは水を入れたコップにスプーンを入れて、どう見えるかと、目の前の私に問いかけた。実際のスプーンより短く、屈折して見える。

斉藤さんは事実を事実のままに見つめることの難しさをスプーンの姿を借りて伝えようとしていた。彼は『事実が私を鍛える』という本を書いていて、私は講座の後、貪るようにそれを読んだ。出会いというのは、往々にして一瞬で決まる。教育問題を扱った『父よ母よ』、高度経済成長の歪みを描いた『飛び立ちかねつ鳥にしあらねば』、ベストセラーになった『妻たちの思秋期』、老いと性の問題を追究した『燃え尽き

たし』など、斉藤さんはいつでも現代の病巣を、独創的な視点と粘り強い取材で抉り取り、同時に人間的な温もりをそのまなざしから失うことがなかった。会社の名前にもの言わせて居丈高に取材するのではなく、取材対象の目の高さにまで腰を落として、一対一の人間として向き合う姿勢を生涯貫いた。口で言うのは簡単だが、七〇年代、八〇年代の初めにかけて、彼のような記者はごく稀れであったのだ。また彼は、一般の新聞では絶対タブー視されていた「性」というテーマを、初めて正面から取り上げた人でもあった。

八〇年代は、華やかで軽薄短小な時代気分にうまく乗っていかれない者には、どこにも居場所がないような時代だった。斉藤さんを知って私は即座に、彼となら自分の抱えている問題を偽らず、問題として向き合っていけるという確信を持った。

斉藤さんにその時の自分の思いを伝える手紙を書いた。何をどう書いたのか、すっかり忘れてしまったのだが、斉藤さんは短い返事をくれた。期待も予想もし

ていなかっただけに、心臓が飛び跳ねるくらいびっくりした。留学直前のことだった。ずいぶん後で聞いたら、「こんな手紙を書くのはどういう子かな、と思ってね」、そう言っていた。いま思えば、私は「八〇年代の若者」の一例として斉藤さんの興味を引き、それ以後彼にとって、一種の定点観測の場になったわけだが、斉藤さんのすごさはそういうところだ。どんな小さなサインも見逃さない。

私は是非、斉藤さんと仕事をしたいと、自分を売り込んだ。まだ売り込むものなど何も持っていなかったが、二十一、二歳の意欲だけはあった。当時、斉藤さんはまだ共同通信の社員であったから、個人的にアシスタントを雇うわけにもいかなかった。私の押しかけ女房作戦は、当然断られた。私もフランス留学が決まっていた。

斉藤さんと仕事をしたいという私の望みは、留学後も私がフランスに住むようになってしまったので、日の目を見ることはなかったが、斉藤さんは私にとって師匠のような存在となった。日本に帰るたびに、煙草もお酒もやらず、甘党の斉藤さんとケーキをつつきながら長話をし、斉藤さんにその時の自分や仕事の状況を報告することで、私は自分の居場所を確認していた。斉藤さんは斉藤さんで、外国へ飛んで行ってしまった娘の奇妙な生き方に関心を持ち、彼なりの愛情を注いで見守ってくれていた——のだと思う。時に疑問を投げかけられ、最後にはさんざん批判もされたが、いつも真剣に向き合ってくれた。「君はいつかきっと何とかなると思うよ」という、変な励ましの言葉が耳に残っている。

離れてしまった国であっても、日本は私の故国だった。私自身、テレビや雑誌の仕事を通して、日本に向かって何らかの発信を続けていたとはいうものの、むしろ斉藤さんを通して、私は日本という国と個人的に対話を続けていた。会うたび、斉藤さんは「日本のいま」を、マスコミが伝えるものより数倍深いところに達する視線と言葉で私に語って聞かせてくれた。自由を身勝手と取りちがえ、消費にしか快楽を見出せない哀しい惨めな国であっても、日本ジャーナリストクラブを仕切ったり、花婿学校を切り盛りしたりしている斉藤さんのユニークな活躍を見ていると、何だか希望が持てるような気もした。

ちょうど一年前の九九年春、斉藤さんの訃報を受け取った時、あまりの唐突さに悲しみの感情すら湧いてこなかった。東京とパリの物理的な距離のせいもあるだろう。

最後に会ったのは、実は結婚しようと思っているのだが、と報告した時だから、九七年のことだったと思う。斉藤さんは、いつになくきつい語調で言い放っ

た。

「君の思想的なものはどうなるんだね」

私はその反応にびっくりして、即座には返す言葉がなかった。結婚は、思想転向なのだろうか。裏切りなのだろうか。もちろん、斉藤さんは左翼系のジャーナリストだ。日本的結婚生活の欺瞞や弊害やその奥に潜む社会の病巣を、誰よりも早く公の場で暴いてみせた人だ。しかし、すべての結婚イコール悪というわけではないだろう。それではあまりに単純すぎる。すべての自由イコール善というわけでもないだろう。いや、人のことは言えない。私自身、幸せな家庭生活など欺瞞だとずっと思っていたのだから。

私がその時言い返せなかったのは、まだ人生の転換期の渦中にいて、自分の「転向」を弁護する言葉を持っていなかったからだ。私の心の揺れや迷いを、斉藤さんは敏感に感じ取っていたからこそ、あんな風に言ったのだろうか。翌年、帰国した際、私たちは会わなかった。どんなに忙しくても時間を作ってくれていたのに、その時だけはお互い今回は無理そうだね、ということになってしまった。私の方は、ああいった形で正面から自分の選択を否定され、気持ちが怯んでいた。斉藤さんの方の理由はわからない。すでに無理ができない体調だったのだろうか。いつもフランスから帰って「お元気ですか」と電話を入れると、「まあ、何とかやってるよ」と答える人だった。風貌に似合わず、ビロードのような厚みを持ったいい声の持ち主で、私はあの声が好きだった。そして、そのまま急逝された。涙が出たのは、だいぶ後のことだった。彼が、異国で生きることになった私と日本をつないでいたかけがえのない橋であり、それが永遠に絶たれたのだ、と実感した時だった。

結婚をすることなんか絶対ないだろうと思って三十五年以上も生きてきた私が、どうして結婚という選択をしたのか、それを斉藤さんにきちんと説明できないでいるうちに、彼はさっさと逝ってしまった。私が去年の春に送った、無事男児出産の通知が、私からの最後の手紙になってしまった。返事はなかった。最初の手紙以来、返事というものをもらったことはない。ただ、いつかこう言ったことがあるらしい。母から伝え聞いた。「返事を書くわけではないんですけど、手紙がずっとないと、どうも気になるんですよね」

私はカトリックでいう意味の結婚をした。カトリックとしての結婚でなければ、しなかっただろう。その辺についてはまた後でくわしく書きたい。去年、洗礼も受けた。その意味では、斉藤さんが言ったように、私は思想的な「大転向」を遂げたのだ。だが、宗教は政治的・イデオロギー的な思想とはまったく別の物だ。その点について、しっかり斉藤さんとやり合って

おくべきだった。そのことがいかにも心残りだ

さて、話が長引いたが、斉藤さんのことから話を始めたのは、彼が私とギヨームの父親アダムを引き合わせた張本人であるからだ。この出会いがなかったら、私がフランスに住み着くということもなかっただろう。斉藤さんがいつも私のことを気にかけていてくれていたのは、もしかしたら、「アダムを紹介したのは自分だ、そのせいでこの子の人生を狂わせてしまった」とでも思って、どこかで私に責任を感じていたからだろうか。あの時、人生が狂わなかったらいまの私もないわけで、それについて斉藤さんには何の恨みもない。縁というか、出会いの不思議さを思うばかりだ

アダムはフランスのテレビのドキュメンタリー番組を作るために、日本に滞在していたディレクターだった。留学から帰って、大学四年の後期を終えようとしていた頃だ。私が「斉藤さん、何でもいいですから、お仕事手伝わせてくれませんか」とか何とか言ってまとわりつくものだから、これは誰かに押しつけてしまえ、と思ったのかもしれない。「そういえば先日、フランス人のディレクターの取材を受けたんだけど、今後の通訳兼アシスタントを探していたから連絡取ってごらん」と、紹介してくれた。連続番組のテーマは各国の夫婦関係のあり方を取材、比較するもので、アダ

ムは日本の担当だった。テーマとして、私にもとても興味があった。私は早々、そのフランス人に連絡を取り、無報酬でもいいから、勉強のために取材につかせてもらいたいと頼み込んだ。アシスタントはすでに見つかっていて、半ば迷惑そうだったが、彼は私の熱意を受け止めてくれた。

取材について回って、それでなくてもお余りなのに、脇からとんちんかんな質問を取材相手にぶつけてアダムを慌てさせたり、いま思えば「何かやりたい」気持ちばかりが先行する世間知らずの娘だった。アダムは三十七歳。大学もまだ出ていない若造の目には、経験豊かな魅力的なおとなの男性と映った。仕事ぶりは尊敬できるものであったし、人間的にも味のある人であった。

幸か不幸か、アシスタントの女性が病気で倒れ、私にお鉢が回ってきた。そのまま、それが私の初仕事となった。アダムの仕事ぶりから、私は吸収できるものは何でも吸収しようとした。若くて、まあ頭も悪そうではなく、やる気満々の女の子にアシストされて、ふらっときてしまうということはどんな男性にもあり得るだろう。私たちの場合も、それくらいありきたりのことだった。私の方がふらっときたのだと書かないのは、私のずるさではない。それが事実だったからだ。私もそう鈍感ではないから、相手が私に気持ちをそそられているというのは、いっしょに仕事をするようになってしばらくしてから感じ取っていた。

一年間のフランス留学中、実にいろいろなことがあった。若気のいたりで、失敗もいやというほど重ねた。だから、その時の私は心底、たやすい恋愛はもうんざり、自分が傷つくだけ、という気持ちであった。一度は先手を打って、「誘惑したりしないでくださいね」と、アダムに向かってぴしゃりと言ったことを覚えている。しかも、アダムの妻は出産を控える身だった。アダムは「僕は子どもは欲しくなかったんだ」と言っていた。

当時のアダムの年齢を越えて、あの時の壮年期の男の心の揺れを、いま、理解することはできるし、彼の性格、行動を生い立ちに遡って分析してみせることもできる。しかし、当時の私は、彼の言葉の奥行きを汲み取って危険を回避するような能力はなかった。彼の言葉ひとつひとつを真に受けていた。特に自分に対する称賛の言葉を。彼をひとりのか弱い人間として見つめるだけの人間の幅もなかった。言い訳として言うのではなく、事実としてそう認める。二十代そこそこの娘と三十代も後半の男では、最初から勝負は決まっているようなものだった。以後、私たちの関係は十三年も続いた。

（続く）

（え・荒田ゆり子）

家族のスケッチ

時間よ止まれ！

横浜市旭区　隅田美幸（41歳）

ポカポカ暖かい日だまり。通い慣れた園庭に腰かけていると、園児達の賑やかな声が小鳥のさえずりのように聞こえてくる。お気に入りの大きな滑り台を、何度も何度も滑っては友達とキャッキャッと声をあげている娘。その娘も、六日後には卒園。あまりに平和な時。

「時間よ止まれ！」

私は心の中で呟く。呟いてから、こんな風に思う自分にびっくりする。

友達と走り回る娘の姿が、長男とだぶる。長男が入園したのは七年前。夫の仕事でインドに五年ほど駐在。おなかに子供がいたので、私は四歳と二歳の息子を連れて先に帰国し、長男の幼稚園を探した。

自宅から歩いて五分ほどの所に、緑と木々に囲まれた幼稚園があった。大人の私でも、ちょっと探検してみたくなる広い庭、林、水場があり、夏ということもあって子供達がパンツいっちょうでドロンコ遊びに興じていた。長男もたちまちその仲間入りをした。

私のおなかはドンドン大きくなり、秋に娘が誕生。翌日インドより帰国した夫は、お手伝いさんのいる気ままな独り暮らしから、退院までの短期間とはいえ父子家庭となって大童。

長男はお父さんが作ってくれたお弁当を、今でも忘れない。秋の運動会でも、親子ダンスでお父さんが活躍。「オレ以外は、みんなお母さんだった」と照れながらもニコニコ。

長男が年中で入園した翌年、次男が年少で入園。最初一週間は泣きたいのをこらえ何とか通った。帰ってきてもまだ緊張がほぐれず、コチコチで動作がぎこちなく親が見ても哀れだった。

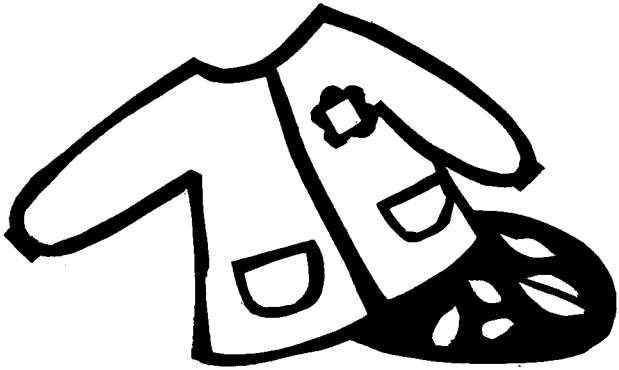
先生も心配してしばしば電話を下さった。一週間後初めて「行きたくない」と大泣きし、やっと自分を出せるようになってからは、ふっきれたらしく、少しずつ園生活をエンジョイし始

めた。

息子達のスモック、ズボンはいつも、砂か泥にまみれていた。運動靴も毎日洗った。スモックについている大きなポケットには、必ずお土産が。ドングリ、葉っぱ、何かの実、石ならば良い方で、作った泥団子が跡形もなく、ただの土に変わっていたことも。

園に通う子を送ったり迎えに出ると、下の子はシメシメとそのまま外遊びにいそしむので帰れなくなる。一日中、外にいるようなことも多かった。お日さま、雨、風、砂、土を肌で感じる毎日。それが楽しくもあり、うとましくもあった。同じことの繰り返しで、これが延々と続くかと思うと、時間が止まってしまったかのようでウンザリ。長男入園から娘の卒園まで、園とは七年間のお付き合い。数えてみて気が遠くなった。

だから娘が入園した時は、初めて自分だけの時間を手にしてウキウキ。しかし、園に迎えに行くとすぐ帰れないのは同じで、園庭を走り回る娘を一時間も二時間も待たねばならなかった。暑いとか寒いとか、子供は全然気にしない。夏は木陰で過ごし、冬は日だまりで待ちぼうけ。木枯らしがふくと「早く帰っておやつを食べよう」と娘を誘うが、ひとたび遊びに熱中すると「おやつ」ごときに聞く耳を持たなかった。



引っ越してしまい家が園から随分遠くなった時、バス通園にもできたが、毎日二十分歩いて通った。

「ネコちゃーん」と呼ぶと「ミャー」とどこからともなく猫が姿を見せる猫横丁。今日は吠えないかなぁと思って覗くと「ワンワンワンワン!」。家の人が出て来て「子供にいじめられてから、小さい子が嫌いになっちゃったの。ごめんね」

市民菜園の細い道を通れば、元気な野菜がいつも挨拶してくれた。朝露にぬれたブロッコリー、葉っぱに隠れるように色づき始めたイチゴのおいしそうなこと。「随分カボチャ大きくなったね」「あのトウモロコシ、食べちゃ

いたいね」。そんな会話が楽しかった。
庭の花々があんまりきれいで、いつも立ち止まるうち、そのお宅の方と仲良くなってしまったことも。「おはようございます。この花はなんていうの？……」「いっていらっしゃい」
幼稚園最後の一年間、娘はバスで通園。歩いてはとても通えない場所に越してしまったのだ。園での様子が全くわからなくなるのが嫌で、役員を引き受け、せっせと足を運んだ。

七年先は長い。が、過ぎてしまった七年間は「えっ、もう……」である。幼稚園の送り迎えさえなくなれば、もっと自由になれるとあんなに待ち焦がれた最後の卒園なのに。もうこれでおしまい。そう思うと、通い慣れた園舎・園庭、使い古した遊具が、何か別のものに見えてきて、私を引き止める。全てがいとおしくてならず、今度は声に出して言ってみる。
「時間よ止まれ！」

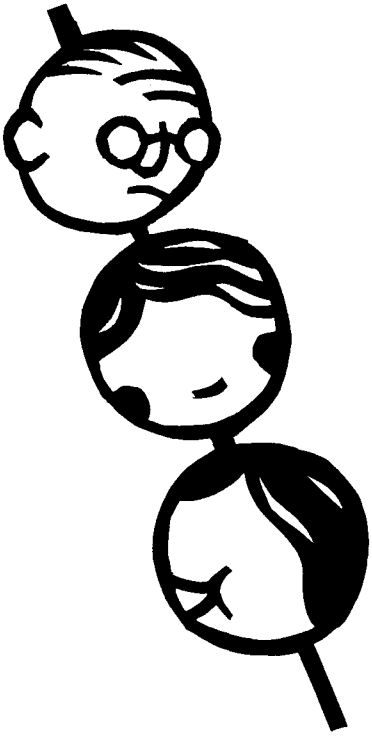
娘が面白がって繰り返す。
「じかんよとまれ！」

兄の七回忌

川崎市中原区　和田美代子

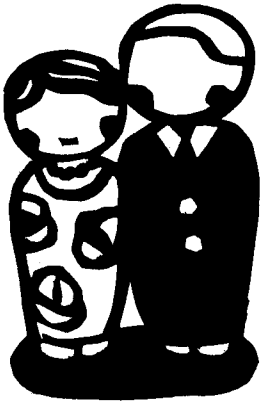
兄の七回忌が近しい者たちで行われた。夫と二人そろって出席した私に、三人の義姉は口々に、
「美代子さん、いいわねー、ご主人がお元気で。お二人を見ていると本当に

うらやましい」
と、実感をこめて話しかけてきた。
私は四人の兄と妹の六人兄妹であった。この四人の兄のうち三人も亡くなってしまい、今ではたった一人、三番目の兄しか残っていない。私は妹と、
「淋しいけど、残った三人仲良くしようね、だんご三兄妹だね」
と話し合った。
その日は亡くなった兄たちの中で、



一番若い四番目の兄の法要であった。この兄は長らく椎間板ヘルニアで苦しんでいたが、早く会社をやめてからは割と元気にみえた。畑をやったり家族旅行に出かけたりして生活を楽しむ努力をしていた。たまに私が遊びに行くと、
「よく来た、よく来た」
と心から歓迎してくれた。その兄がまさか心筋梗塞で急に亡くなるとは、誰も予想していなかった。それだけに家族の戸惑いは大変なものだった。残された、私より若い義姉は独身の一人娘と二人でひっそり暮らしている。夫婦連れの私たちを見る目は、しんから羨ましそうだった。
上二人の兄も、それぞれ平均寿命には間がある七十歳前後に亡くなっている。一番上の義姉は、現在娘さん一家と同居の生活だ。彼女いわく、
「パパが元気なとき、一緒に外国旅行に行こうとよく言っていたけど、その頃は、毎日顔つき合わせているパパとは行きたくなかったの。でも今になって考えたら、行っておけばよかったと思うのよ」
この義姉は何をするにも娘、娘で、兄はいつも一人で行動していて淋しそうだったのを、ふっと思い出しながら聞いていた。義姉は話を続ける。
「同居している娘が家族で旅行の計画を立てているから、〝一緒に行きたい！〟と思っても、邪魔がるの。こんな時、パパとだったら何の気兼ねもなく行ける。気を遣わずに一緒に行動で

きるって尊いことよ、美代子さん」
彼女は私に、夫と共に過ごせるすばらしさをアピールする。私は照れくさそうなゼスチュアをしてふざける。
また二番目の義姉は、同じマンションの別階にいられる彼女のお母さんの介護と、体調をくずした兄の世話の板ばさみで随分苦労した。義姉がお母様の所へ行っている間に、兄は一人で何かをしようとして、歩けないのに動いて事件を起こす、との話を私はよく電話で聞かされ、返答に困ったものだった。そこで、何かのお役に立とうと私は何度も兄の家に伺ったが、何から何までご自分でやらなければ気がすまない性格で、お手伝いできなかった。そのうちお母様が亡くなり、続いて兄も数カ月の入院後息をひきとった。まだ一周忌も迎えていない。身体はらくになったが毎日に張りがなくつまらない……と義姉はこぼす。
「美代子さん、私ね、毎日ウォーキングをしているんだけど、一人で歩くって本当につまらないものよ。花がきれいに咲いていようが鳥がいい声でさえずろうが、相槌を打つ相手がない淋しさって悲しいよー。ご主人がそばに居てくださるって最高よー」
「そうねー、今を大切にしなくてはねー」



私は社交辞令でうなずきつつ、高層マンションの一室で外にも出られず、一日中椅子にじっと座っていた兄の姿が脳裏を走る。義姉はどちらかと言うと、お母様第一だったように思えた。やっぱり私は小姑だ。

さて、一人元気でいてくれている三番目の兄も、今回夫婦おそろいでみえているのになぜか、皆あまり話しかけない。それと言うのも、この義姉は交際がお好きでない。小姑ついでに言わせてもらうと、兄は義姉に退職後、
「家の中にいたらボケてしまう！」
と心配のあまり、とにかくどこかよそへ行くように言われている……というのだ。
「雨や風の日も？」
と聞くと、そんな日は図書館とかデパートに行くようにしているとのこと。さんざん家族のために働いて、やっとゆっくり家で過ごせるようになったというのに、毎日どこかへ行けとは……。私は怒りさえおぼえてしまう。が、これはよその家のこと、私が口出しするわけにもいかないので、そのぶん自分の家を温かい環境にしようと思う。
いろいろなタイプの義姉たちに、代わる代わるすすめられたお酒もほどよく回り、帰りの車中は隣に座っている

尊い夫と共に〝感謝疲れ〟も手伝って、トロトロ眠ってしまった。

自分のしあわせ度の再確認ができた有意義な法要の日であった。

ちょっとちょうだい

荒木裕子

夫の母が庭づたいにやって来る。今度は何だろう。ここのところお酢が続いているからそろそろ味噌かな。おかしさ半分、うっとうしさ半分で待ち構える。「裕子さん、すみませんね。マヨネーズある？　買うの忘れちゃって」。おっと、マヨネーズは新手だ。「はいありますよ。これくらいでいいですか」と、姑の持ってきた器にマヨネーズを絞り出す。

夫の母の物忘れがひどくなり始めて、そろそろ一年になるだろうか。最初の頃は、一週間に一度くらい「トマトをちょうだい」「玉ねぎある？」とよくある貸し借りの範囲だった。私も、にんじん一本、じゃがいも一個をもらいに姑のところへ駆け込むことがあるから、おたがいさまと思って気にもかけなかった。

ところが、その頻度がだんだん上がって行き、しかも同じ品物を毎日のように「ちょうだい」と来るようになって、初めてこれはおかしい、と思うようになった。毎朝サラダに使うレタス、スーパーに行けばいやでも目につくし、買わなくてはと思うはずなのに、姑はまるでわざとのように毎日忘れる。十日間でうちのレタスは三個お隣へ進呈された。

だが、差し上げるのはまだいい。同じ食品をだぶって買ってくるのには、ほとほと参ってしまうのだ。食パンを三袋ぶら下げて来て「おかしいのよ、冷蔵庫にこんなに入ってるの。功（買い物なんか金輪際するはずのない夫の弟）が買ってきたんだと思うんだけど。裕子さん一つもらってくれない」賞味期限のはるかに過ぎた食パンをありがたくいただいて、こっそりゴミ箱へ運ぶのは何ともやるせない。しか

し、買い過ぎを人のせいにするというのはどういうことだ。姑なりに「失敗した」と感じているのだろうか。

こんなこともあった。うちで作ったカレーをおすそ分けした時のことである。翌日の夕食時になって「福神漬けない？　今日カレー作ったんだけど、うっかりしちゃって」ちょっとちょっと、忘れるにも程がある～と内心思いつつ、まっいいか、と話を合わせていたら居合わせた夫が「違うだろ、うちからあげたんじゃないか」と訂正してしまった。その時の姑の、きまり悪そうな表情が忘れられない。

まあ、この程度のことなら内輪で処理することができるからどうって事はないのだが、他人が絡んでくるといささかやっかいである。姑が知人宅を訪問する約束をしたのはいいのだが、その日時を聞いても聞いても忘れてしまう。メモをしても、メモしたこと自体を忘れてしまうからほとんど役に立たない。その時は何と十五分の間に七回も電話をかけて、「伺うのいつだったかしらね」と確認したものだから、その知人はついに怒り出してしまった。無理もない。たぶん本人は、電話をかけたことすら記憶に留めることが出来ないのであろう。

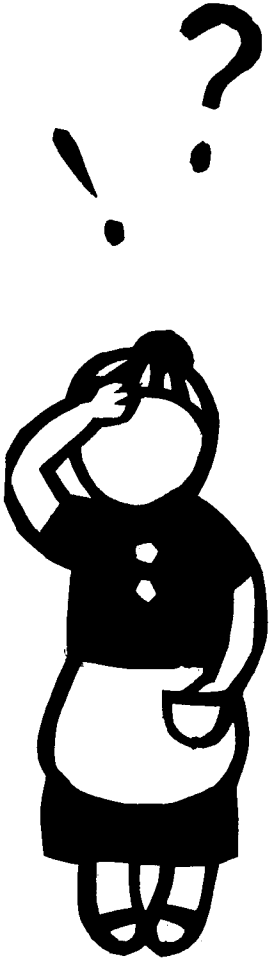
はっきり言って私は他人だから、姑のこうした状況を客観的に眺めているし、むしろ愉快に思うことすらある。しかし、実の息子である夫の気持ちはどうなのだろう。ある時姑が「淑子（夫の姉）から旅行のおみやげをもらったわよ」と、紙袋いっぱいのお菓子を持ってきたので何個か分けてもらった。ところが、五分もしないうちに再び現れて「淑子のおみやげが」と言う。「さっきいただきましたよ」と言ってお引き取り願う。数分後またお土産、とやって来る。三回目にとうとう夫が切れてしまった。

「何回来るんだよ。もうもらったって言ってるだろ。しつこいぞ」。夫の見幕にも驚いたが、その声を聞いた姑の反応には思わず息をのんだ。持っていた紙袋を放り投げると「何であなたに

そんな言われ方をしなくちゃならないの。いいことをしようと思ってるだけじゃないの。ああ、情けないわねえ」。何度も何度も紙袋を投げつけながら繰り返した。やがて気持ちが納まったのか、散乱したお菓子をゆっくり拾い集めると帰って行った。

夫も私も嵐が過ぎ去るのをただじっと見守るしかなく、姑の姿が消えた後もお互い言葉を交わすのがはばかられた。ぼけてなんかいない、と私はその時思った。物忘れがひどくなっていろんな失敗をすることを、姑自身がいちばんつらく感じているんだ。プライドを傷つけられるのを何より悲しく思っているんだ。夫もそうかもしれない。だからあんなに怒ったのかなあ、と可哀想になる。

今日も、「裕子さん、悪いけどりんごをちょうだい、買い忘れちゃって。その代わりこれを持ってきたわ」と、二週間前に私があげた文旦を差し出す姑である。このまま元気でいてほしい、これ以上進行しないでね、と祈る日々が続く。



いい人

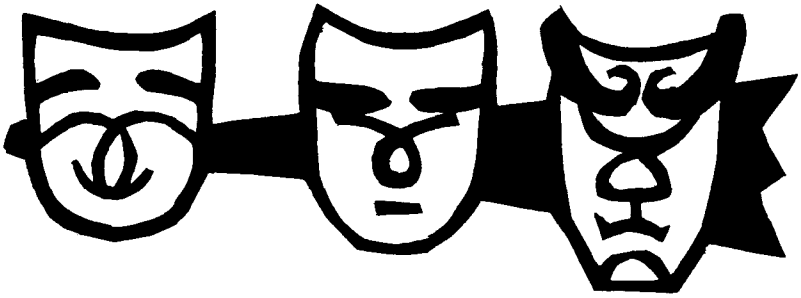
東京都八王子市　浅川涼子

家にきていた下水道工事の人が、感心したように言った。

「お宅の旦那さん、ほんとにいい人だねえ」

私は一瞬、言葉に詰まってしまった。夫がいい人だなんて……。私は思わず言ってしまった。

「そとづらがいいだけですよ」
「いやいや、旦那さんの顔を見れば分かるよ。やさしい顔しているじゃないですか」
私は苦笑するだけで、返す言葉がなくなってしまった。その工事の人のほうが、夫よりずっと感じがよかった。豪快だけれど親切で目がやさしかった。
私にはあなたのような人のほうが、本当にいい人に見えるけれど、などと思ったけれど、まさか口に出すこともできなかった。
昨日、夫が下水道工事に関して説明を受けていたけれど、そのときに「いい人」を演じたのだ、と私はうんざりしてしまった。夫は誰に対しても「いい人」を演じてしまう。ニコニコと笑みを浮かべて接する。電話の応対でもそうだ。誰に対しても、自分の弟たちに対しても、やさしい声を出している。
こんなにのべつ幕なしにいい人をやっているから、疲れてしまうのだろう。とても演じきれるものではない、けれど他人には演じ続けてしまう。強迫観念にでも追いかけられているのだろうか。そうなると、どこかで精神のバランスをとり、帳尻を合わせる必要があるようだ。
そこで、バランスをとるために利用されるのが家族、特に妻の私である。不自然に自分を殺している部分のはけ口のすべてが私に向けられる。向けられた私はたまったものではない。夫が私に対する顔はニコリともしない、苦虫をかみつぶしたような顔である。
夫が外出先から帰宅したとき、顔を見ているとそとづらからうちづらに変化するのがよく分かる。ドアを開けて居間に入りかけた顔は、まだ穏やかだ。それが見る見るうちに怖い顔になる。
まるで「ジキル博士」が「ハイド氏」に変貌していく過程を見ているようだ。
夫の怖い顔ほど、いやなものはない。こちらに落ち度でもあるのでは、



と狼狽してしまう。逃げ出したくなってしまう。別に夫に隠れて悪いことをしているわけではないのだから、正々堂々と怖い顔に立ち向かえばいいのだけれども、どうにも萎縮してしまうのだ。

「そんなに不機嫌な顔をして、自分でも気が滅入ってきて大変でしょ」

と、問いかけたいところだが、一日仮面をかぶっていたのを脱ぎ捨てて、本来の自分のスタイル、不機嫌男になっているのだから、本人はすこぶる調子よく、くつろいでいるらしい。周囲にイライラを撒き散らし、自分は軽くなっていくわけだから。

ようするに家族に依存して生きているのだけれど、本人がそのことに気がつかないかぎり、死ぬまでそのスタイルを押し通す。私の父は九十二歳で死ぬまで八十七歳の母に依存し続けた。

夫の父は、二十年近くの間、嫁の私に依存し続けた。

夫は、いつまで私に依存し続けるつもりだろう。死が二人を分かつまでだろうか。

どっちにしても、私の周りにはなぜ、依存男ばかりが集まるのだろう。私はいじっぱりで強そうにみえるかもしれないけれど、寄りかかられて必死に耐えているだけだ。

「お願いですから、いい人やめません？　そうすれば、バランスのとれた、本物のいい男になれるんですよ」

と、いくら夫に問いかけても、理解してもらえない。いい人を演じる夫の、そとづらとうちづらの距離は開くばかりである。

父のマーキング

奈良県奈良市　田中慶子（54歳）

日曜日夜のNHKテレビ「クイズ日本人の質問」を楽しみにしている。司会者と出演者の機知に富んだ軽妙なやりとりがおもしろくて、私はお腹の底から笑う。「笑うって何て楽しいのだろう」と笑えるしあわせを噛み締めながら。

先日その番組に歌が一首登場した。

「あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む」

クイズの問題ではなかったが、私は「かも」の意味が思い出せなかった。そこで中学時代の『万葉集評釈』を居間の本棚から取り出すと紙が挟んである。見ると広告のちらしで、裏に何か書いてあるのはまたまた亡父の字だ（「かも」は詠嘆の意だった）。

これより二カ月前には私の世界史の教科書に絵描きだった父の書き込みをみつけた。映画「エリザベス」を見て、彼女の後の王位継承者が気になり、高校時代の本を引っ張り出して来たのだが、そこに私以外の字の書き込みを見つけた時には本当にびっくりした。

私しか開いていない教科書なのに一体誰だ？

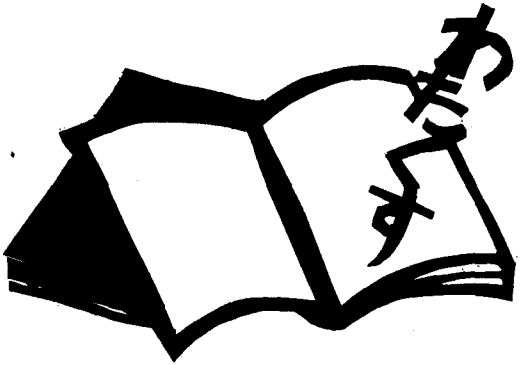
まるで留守中に見知らぬ人に上がり込まれた気持ちだった。その字を睨みながら考えて気がついた。これは五年前九十二歳で亡くなった父の字だった

のだ。私は驚きと感動に興奮した。

父の興味はヨーロッパは素通りして、専ら中国である。

教科書の余白に「西夏文字」と書き込みをしているのは、父は西夏文字の存在を知らなかったからなのだろう。

「酒楼胡姫」という書き込みもあった。本文を見ると「酒楼（料理屋）では胡姫（ペルシャ女）が接待にあたり、西域の音楽を聞かせ、太平楽土をたたえる都の人々を大いに喜ばせた」のところに下線を引いている。都とは長安である。



このほかにもある下線を見て、これはどちらが引いたのだろうと一瞬迷ったが、父のはインク、私は鉛筆ということにすぐに気がついた。父と私の、インクや鉛筆で引かれた赤、青、黒の色とりどりの下線で、教科書はにぎやかなことである。文人画のところでは父の赤い囲みがびっしり並んでいた。

そんなことがあったので今回は父の字だとすぐ気がついた。ヒエログリフ文字より解読のむずかしい、絵のような字を何とか読み下す。

「山上の政雄（父の名）作　わたくすは今は罷らむ笛泣くらむそも三味線も吾を待つらむぞ」

私は思わず笑ってしまった。山上憶良の

「憶良らは今は罷らむ子泣くらむその彼の母も吾を待つらむぞ」

をもじっているのだ。生前お酒が入って上機嫌の父が、自分のことをおどけて「わたくす」と言っていた様子が目に浮かぶ。

亡くなった父がふいに目の前に現れた気がした。

父は、クラス会旅行で母が留守になると我が家に滞在していた。絵を描き笛を吹いていると我を忘れると私に言っていた父は、我が家では遊び道具がなく退屈して「早く家に帰って笛や三味線を弾きたい」とよく言っていた。

退屈紛れに手にした私の本を見て、自分の気持ちを少しふざけて書き付けたのだろう。

この分だとまだほかの本からも何か見つかるかもしれない。

懐かしさに胸がいっぱいになりながら私は思った。

「これではまるで犬のマーキングではないか」

前日は父の祥月命日だった。

（え・小林正子）

ブックク情報

パリ二十区の素顔

浅野素女著
集英社新書
本体700円＋税

パリの案内書は腐るほどあるけれど、この一冊ほど興味深く、楽しく読めるものは珍しい。パリに長く住んだという体験の持ち主であるだけでなく、筆者は独特の柔軟な感覚で、文学に絵画に音楽にと、さまざまな方面にアンテナを伸ばし、パリの歴史と現在を生きる人々の姿を生き生きと描き出しているからだ。

パリには二十の区があるが、それぞれの区にはそれぞれの個性がある。その一区から出発して右回りにかたつむりの殻のように円を描きながら、一つ一つの区の見どころに誘っていく手腕は非凡。パリに行く人にも、行かない人にもすすめたい一冊である。（T）

生きぬく知恵を子どもにどうつけるか

親ができること　できないこと

山田暁生著
教育史料出版会
本体1500円＋税

自分にとって、母親から受け継いだ血と肉とは何だったのか。

これは中学教師として人並みはずれた業績を残した著者が、渾身の力をこめて書き上げた母親への鎮魂歌だ。現代の子どもたちの出会う問題を、母親の残した言葉をからめてときほぐす構成は、子育て最中の母たちにとっても大きな示唆に富んでいる。

不幸にくじけず、世間に流されず、自分自身の考えを持って生き抜く強靱な母親。その母に育てられ、これまた並みはずれた自立力を備えた息子には、母から離れようとする強い遠心力が働く。これは「子育ては子別れ」の逆説が胸にしみる作品でもある。（K）

まるごとガイドシリーズ③ ホームヘルパーまるごとガイド

資格のとり方・しごとのすべて

井上千津子監修
ミネルヴァ書房
本体1200円＋税

いろいろな職業、ことに主婦が資格をとっての再就職に向いている職種を「まるごと」紹介しようという、シリーズの三冊めである。現在既に十冊が出ていて、保育士から臨床心理士、ケアマネージャー、ボランティアまで紹介されている。

これは近頃注目のホームヘルパー編、資格の取り方から仕事の内容、賃金に至るまで詳しく書かれており、やってみたい人には必読のガイド。

しかし一読この仕事は甘くない、と分かるだろう。ホームヘルパーが甘くないのではない、どの仕事もそうのはずで、家庭にいた主婦なら、何冊か読み比べて認識を深めて欲しい。（和）

エッセイスト・クラブ

悲しき上野動物園

東京都東大和市　長谷部治子（38歳）

今、子供に人気があるのは、ディズニーランドである。夢と空想が入り交じった、非日常性が受けている。私が子供だった頃のディズニーランドは、上野動物園だった。

「もはや、戦後ではない」と言われた年から六年後に生まれた。それから更に、六、七年後のことだから、昭和四十三、四年の頃である。

兄は、ゴリラとまんがが好きだった。好きなゴリラをまんがで書くのである。見せてくれるゴリラは、まんがとは思えない緻密さで、繊細な性格を覗かせる。

兄に甘い母は、人込みが嫌いだったが、兄の駄々には勝てず、ついでに私も連れて、上野動物園へと出掛けるのである。当時のディズニーランドだっただけに、よその家族連れも溢れている。

開園、閉園がある場所だから、行きも帰りもそれらの人たちと一緒になってしまう。

帰りの上野駅は、まさしくラッシュ状態である。到着する電車に我先に乗り掛かろうとする人ばかりだった。くたびれた子供を抱え、せめて帰りの電車の中では座りたい。そんな父親たちの欲が、ラッシュを作る。電車が着き、扉が開き始める。開き始めたが最後、駅員の注意の声も届かない。我先にどたどたと、どさくさに乗り込む。私はそのラッシュには、必ず乗り遅れる。母と兄だけは、どうにか電車へ乗り込むことができるのだが、ついでの私は必ず乗り遅れる。姿は見えないが、電車の中から、

「治ちゃん！」の母の声が聞こえる。

そんな不安な状況の中で、

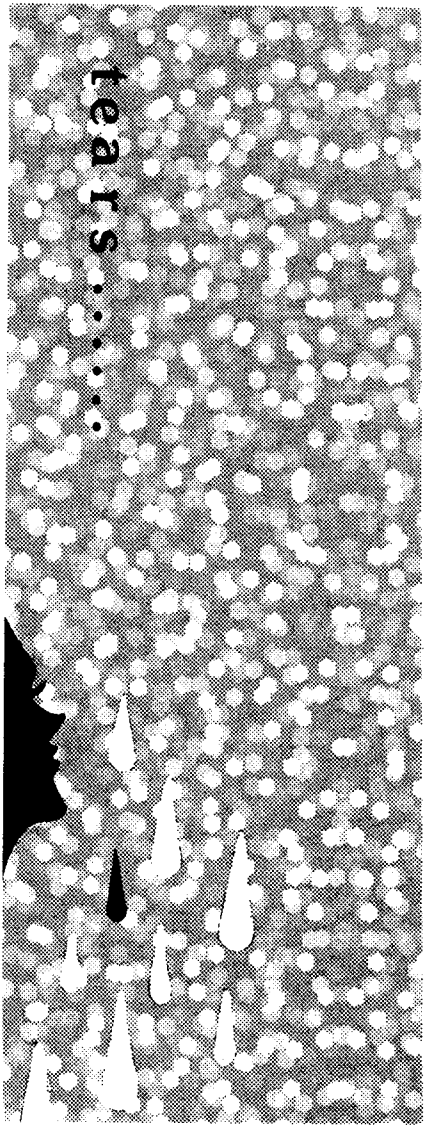
「子供が取り残されてるぞ。入れてやれ」

誰かが、私に気付いてくれる。

大人一人か二人に抱えられ、扉はとうに閉まり、今にも走り出しそうな電車の窓から押し込まれ、危機一髪で間にあうのである。

そして、ホームと線路の間に、ペコちゃんの赤い箱が落ちてしまう。指の間には、手提げのモールだけが残っていた。無秩序で、どさくさの時代だったが、人の親切もどさくさにあった時代だった。

上野動物園へ着くと、必ず見掛ける人たちがいた。兵隊さんたちだった。遺族探しだったのか、困窮した



暮らしのための資金集めだったのか、三人の兵隊さんたちは、アコーディオンやハーモニカなどを奏でては、募金活動をしていた。

三人は、くたくたの軍服を着ていた。一人の兵隊さんは、片足を失くし、松葉杖を突きつつ、ハーモニカを吹いている。高度経済成長時代に生まれた私が、唯一目の前で見た戦争だった。

悲しい音楽を聞いたのは、後にも先にも、その時だけである。音楽にも、悲しさがある。戦争の苦悩も、悲惨さも体験をしていない私だが、兵隊さんたちの姿にショックを受けたせいか、やりきれない気持ちを子供心に感じたのを覚えている。悲しい姿と悲しい音楽。上野動物園と聞くと必ず、この情景が蘇ってきてしまう。

見てまわった動物たちの姿は、何一つ思い出せない。夢と空想しか知らない今の子供たちに、どれだけ、現実の悲しさを知ることがあるだろう。それを知識や歴史からではなく、音楽と姿という最も感性に届く方法で、子供心に感じさせてくれた。片足を失くした兵隊さんが奏でたハーモニカの音色のやりきれない

悲しさは、本物だったと今でも信じている。戦争が終わりを告げ、残るのは悲しさだけである。一つの悲しみが、反戦を誓わせることもある。

Y氏が体験したこと

大阪府豊中市　中松ミナ子

Y氏が去年末、会社一筋で働いてきたトップの座に終止符を打ち引退した。その解放感からか、我がすし店への回数も一日に二度三度と重なり、酒量は日ごと増えていった。

病院の婦長を勤める夫人は時に連れ立って来てくれるが、そのつど心配そうな表情で「おとうさん、もうダメよ、また血糖値が上がるわよ」とストップをかけるが、Y氏はニヤニヤしながら「おれも、よう解っとるのや」と言いつつ「おかあちゃん、もう一杯だけ。なッ」と空の徳利を振って催促する。

息子夫婦も「Yさん、あんなにお酒ばかりでは、奥さんも内心ハラハラで大変やろうな」「せめて酒の肴でも好き嫌いなく食べてくれたらなァ……」と話し合っている。

なにしろ、この数カ月、昼間はパチンコ屋と我が店を行ったり来たり、夕方には駅前のスナックと酒量は増すばかりだった。

とうとう顔も腹も、まん丸に膨張（？）してきた。さすがのY氏も「もうアカン。ちょっと酒を控える。家の中のウイスキーも家内に隠されてしまったんや」とややションボリ。

それでも一日一度は姿を見せ、顔見知りが並べば、それぞれに声を掛け、酒やビールにすしまで振る舞ってしまう太っ腹な人物であった。したがってY氏を慕う人たちは多いし、その分酒量が倍増するのだ。

そのY氏が、ここしばらく姿を見せない。（ひょっとして体調が悪いのかな……）とか（いつものパチンコ屋にも姿がないみたい）と店で話していたら日曜日のお昼、疲れた表情で店に入って来た。

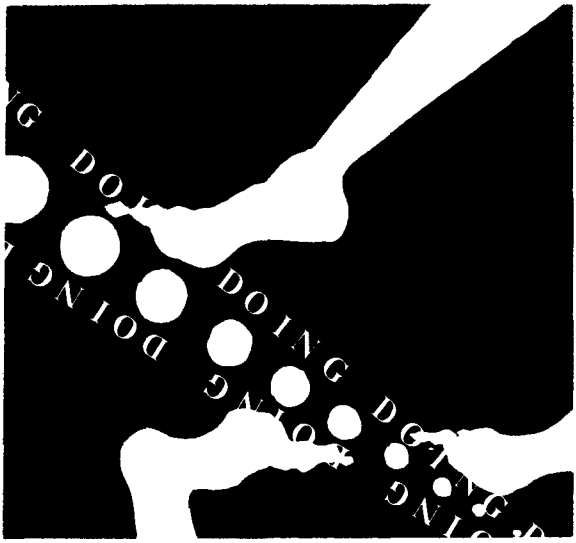
「実はな……」とカウンターに腰をおろすなりY氏の思いがけない体験談を聞くことになった。

それは……Y氏のよく行く喫茶店で出会った知人が民間給食センターの社長で、一人暮らしの高齢者宅への配達に急の欠員が出て困っていると聞き「よーし、手伝う！」と引き受けたそうだ。それから一日、二日、三日とY氏は次第に気分は重く沈んでいく自分の心の内をどうすることもできなかった。

なぜなら、軽自動車で地域地図を片手に給食弁当を

待ち兼ねるお年寄りの元へ急がねばならない。ようやく辿り着いた玄関を入ると高齢者の一人暮らしの住まいには独特の異臭が鼻をつく……。

ベッドから手招くと傍らまで運ぶ。「ありがとう。これで今日も御飯が食べられる」と手を合わされる。そのか細い手に目が移るとY氏は胸がキューとしめつけられたように痛くなる。



何か励ましの一言を掛けたい……と思うが、声を出すと涙にむせびそうで辛くてたまらない。次の配達先は、その昔、習字の先生であった知り合いの女性宅で偶然給食センターの長期契約者であったこと、しかも、かつての美人の面影は見る影もない痛々しい老女に変貌していたことに、耐え難いショックを受けたとも……。

Y氏は夫人と並んで酒を口にし、ほっとしたように「いやァ、参った。とてもおれには続けられん。辛いやら切ないやら……、あの人たちが不幸と決めつけている訳ではないが、しかしおれ自身も年や、妙に自分自身と重なってしまうのや。今まで、あまり気にもしていなかったが高齢社会の現実は不安でいっぱいや」

少しでも人の役に立ちたい、その上体を動かせる一挙両得と、甘い考えで知人の誘いに飛び付いたが、Y氏の感情は到底冷静に〝ビジネス〟として割り切れなかったらしい。

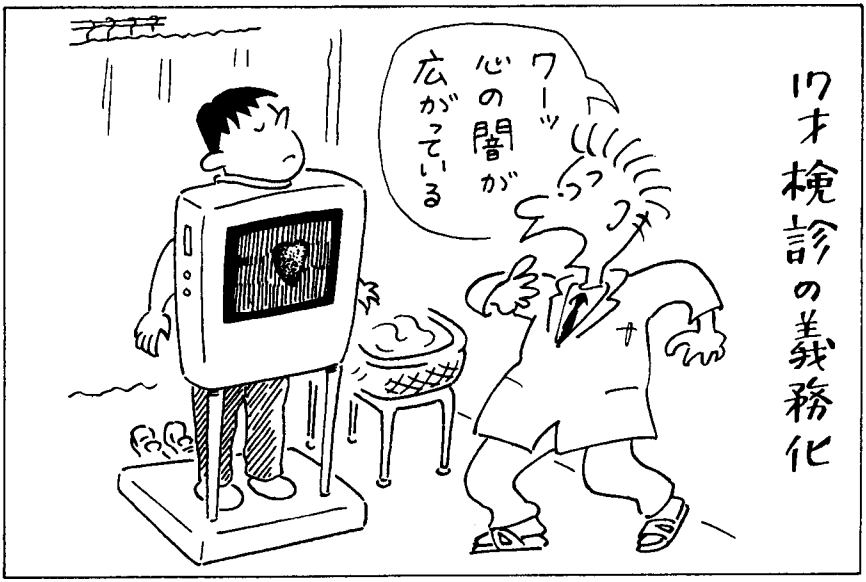
だが、今後、高齢者は、ますます増えるであろう。現実の社会問題をY氏自身の心にも大きく残して、貴重な体験はアッ気なく終わったのである。

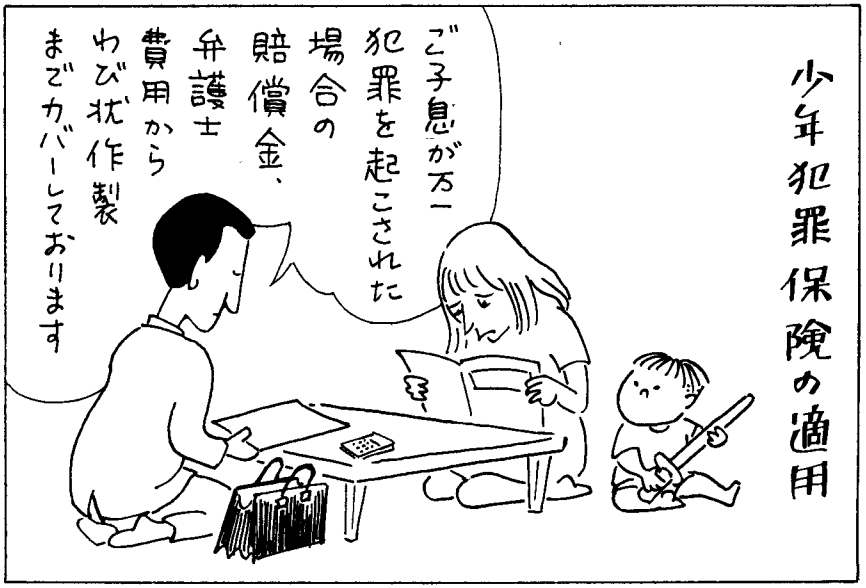
さまざまな人生を歩き、その終わりが来ても人は、それぞれに生き続けねばならないのであろう。

（え・Jasmine）

一筆両断

凶暴化する少年犯罪への対策 ⑯





情が仇―私の事故顛末記―

山梨県甲府市　小田多恵（72歳）

昭和四十三年に車の免許をとってから、運転歴が長いので何回か物損事故は経験した。

人身事故は一度も起こしたことはない。免許証はずっと黄金マークである。

その私が、人に親切にしたばっかりに、昨年は大きな事故を二回も起こしてしまった。

第一の事故は相手がよかった

中学の教師をしている娘夫婦が同じ敷地内に住んでいるので、三歳と一歳になる孫を毎日保育園へ夕方迎えに行くのが仕事である。車で往復三十分位の場所だが、チャイルドシートを二個付けて、私もシートベルトをきちんと着用し、ずっと安全運転を続けてきた。車は私にとって生活必需品なのである。

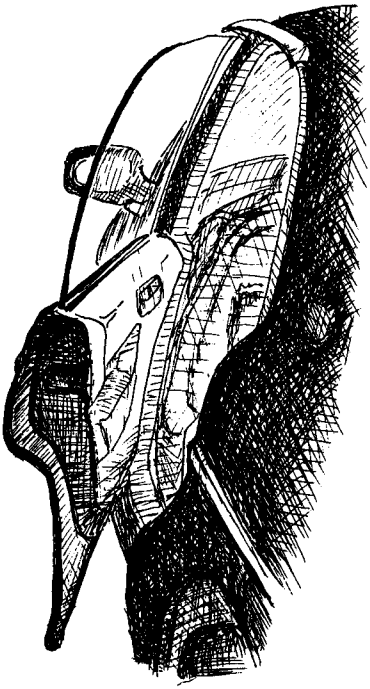
一回目の事故は四月の日曜日、どしゃ降りの雨の日に起きた。クリスチャンの私は教会へ礼拝に行ったのだが、仲良しのN夫人が同じ方向なので、いつも近くのJRの駅まで送ってあげていた。足の悪い方なので、その日は駅から二十分程のNさんのお宅まで送ることにし、玄関先まで車を着けて降ろしてあげた。

家の前の細い道を直進すれば駅前へ出られるというので、どしゃ降りの雨の中を初めての道だったが車を走らせて行った。三分と走らない所で、広い道路と交差していた。雨のため、カーブミラーも止まれの道路標示も見えなかった。

止まらずに一メートル程出た所で、右側から直進して来た車にばーんと衝突されてしまった。幸いにも両方シートベルトはしており、体に傷はなかったが、直進車優先なので警察にすぐ電話して来て貰った。大通りを横切るのに一旦停止しなかった私のミス。

相手がいい方だった。保険でお互いに処理することにし、不運を詫び合って別れた。事故の割合は八対二で保険が支払われたが、私の車はバンパーがはね上がってしまい、エンジンもひどい音がしていて帰って来るのがやっとだった。新車を買ってから七年目で、もう三十五万円の価値しかなく、修理には五十万円掛かるという。残念だったが廃車になってしまった。

しかし一日も車がなくては生きて行けないので、妹が下取りに出した車をただ同然で譲って貰った。見た目はかなり古ぼけているが仕方がない。自分への戒めのためにも、一年位はこれで我慢しようと思った。



二回目の事故は六月二日のことだ。昔の女学校の担任の先生が亡くなり、車で一時間程のシティホールで葬儀があった。久し振りに昔の同級生が何人か集まったので、甲府の駅まで送ってあげたのが不運の始まりだった。

まさかのアクシデント

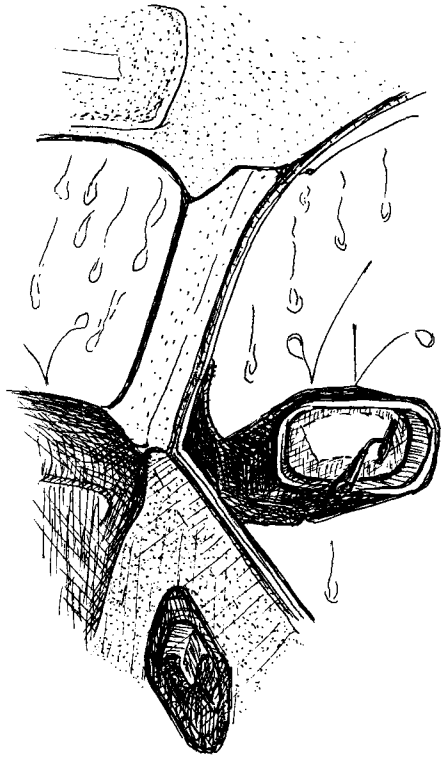
HさんとAさんとMさんの三人を乗せて、駅前の角で車を止めて降ろしたのだが、先に車から降りたHさんとAさんが「どうもありがとうございました」と大声で言った。私はその声を聞いて三人共みんな降りたものと勘違いし、ブレーキを踏んでいた足を上げて二メートルばかり前へ出てしまったのだ。何と後ろのドアは開いていて、三人目の東京から来ていたMさんが片足を外へ出したところだった。

ごろっと外へ転がって倒れている。

さあ！大変だ。私はとっさに骨折かと思ってどきっとした。だが顔をしかめながら起き上がって歩き始めたので、すぐ車を駐車場へ入れ、駅ビルの薬局へ走って、打ち身用の湿布薬を買って来て張って貰った。

もうこれは私の不注意以外の何ものでもない、平身低頭して詫びた。駅ビルには他の同級生もいて、私を見る目はみんな罪人を見る目付きだった。他の友人が石和の病院長と懇意だというので、Mさんをみんなで連れて行って診て貰った。すぐレントゲンを撮って診てくれたが、骨折はない、打ち身だけだという診断だった。Mさんも大丈夫歩けると言う。石和の駅まで送って行って別れた。駅ビルで食べたお昼から病院の費用まですべて私が支払った。

夜Mさんに電話して聞いてみると、「もう起きるのも大儀な程、大腿部が痛んで熱も出て来たみたい。明日また近くの病院へ行って診て貰うつもり。乗りたくもない車へ乗せられて、命があったからいいようなものの下手をすると殺される所だった」などと言う。まったく私も泣きたい気分。わざとした事じゃないのに、とにかく申し訳ない。唯々深く詫びた。翌日当座の医療費として見舞金とお詫びの手紙を送っ



た。怪我が治ってから東京へ出向いて、医療費とお詫びの気持ちを渡そうと思っていた。

Mさんの言い分

ところが一週間経ってから、元気な声でMさんから電話があった。

「私の怪我は肉離れですって、テープでがんじがらめに巻かれてしまったのよ。お相撲さんがよく筋肉が切れたというでしょ、あれと同じ。今まで頂いたお見舞は別にして、今回の怪我は自動車保険で全部償って下さい。保険には入っているんでしょう。何という保険会社ですか」とたたみ込んで聞いて来た。

「貴女にはご子息さんがいるんでしょう。相談したんですか。私は離婚する時世話になった弁護士さんがいるから、何でも相談できるのよ。あんなボロの車、東京には一台も走っていない。よくあんな車へ大事な友達を乗せたものね」

などと元気良く言いつのった。ああ何をか言わんや。二の句がつげない。昔から私は口喧嘩はにが手だ。

「そう、それなら保険会社へ電話してすぐ手配しましょう。私もその方が有難いわ。お大事になさってね」と電話を切った。

保険会社へ電話してみると「警察へ行って事故証明を貰って下さい」と言う。

一週間も経ってから今更と思ったけれど、警察へ出向いて訳を話した。

担当の警官が、

「他人ですか？　同級生で乗せて貰いながら、良くそんなことが言えるね。情が仇になりましたね。救急車で入院でもしたのなら別だけど、歩いて通院しながら、都会の人はひどいもんだ」などと同情してくれた。事故現場へ二人の警官が私と一緒に行って下さり、その時の様子をくわしく調べて下さった。

「相手のMさんが甲府へ出て来て、一緒に立ち会って事故証明は出るものです、お医者さんの診断書を持ってMさんに警察へ来るように話して下さい」と言う。すぐしないと貴女は益々不利になりますよ、とも言って下さった。それから何回も東京へ電話したが、「私は怪我で動けない。診断書は今日送りました」という返事が来た。

六月十八日に「肉離れ、全治通院治療二週間」という診断書が送られて来た。すぐ警察に持って行くと

「相手が来なくても事情が解ったから事故証明を書いてあげましょう。全治二週間では点数は五点減点になるけれど、罰金も免許停止もありませんよ、来年の六月まで無事故でいれば五点も帳消しなります」

と言って下さった。何と有難いことか。神様はやっぱり私を守っていて下さった。私はMさんに、

「保険会社へいくらでも納得のいく金額を請求なさって下さい。一日も早い御全快をお祈りしています」

とはがきを出した。

Mさんも満足気な保険金

八月の中旬、保険会社から電話があった。「Mさんから電話があっても決して応待しないで下さい。当方ですべて責任をとりますから」ということだった。

保険会社から七月二十三日、二万三百五十円病院へ支払ったとの通知が来た。十月十九日、二十七万八千六百八十三円をクリニックへ支払済みの通知が来た。そして十一月十二日、六十五万六千八百円の通知、これはMさん当てに慰謝料として支払われたものだった。Mさんからは十二月二十五日「これで一応治療は打ち切りました」というはがきが届いた。満足気な、万歳！とでも言いたげなはがきだった。

血圧を診て頂いている近くの先生に聞いてみたら、「肉離れというのはテープで固定しておきさえすれば、自然治癒で治るものですよ。医者も取り過ぎ、慰謝料も良く保険会社で出しましたね。余っ程ねばり方が強引だったんでしょうな」と苦笑いしていた。

私は長い間車を運転していて、運転しているからには、車に関する責任は全部自分が負うべきだと思っている。豪雨の日に初めての道は通らないでいよう。うかつに人は乗せまい。特に同級生にはサービスは止そう。大変遅くなってからだったが、良い勉強ができたと思った。

暮れに帰省した息子に話したら、「民事裁判へ訴えれば保険金の不法請求ってことで、勝つかもしれないけれど、お金も掛かるし、月日も掛かるし、厭な思いもしなければならないよ。高い月謝を払った社会勉強だったけど、肝に銘じて慎重に運転することだね」と慰めてくれた。

この二月、私は新しい車を買った。去年の二つの事故を良い教訓にして、八十歳過ぎまで車を運転していたい。身心共に自立して、経済的にも若々しく生きていたいと思っている。

（え・橋本美智子）

わいふ文章講座のおすすめ

公民館、女性センター、社会教育課などのご依頼で、しばしば「わいふ文章講座」を開いています。

編集長田中、副編集長和田、「わいふ」から巣立ったライター達を講師とし、五回から十回までのコースがあります。

その他に、**「子育て」「教育」「女性」「高齢者」「社会参加」**など、各種の問題について講演をいたします。老人ホーム情報センター主任研究員の水落も担当します。

お住まいの地域で開きたい方は、お電話をください。資料をさし上げます。それを持って公民館、教育委員会の社会教育課などに開講を頼んでみてくだされば、引き受けてくれるところも多いと思います。

●PTA主催の成人教育、家庭教育学級での講師としてもご依頼ください。

FREE TALK
フリートーク

琢磨くんのこと

東京都渋谷区　柴田照代(65歳)

十数年も昔のことである。保護司をしていた夫はせっせと報告書を書いていた。現今では「少年やーい」と探すほど少子化が進んでしまった渋谷区だが、当時は中・高生の数も今の三倍位はあったと思う。

新宿、渋谷という盛り場が近くに在ることも災いして、誘惑に負ける少年も多く、夫は数人の対象者を保護監察していた。私は簡略な家計簿をつけ終わって、ふと夫の手許を見たら「豚磨」という字が飛びこんできた。「これなんて名前?」と訊くと「タクマだよ」と夫。「なら王偏じゃない」「あ、そうか、いくら親を泣かせているトンマでもこりゃまずい」と書き直した。

トンマだった琢磨君も夫とつき合って二年足らずで「良好解除」となって立派に立ち直ってからも、年賀状は必ず送ってきた。結婚しました。子どもが生まれました。そんな年賀状を見て喜んでいた夫も亡くなって、もう四年になる。

保険業界の裏側……その後
辞職勧告

新潟県新津市　柳本綸子(56歳)

昨年の十月二十七日午後一時、私は東京から来た筆頭部長に支社へ呼び出された。

私には全く心あたりのないままに出向くと、応接室のテーブルの上に「わいふ」二七七号の私の文章のコピーが乗っていた。それでも私は何で呼び出されたのかわからなかった。

部長から、F生命東京本社業務部長の所へ私の文章がもちこまれて、業務部一同かんかんに怒っているので、自分としては貴女をかばいきれない。事を収拾するためには、辞表を出してほ

しいといわれた。
その後一行毎に検証する作業に入っていった。私の頭の中はまっ白になってしまい、ただ頭の中で本当の事しか私は書いていないという思いだけが空転していた。
むこうのペースで作業はどんどん進み、この文章は全て比喩、揶揄であり、捏造されたものであると決めつけられた。

そして懲戒免職（私の立場はこの言葉はない）のところであるが、私の支社への貢献度を考え、温情にて依願退職にしてやるともいわれた。そういいながら、退職金はゼロである。
ショックだった。二七七号が出てもう半年以上もたっているのに、何故今なの？　また、「わいふ」の会員の中にそんな人がいたのだろうかという思いで悲しかった。

ビルの外に出て空を見たら、まっ青な空だった。涙が出ると思ったのに意外にもさっぱりとした気持ちで「あーこれで全てが終わったんだ」と思った。

どうして解雇なの？

私の身分は委託というパート労働より不安定なものだった。一件千九百円だったものを、八年位前に私がリーダーシップをとり二千百円にしてもらったことがあった。最近は仕事中のケガについての保障、即ち傷害保険の適用について交渉中だった。組合がないから直接言うしかない。いつも私は表面に出されて、損な立場に立っている。
要するに私は会社からうとまれていたのだ。仕事の失敗は絶対許されないという緊張感でいつもピリピリしていたような気がする。
一昨年から私を辞めさせる意図があったのだと思える。二人で充分足りるところを三人体制にし、私の仕事量を極端に減らしていった。
この半年間の収入は月三万円位であ

ったが、私は自分から辞表は出さなかった。本社にも支社にも抗議をしていた。業をにやしての最後の手段に出たのだと思えた。本当に卑怯なやり方である。

仕事を頼まれれば、早朝は五時、時には泊り込みの仕事もしてきた。全国の中でも私だけだろう。

現在の私は

辞めてみて、正直なところ同期の働いている女性達が心底うらやましい。送別会もなく追われる犯罪者のような退職だった。雪まじりの海からの冷たい風が体の芯まで凍らせるような日に合同朝礼に最後の挨拶に出向いた。

涙は決して見せまいと思った。

「十三年間楽しく仕事をさせて下さりありがとうございました」ときっぱり言いきった。

まだまだ気持ちの整理はできていない。

他社の面接士の仕事を捜そうと思った矢先に新潟県の不祥事が続き、また埼玉県の保険金詐欺事件がマスコミをにぎわしているのを見るにつけ、人生の裏側を見、暴く仕事はもういやだと思うようになった。

残された私の人生、違う色どりで華やいでみたい。もうしばらく考えてみよう。

本当に最悪の結末をみてしまったけれど、本社業務部へ持ちこんだ貴女、また掲載されたら、持ちこむのでしょうか……。

歩く会に参加して

東京都武蔵村山市　大沢陽子

二月二十六日、玉川上水ウォーキングクラブの行事に参加した。集合場所は、東大和市駅、十時。玉川上水駅、十時四十分。そこから拝島まで歩くのだ。私は天王橋でみんなを待った。玉川上水にかかるその橋の近くに大きな欅の木があって、その根が座るのにちょうどよかった。大きな根に腰掛けてぼんやりとみんなを待った。

予定通り、十一時二十分ごろ、先頭の人たちが通り、林さんも現れた。七、八人の人たちが先を行き、次に私たち二人が続き、後ろの人たちの姿はまだ見えない。途中、鴨たちの泳いでいる所があった。水がきれいだった。話しながら歩いていると、アッという間に平和橋。その近くの福東会館には、十二時十分ごろ着いた。もっと歩いてもいいなと思った。

一時まで昼食。それから話し合い。まず柳下さんが、この会を作ったわけについて話した。自然が好き、歩くのが好き、そして都市を流れる川をきれいにしたいと願っている。それで、水に沿って歩く会を作ったのだそうだ。そのあと、どういう歩き方がいいかという話をしてくれた。踵を先に着くようにすると上下にも、左右にも揺れないで疲れずに早く歩けるのだそうだ。姿勢をよくして、さっそうと歩きたい。

総勢三十三人。はじから自己紹介が始まった。いろんな人がいた。気功の先生をしていたという人は、若さを保ち姿勢をよくする秘訣を教えてくれた。①バランスのとれた食事、②腹筋を鍛える、③腹式呼吸を心がけること、だそうだ。自称・鈴木真砂女さんの研究所所長という人もいた。「真砂女さんは九十歳を過ぎた俳人で、銀座で〝卯波〟という小料理屋を開いています」と柳下さんが補足説明した。私は思い出す句を紙に書きつけた。

羅(うすもの)や人悲します恋をして
湯豆腐や男の嘆ききくことも
熱燗やいつも無口な一人客
死のうかと囁かれしは蛍の夜

林さんが、真砂女さんの句?と小さな声で言って書き写した。「今度の文集に〝熱燗〟っていう題で書いたんだ」と言っていた。

自己紹介は二時十五分ごろ終わって、三十分から句会になるのだそうだ。遅くなりそうだったので、句会には参加しなかった。

家に帰り着いて、夫に、今日来た人の中に真砂女さんのファンがいた事や思い出した句のことを話した。

落葉焚く悔いて返らぬことを悔い
死にし人別れし人や遠花火
花冷えや簞笥の底の男帯

という句もあるよと教えてくれた。夫は、真砂女さんの句集も随筆もみんな読んでいる。だからその生涯についても詳しい。

この夜、夫は前に作って忘れていた自分の句の推敲を始めた。

くちなしの花を雨打つクマ逝きて
(愛犬)
枯れ葉舞うナラの梢にカラス二羽
冬日落ちカラスの声も寒々と

暮れせまり焼き芋売りの声悲し
娘去り妻と歩みぬ枯野山

翌朝、「ここ読んだ？」と夫の差し出す新聞に、新井章という人の短歌が載っていた。

沢鳴りはつねの如くに響けども
　聞くことのなき妻となりたり
山深き谷に生まれて同じ水
　飲みたる縁かろやかならず
雪深きこの山道を橇にのり
　共にまろびし妻若かりき
あたたかき日差しの中に相抱きし
　山の落葉の匂ひ忘れず
落葉乾く音のかそかな岩かげに
　触れしぬくもり今還りくる

七十六歳でこういうみずみずしい歌を詠める感性をすごいと思った。私が声に出して読んだら、夫は声を殺して泣き、急いで顔を洗いに立った。「いい歌を読むと、自分のなんかおかしくて読めない」と言い、「奥さんに死なれた男はみんなこういう気持ちになるんだ。先に死にたいよ」と言った。こういう歌を読んで思わず泣いてしまう夫は、私が死んだら泣く人なのだろう。

「共にまろびし妻若かりき」と何度も心の中で言ってみた。

お相撲さんの断髪式

川崎市中原区　島　初美（58歳）

平成五年の「わいふ」二四三号に、「今お相撲が面白い」という私の文章が掲載されましたが、その時の関取、栃乃和歌さんが、ついに引退することになった。主人が後援会に入っているので、断髪式のお知らせがあり、後学のためにもと、初場所が終わったばかりの今年一月三十日、主人と両国国技館に出掛けることになりました。

両国駅に着いてみると、ぞろぞろと結構多くの人たちが国技館へ向かっていました。正面玄関の所では、紋付き羽織り袴の栃乃和歌関が大勢のファンに囲まれていて混雑していました。左側に茶屋がずらっと並んでいる入口があるので、そこで予約してあった弁当を受け取り、私達は初めて国技館に入りました。申し込んだ席は二階の正面椅子席ですが、なんと幸運にも天覧席の隣で、一番前です。後援会々員であるお陰かなと、二人で喜びました。気が付くと、会で顔見知りの方々が近くにいたり、土俵のそばの砂かぶりや升席で見かけましたので、声をかけたり手を振ったりしてなごやかな雰囲気でした。

十一時開場、十一時半開始で、「触れ太鼓」から始まり、「幕下決勝五番」「相撲甚句」「初っ切り」と進みます。初っ切りというのは、二人の力士が面白おかしく試合をして見せて、行司が何度も取り直しをさせます。これは大いに笑わせました。それから関取りの髪結いの実演もありました。このような出し物には、すべてスポンサーが付くようです。

やがて十両の土俵入り、続いて取り

組みが本場所さながらあり、かつて幕内で活躍した人がかなりいて、なつかしくもあり、悲しくもありでした。それが終わると、横綱曙の綱を締める実演がありました。ところで我々の席からは、曙関の顔が見えますが、反対側の向正面の人たちにとっては、最後まで後ろ姿しか見えないわけで、気の毒でした。そして、当代の曙・貴乃花・武蔵丸三人の横綱の土俵入りがありましたが、若乃花は休場で残念でした。

次に、櫓太鼓打ち分けの実演があり、説明では、昔は太鼓の打ち方で親方衆を呼んだり、早朝の稽古始めの時間を知らせたそうだが、今では近所迷惑のため打つ回数も減ったそうです。全取り組みの終了を知らせる時の太鼓は、場内の興奮が静まっていく有様を伝えるとかで、トントコトントコ名調子で打ち鳴らし拍手喝采でした。

幕内の取り組みが進み、初場所で優勝したばかりの武双山が貴ノ浪に負けたのには、がっかりでした。しかし一度大関を落ちた貴ノ浪が初場所に十勝をあげ、また復帰できたのは良かったと思いました。

ところでいつのまにか主人の姿が見えないなと思っていたら、なんとちゃっかりと砂かぶりの特等席の知人の処にお邪魔して、その迫力を楽しんできたのでした。

最後に断髪式となり、百人以上もの人が次々と土俵にあがり、椅子に座っている栃乃和歌の髪にハサミを形ばかり当てました。

栃乃和歌関には、郷里の和歌山県の後援会、出身大学の後援会、部屋の後援会、東京の県人会等など、沢山のファンがいて、このように盛大に出来たのです。全盛期は平成三年から五年にかけてで、身長百九十センチの大きな体で期待されながら、怪我のために横綱・大関にはなれなかったけれど、いぶし銀のような幕内在位十年以上、三十六歳引退は立派な成績です。思えばその頃から、若乃花、貴乃花の活躍で相撲界は大人気でした。国技館の四方の天井には、優勝した力士の大きな絵姿が飾ってありますが、貴乃花が断然多かった。

しかし平成十二年の今、若乃花も春場所で引退し、一つの華やかな時代が終わりつつあるようです。

知事選開票に行く

熊本県天草郡　松本とみよ（44歳）

熊本県で民間出身としては初の女性知事が誕生した。

二年前、『YOU熊本の女性』という男女共同参画のための広報誌を編集するので、一年間県庁へ通った。その時、熊本では女性が認められることなんてあるのかしら、と暗い気持ちになったのに、世の中はホント何が起こるかわからないものだ。

ところで、選挙にはいつも傍観者の立場だった私。でも投票所で選挙の立会人として意外な人物が座っていたりすると、一体誰が決めるの？　私も

やってみたいと思い、選挙カーを見かけると、ウグイス嬢がしてみたい、私にもやらせろと思っていた。

それが今回、意外な形で選挙にかかわることになった。特派員をしているテレビ局のディレクターから、K町の開票所へ行ってくれる人を捜していると電話があったのだ。

「つまり、K町の知人に当たれってことですか？」と聞くと「いや、松本さんでもいいんだけど」。つまり私に行ってほしいんでしょ。早く言えよ。持ち前の好奇心がムラムラ。K町まで車で五十分かかるが、「行きます。行きます」。つまり選挙の開票所に行って、開票結果を一刻も早くテレビ局に知らせろということなのだ。

選挙の一日前にテレビ局の腕章、開票所立ち入り要望書、調査マニュアルが送られて来た。私はテレビ局三社の代表として開票所へ行くことになった。マニュアルに「時間が命です」とあり思わず緊張が高まる。ケイタイが必要とのことで知人に借りることにする。K町は山の中、ケイタイが通じるのか？　心配なのでテレホンカードも用意。時計は時報に合わせ、車にガソリンも入れた。

場所はK町町民体育館。念のため当日は午前中にそこまで行って場所を確認した。とてもここで夜開票があるとは思えないほど静かだな、こんなものかと思った。看板も出ていない。これが後でとんでもないことになる。

絶対に間違ってはいけない状況であればあるほど、どうも手違いが起こりそうないやな予感がした。

午後七時三十分には開票所にスタンバイということだ。投票終了は八時。家を六時半には出なければならない。ケイタイを借りに行くと、なんと外出して帰っていないと言う。万が一に備

えて別の友人にケイタイを借りる相談をする。ようやくゴメンゴメンと知人が帰って来る。ここでケイタイの操作方法を教わる。大丈夫かいな。不安がよぎる。

会場には十五分前に到着。早速テレビ局三社にスタンバイの報告。

しかし、開票所と聞いていたK町町民体育館にはあかりひとつついていない。変ではないか？　心配になってテレビ局に「大丈夫でしょうか？」と聞くと「車で待機して下さい。そのうち来ます」といった調子。マニュアルを再度読み返す。結果は二度読み。数字は4はヨン、7はナナ。

しかし、八時近くになっても誰も来ないのはやはり変だ。念のためK町役場に電話を入れてみた。するとナント、体育館ではなくて町民会館だという。頭が真っ白になった。道順を聞く。落ち着けと自分に言い聞かせる。

いや、これは私のまちがいではないぞ。確かに体育館と聞いた。あわてふためいて捜しまわり、ようやく到着。次々と投票箱も到着中である。開票は九時からと聞き一安心。

広報担当によるとテレビ局から場所を聞かれた時、相手がどうも体育館と言ったような気がしてひっかかった覚えがあると言う。それだ。

報道席にはすでにNHKの担当者が来ている。こちらは専用の電話がひいてある。私はうろ覚えのケイタイを心もとなく眺めた。ケイタイは会場の外で使用せよとのこと。しかも私は三社に報告、この三社への報告順まで決まっている、忙しくなりそうだ。

いよいよ九時、開票が始まった。まず立会人が投票箱の封印を確認した後、職員が箱を開けて大きなテーブルの上に票をぶちまけた。六千票もパラーッという感じ。五十人ほどの係員が、まず有効票を二十票ずつ結束してゆく。それを確認する人、計算する人。次に票を候補者別のかごに分ける動きもあわただしい。テーブル上に票がなくなれば、五人ほどでライトをつけてテーブルの下も確認、大げさだが、その仰々しさがまたもっともなことに思える。担当業務の終わった係員は場所を離れて待機する。

十時過ぎに知事選の結果をマイクで発表、同時に広用紙に記入されてゆく。それを写して部屋を飛び出す。テレビ局へ電話。「天草郡K町担当松本です。○時○分現在、有効投票数○人、Aさん○票、Bさん○票」

オペレーターに開票率を聞かれ「エッ!?　開票率は出てないんですよねェ」なんてバカなことを言ってしまった。K町は小さな町なので、いきなり終了発表だった。従って、開票率は一○○%なのだ。

三社目がなかなか出ない。話し中だ。電話台数をけちったのか。報告し終わるまで十分かかった。しかし、こっちが必死で電話している最中、バンザーイ!!　バンザーイ!!の声。ハッとしてテレビを上目使いにみると、すでに知事は当確が出ているではないか。

私のやってることって一体意味はあったの？　むなしさが胸に広がった。

ラジオの時間

東京都北区　安村豊子（36歳）

勤めて一年になるパート先では、一日中ラジオを流しながら仕事をしている。

社員三名の小さい会社で、昼間はみんな出払って、私一人お留守番の時も多い。そんなときはラジオがお友達である。

いつもTBS。十時に仕事を開始して、秋山ちえこさんのとてもご高齢とは思えぬしっかりした話を聞く。十時半過ぎからは、毒蝮三太夫がババァだの、汚ネェなどとにぎやかにやりとりしながら、ちょっとほろりとさせる三十年続いているコーナーが始まる。

十一時半過ぎからは永六輔、そしてお昼を食べながら小沢昭一を聞く。

TVがあれば、笑っていいとも見たいんだけどぉ。

私があるときからラジオにはまったのにはワケがある。社長の目を盗んで送ったFAXが番組中に読まれ（もちろん匿名）、景品が当たったのだ、しかも二回続けて。また別の番組でも抽選に当たり、小林カツ代の料理本が送られてきた。ラジオはTVに比べると、競争率低いのかも、ふふふ。それからはもう楽しくなっちゃって。

家でTVがなぁんにも見たいのないときもラジオをつけるようになった。家事をしながら、TVだと目を奪われて仕事ができないが、ラジオなら邪魔にならない。リクエストで昔懐かしい曲も聴ける。

番組の間に天気予報やニュースも耳に入る。TVの世界ほど、ラジオはガチャガチャしてない。子供の頃に聞い

た番組がまだご健在なのにびっくりしたが、長年のキャリアがなす技か、すぐに耳になじむ。

ながら族のわりに、TVよりも話がしっかり聞けるのが不思議だ。というよりもともとラジオはながら族のためのものなのだ、きっと。

思い起こせば中学生の頃、ラジオの深夜放送を聞いては授業中、よく昼寝したっけ。

私はTVも好きなのだが、どうもこのごろは似たり寄ったりで、人気者を出しておけばいいといったやっつけ仕事が多い。ドラマも同じ様な顔ぶれが、組み合わせだけ替えたようなのばっかりでちぃとも見る気がしない。

だからラジオ。願わくばTVのような送り手本意の、時代の波が訪れないことを望む。

夫の手料理

神奈川県大和市　浅田節子(68歳)

台所に立つべき奥さまは、デーンとソファーに寝そべり、音楽を聞いている。

旦那さまは、まな板に立ち向かって料理の材料を切っている。

やがて中華鍋が熱くなり、ジューと音をたてて、何やら炒めている。

そのサマをのんびり気分で眺めながら、ふと思った。今――この我が家の光景を「見た」人がいたら奥さまは寝そべって、旦那さまは台所で立ち働い

て、何とまあー人使いの荒い奥さまだろう——と思われるに違いないと。

だって仕方ないのです。私は抜歯してきたばかりで、出血が止まらず脱脂綿をグッ！と噛みしめて安静が必要なのです。

見るに見かねた夫が「ヨシ！　今夜の食事はオレが作ってやる」と台所に立ったというわけ……。

夕食を作らずに、寝そべっていられるのは主婦にとっては最高の幸せだが、残念なことに抜歯後で思うように食事が取れなくて、アワレだった。

それにしても、男の料理はダイナミックというのか、思いもよらぬモノが入れてあったり、和風でもなく、洋風でもなく、何と表現したらいいのやら？　でもおいしかった。

夫も定年十年ともなると、何か作ってみよう——という気になるらしく、台所に立つ回数が多くなった。

その昔、田舎から上京した苦学生の体験が、何かの時に役に立っているようだ。

主婦役にクタビレタ私が、一泊や二泊の旅に出ても、もう大丈夫！と安心したある日の出来事であった。

晩婚カップルに幸あれ

東京都足立区　須賀まり子

うちのすぐ近くに真言宗のお寺がある。檀家の数百軒余りと聞くから、この辺りのお寺の中では一番小さいほうかもしれない。

そこの二代目住職さんが、一昨年、四十九歳にして待ちに待った良縁に恵まれた。

お相手は、彼のお父様が通院していた国立病院の婦長をしていた方で、歳も一つ年下と格好のカップルである。「うちの息子はまだ独り者で……」と主治医の教授に話したのがきっかけで、「それならこの病院にちょうどいい人がいる」ということになり、話はとんとん拍子（かどうかは知らない

専門の生命保険コンサルタントを派遣いたします。

（東京都内・近郊のみ）

お一人ではチョット心細い、
でも何人かいれば心強いあなた…
お友達・職場の仲間などどなたでも結構です。
3、4人でも何人でも
あなたのお宅に、あなたの職場に、お集まりください。
生命保険の専門家が皆さんの疑問にお応えいたします。

くわしくは『わいふ』あて　電話で資料請求してください
わいふ指定代理店　東京海上火災保険株式会社　東京海上あんしん生命保険㈱

杉本保険事務所 杉本侑子☎03-3260-4771

が）に進み、二人はめでたくゴールインした。

この結婚が決まった時、町会内は「よかったね、よかったね」とその話で持ちきりになった。やはり、お節介なこととはいえ、各家のご先祖様がお世話になっているお寺さんの息子さんのこと故、みんな心配だったのだ。長老の町会長などは、まるで自分の息子のように気を揉んでいたくらいだ。

二代目住職さんは、私と小学校が同窓で、二年先輩にあたる。彼は成績優秀、品行方正の優等生で、いつも学級委員長に選ばれていた。全体集会の時には、よく朝礼台に上がって進行役を務めたり、挨拶をしていた。

登下校時、学校の隣の神社の前を通る際、足を止め、一礼してから歩き出す人だった。お寺の息子ということで、ご両親の教えなのかもしれないが、「この人は私たちとは違うんだ」と幼心にも尊敬の眼差しを向けていたことを思い出す。他の子どもたちとは、どこか一線を画したような雰囲気

ではあったが、かといって厭味な感じはなく、にこやかでやさしく、頼りがいのあるお兄さんに思えた。

お坊さんの学校を出てからは、四、五年前お父様が第一線を退くまで、役所勤めをしていた人だ。にもかかわらず、世俗の垢にまみれることもなく、脂ぎった中年然と化すわけでもなく、ハンサムな面立ちは相変わらず清々しさを漂わせていた。髪に白髪こそ混じれども、万年青年のような風貌の方である。

三十代に入りお母様を癌で亡くされ、以来二人の妹さんとお父様を支えてこられた。これまで、理想の女性に出会わなかったのか、それともお寺という特殊な家業がネックになっていたのか分からないが、ずっと機を逸していたことは確かだ。

「長いこと待った甲斐があったね」と周囲が目を細めるくらい、四十九歳と四十八歳で新たな人生のスタートを切ったお二人は、仲睦まじい。特に奥さんは、出来た人、と評判だ。

婦長まで務めた筋金入りのキャリアウーマンだった彼女は、寺の仕事に積極的だ。日頃墓地をきれいにしてくれるのは言うまでもなく、お彼岸時ともなると、墓に供えられた湯飲み茶碗やコップなどを洗って伏せておいてくれる。墓参りに行った者は、ただ水を入れるだけでよい。その心遣いに檀家は驚いた。

この辺りには、「大般若会」といって、町会員がお寺に集まって念仏を唱える古い風習が残っている。そんな時も、彼女はテープレコーダーを用意し、録音して念仏を覚えようとしている。前向きな彼女の姿を、見守るように見つめる住職さんの眼差しが温かくて何ともいえない、と参加した人達は半分冷やかしも込めて二人を褒めたたえた。

先日、従兄弟が肝臓癌で亡くなった折り、納棺を前に、奥さんはわざわざ花を手向けに来てくれた。「Kさん、もっといろいろな話がしたかったですね」と言いながら、従兄弟の顔をきれいに拭き、開きかけた口元を結ばせてくれた。微に入り、細にわたる気配りに、さすが、元婦長！　若い嫁さんじゃこうはいかないわよね、と身内は感心しきりだった。

生と死を目の当たりにしてきた自分のキャリアを生かしながら、嫁ぎ先の家業に全力投球する新妻と、慣れない彼女を温かな目で見守りながら導いていく夫。その二人三脚ぶりは、町内会の中年倦怠期夫婦にとって、一服の清涼剤となっている。

若いルンルンとはじけそうなカップルも微笑ましいが、大人同士の晩婚カップルには充実感と趣がある。お二人を見ていると、ああこれぞ夫婦、結婚ていいなあ、と思わせる。一人身の私には、ちょっと羨ましい話だ。

でも一つだけ、住職さんが町会長にそっと相談した「子どもは出来るでしょうか」と。ざっくばらんな町会長は、「男は七十まで大丈夫よ。だけど、女の方は限りがあるから」。

うーむ、晩婚カップルならではの深

刻な問題。だけど、まあ、そう欲張らずに。こうのとりの御機嫌にまかせましょうよ。（あれ？　このセリフどこかで聞いたことあるね）

天井に耳あり

東京都足立区　永田道子

近くに住んでいた一人暮らしの母が亡くなって、近県に住む弟が家の持ち主となり二年。私は母が貸していた二階の部屋の二世帯から家賃を預かることと、植木の水やり、家のまわりの清掃などをしていた。

今年の四月から弟の息子夫婦（私にとっては甥）がその家に住むことになり、私の役目は終わった。

店子のAさんは家賃を前の月の末に持参するが、Bさんはあるお店をまかされており、午後から夜中まで働いているのだが、不景気で客足が鈍く、家賃が徐々に遅れ、月末になってしまったのだ。

四月から甥の嫁が家賃を預かることになったのだが、「Bさんが月末に家賃を払うのが許せないので出ていって貰うわ」と言うので、私はびっくりしてしまった。

そして「何カ月も滞納している訳でもないし、Bさんを追い出しても、すぐ次に良い人が入るとは限らないでしょう。私の家の二階を若い男性に貸したら、煙草の吸いがらを紙屑かごに入れ、火事になりそうになったのよ。また友達の家では店子が一年も家賃を払わず夜逃げしたそうよ」などと、色々話をした。

でも嫁は「私は三月までマンションを借りていたけれど、前の月に必ず払っていたわ」と、自分の考えを頑固に替えない。

私は「Bさんを出す、出さないは家主の弟が決めることだから」ともうそれ以上、言わなかった。

三月末に嫁に一切を引き継ぎ四月に入ったある日、Bさんから電話があり、一瞬、「もう私には用が無いのに？」と思ったら「お家賃、四月からはなるべく早く払うようにします」と言うではないか。私は思わず「えーッ」と大声で驚いた。「あなたとお嫁さんとの話を全部聞いてしまったのです」と言うのである。

なんと階下で話をしていたのが二階に筒抜けに聞こえていたのだ。ついうっかりしていたが、その話をしたのはBさんが在宅の午前中だったのかも知れない。

あのとき、私自身はBさんが部屋を追い出されないよう嫁を説得していたのだから、聞かれてまずい話はしていないけれど。

昔から「壁に耳あり、障子に目あり」という諺があるが、「天井に耳があったとは！」

今回は、秘密で重大な話を聞かれてしまった訳ではない（？）のでよかったが、このことを教訓に「人に聞かれて困ることは生涯言わない」と私は固く心に誓った。

（え・西宮さき）

自分を表現できる文章の書き方

わいふ編集部　田中喜美子　和田　好子　著

田中喜美子・和田好子著
毎日新聞社
本体1400円＋税

埼玉県坂戸市　佐藤信子

この本がふつうの「文章読本」と違うのは、投稿誌「わいふ」を母体として生まれていることである。二人の著者が、長年の編集を通して蓄積した実践的知識を、「文章を書きたい」素人の人達に必要なノウハウとして提供する形をとっている。

私は読み始めて、はっとしたり、共感することが多く、自分のために書かれた本かと思った。同様の読者も多いのではないかと想像する。

本書の内容は、

・書きたい女たちが増えている
・「真実な文章」を書くために
・分かりやすく簡潔に書こう
・書くために必要なルールと技術
・あなたは何が書きたいですか
・対談　投稿作品のいい例、悪い例
・書いた作品を発表する方法

に分けられ、「ふつうの女性」の中に書きたい女性が増えている――という現実から、素人の文章のすばらしさは「迫力」にあり、それは、「真実な」作品の中に見ることができる。そうした文章を書くためには、どう書くかという心構えや技術が「わいふ」の投稿作品に即して語られており、具体的で分かりやすい。

初心者には作文から入るようにすすめ、理由や注意が語られ、とにかく、書きたいことを書けばいいと、エールが送られている。

いま、「わいふ」の会員は約四千人。読んで書いて、みんなでつくるという趣旨を、これはもう一歩深める、ぎっしり中身の詰まった一冊である。

読み終えて、書くこと（表現すること）は生きることであり、自分探しの旅でもあると気づく。

自分の座る椅子をしっかりきめて書く、考える、苦しみ発見する。漫然と生きてきた人生が、書くことが喜びとなるような積極的な人生へと変っていく……。

書くことで、真実な文章に近付いていけたらどんなに嬉しいことだろう。沢山の人達に、読んでほしい本である。

連載 3

いのち、はるか

―老親介護の日々―

新潟県中蒲原郡　小林智枝

夫も心配して仕事の帰りに寄り、夕食をひとりで食べられない母の様子をじっと見ていた。

夜勤の看護婦さんによくお願いして、後ろ髪を引かれる思いで病室を後にした。幸いなことに、三一二号室の看護婦は若い人が多く、優しくて一生懸命だった。こんな看護婦たちも居たのかと、わずかな優しさに触れただけでもほっとした。

病院を出ると、マンションの横の月が冴えていた。三日月の先の鋭い光が私のメガネ越しに飛び込み、鋭利な刃物で、心を突き刺されたように痛かった。こんなに冷たい月を見たことがない。

夫は車で来たので、自転車で来た私と駐車場で別れた。大通りに出てペダルを踏んでいると、夫が運転する白い車がスーッと通り過ぎた。いつもの桜の木に近づくと、暗い道路で、街灯に照らし出された満開の桜が、そこだけが夢物語のように、ほんのりと白っぽい薄桃色に包まれていた。

「ああ……」思わず胸が一杯になった。母の回復を待ちきれずに咲いたこの桜の花を、見せることが出来ないのだろうか……。何年も前に、温泉宿で母と見た夜桜吹雪の美しかった光景が、脳裏をかすめた。

桜の木の下で自転車を止めて、しばらくの間、ひとりでぼーっと見上げた。幻想的で真綿のような暖かさが、冷たい月から受けた孤独感をいやしてくれた。すると心の隙間に、ひたひたと静かに忍び込んできたのは、楽しかった温泉宿での思い出が、再び実現することがないという悲しみに変わってしまったことだった。

祈るような願いと容赦ない現実がない交ぜな心を抱いて家へ帰ると、夫と遅い夕食を食べた。母の風邪が移った

ようで、寒気がして体がだるく、食欲がない。

「あんたも食べないとだめだよ」と夫に言われて、無理に野菜を口に入れる。今倒れるわけにはいかないという精神力だけが、私を支えている。以前医者から貰った飲み残しの風邪薬と胃腸薬を飲んだ。

「おばあちゃんはどんどん老化が進んでいるんだね」と夫が言った。

「おばあちゃんが、もしも脳梗塞で何も分からなくなっても、風邪が治ったらすぐに退院させて、私が看るわ」

どうして最悪のことを考えるのだろう。涙が溢れ、母の人生が走馬燈のように駆け巡る。母はテレビドラマの「おしん」のように、子守奉公に出されたり、戦後女手ひとつで六人の子供を育てたりと、苦労の連続だった。幸薄かった母の人生を思うと、どんな状態になろうとも、しっかりと最期を看取ってやりたいと思った。医療従事者の使命が、患者の病気を治すことであるならば、血を分けた肉親は人生を丸ごと抱えて守るという、大きな違いがあると思った。

「おばあちゃんを今すぐにでも、家へ連れて帰りたいのは俺だって同じだよ。でも、家じゃ点滴もできないし、ご飯が食べられなければ生きていけないよ。病院には医者と看護婦がついているんだよ。だから、おばあちゃんが自分でしっかりと食べられるようになって、熱が下がるまで辛抱しなきゃあ」と、夫に諭された。

それは分かっている。しかし辛かった。日に日に弱っていく母を、手をこまねいて見ているのは、自分の身を切られるようだった。確かに、私は母を家へ連れて帰りたいとばかり考えていた。夫にそう言われて、母が自分で食べ物を食べられるようにならなければと、自分に言い聞かせた。

「退院したら、ベッドがいるね」と夫が言い出し、カタログを見て選んだ。だが、車椅子と同じように、役場で貸与しているかもしれないので、一応聞いてみることにした。

時は容赦なく流れる。すでに夜中の十二時を過ぎていた。早く眠らなければと思いながら、考えてもどうにもならないことが浮かんでは消え、また浮かびして眠れない。明け方になって、焦る心を白々とした薄明かりが包み、考え疲れた愚かな神経が、ようやく少しだけとろとろと浅い眠りについた。

朝になって、寝不足のもうろうとした頭で、病院へ持っていくおにぎりを握っていた。いつもは梅干しを入れるのだが、どうして気が変わったのか、味噌漬けを細かく刻んでご飯に混ぜて握ろうとするが、ぽろぽろと手からこぼれて握ることが出来ない。そんな私の様子を二男が見ていて号令をかけた。

「母さん、テンションが上がっているな、落ち着け。ほら深呼吸するんだよ。一・二・三・四」

私は言われるままに深呼吸した。

「仕方がないよ、あの病室に一日居れば、そうなるよ」

と長男が私をかばってくれた。私のテ

ンションは上がりっぱなしだ。
家の前で車が止まる音がして、役場に申請していた車椅子が届いた。この車椅子に母はいつ乗れるようになるのだろうと、またテンションが上がった。
その時、台所の片隅に、命の灯火を見いだした。鉢植えの枯れたと思っていたアマリリスの真ん中から、若竹色の新芽がわずかに頭を持ち上げていた。強靱な命の息吹を見た瞬間、母にとって明るい兆しのように胸がどきどきと高鳴った。どうしてこう感情的なのだろうと我ながら呆れた。

泣いてばかりの私

私は母が入院してから、ひとりになると泣いてばかりいた。我慢強い母が動けないのにどうしているだろうと哀れでならなかった。食事の支度をしながら、町を歩きながら、信号待ちしながら、夜布団の中で、いつも病院の母を想うと涙が溢れた。小さいころから泣き虫だったと母によく言われたが、三つ子の魂百までなのだろうか。
この度の母の入院で、私はこんなに弱虫で頼りなかったのかと情けなかった。
それは最初に足の痛さから始まった。疲れからきているのかもしれないが、夜になると左足首が痛くなり、少し足を引きずって歩いた。それは二、三日で治った。次に右手首が痛くなった。母を支えたり起こしたりして、無理な力を出しているためだった。それは手首からだんだんと肘のほうまで上がり、次第に肩まで痛くなった。そこで物を持ったり戸を開けたりするときは、左手を使うように心がけた。サロンパスを張ったり、入浴時にもんだりしたが、容易に治らない。そして風邪を引き、とうとう胃がしくしくと痛み、ムカムカと吐き気がして、食欲もない。もう少し図太くなりたいと痛感した。
そんなとき、妹が私の体を心配して煮しめなどを作って届けてくれた。誰もいない台所で、タッパーのふたを開け、優しく並んでいる人参や大根などを見た途端、またまた涙が溢れた。心の中を風が吹くように弱気になっていた。
土曜日なので二男が先に病院へ行った。私は十一時ごろ行ったが、母は眠っていていくら起こしても起きない。熱いタオルで顔を拭き、濡らしたカット綿で目の周りをきれいにした。コップにぬるま湯を汲んできて、一本しかない歯を磨かせる。すると、医師が回診に回ってきた。私の顔を見ると、
「小川さん、頭のCTの結果は異常ありませんでしたよ。フイルム持ってきて」と看護婦に指示し、私にフイルムを見せながら、「老化はみられますけどね」と言った。
すると、脇に控えていた婦長が、「小川さんね、睡眠剤飲まされていたんですよ。その薬中止しますね」と言った。
飲まされていたと何度も言うので、

病院以外の家族が飲ませたと言うのかと思い、

「あのう、私飲ませていませんけど」と言った。後になって、とんまな返事をしたものだと思ったが、別に皮肉を言うつもりでなく、素直にそう思った。私は相当に鈍い。

小柄な母はわずかな薬でもよく効いた。睡眠剤など飲もうものなら、いつまでも目が覚めないほうだった。入院以来昼も夜も眠ってばかりいたが、睡眠剤を飲まされていたのだろうか。風邪を引いてからその量が増やされたのだろうか。ろれつが回らなくなるほど、食事もひとりでできなくなるほど、脳梗塞かと思うほど、睡眠剤をもってくれたという訳か！

脳に異常がなかったという安心感の次に、怒りでまたテンションが上がった。

再び点滴が始まった。液がぽとり、ぽとりと落ちるのを見ながら、頼むよ栄養になっておくれと、心の中で祈った。

「ミカンが食べたい」と、母が珍しく自分のほうから言った。考えてみれば二日間、食事らしいものを食べていなかった。夫に電話したら、ミカンとプリンと水ようかんを買ってきた。ミカンの皮をむいて渡すと、美味しそうに食べた。それを見て、異常がなかったんだという安堵感がじわじわと湧いてきた。夫もそんな母の姿を見てにこにこしていた。

「美味しいお茶を飲ませたいね」と私が言うと、

「持ってきて飲ませてやってよ」と夫は力を込めて言った。

わずかに好転

翌日ほんの少しだが母の様子がいいような気がした。わずかなことでも嬉しい。昼食になり、食べたくないと言った。

「食べないと元気が出なくて家に帰れないよ、食べよう」と言うと、気を取り直して少しだけ食べた。

今日はお茶の好きな母が毎日飲んでいた、浅川園の「とくめ茶」を持ってきた。小さな急須と、陶芸教室で私が母のために作った小さな湯飲みと、携帯用ポットにお湯を入れてきた。

「今日はとくめ茶を持ってきたよ」

と母が喜ぶかと思って言うと、

「とくめ茶って何だ？」

と意外な言葉が返ってきた。あんなに大好きなとくめ茶を忘れてしまった。それでも、小さな湯飲みに入れて渡すと、大事そうに受け取り、ゆっくり飲んで、「ああ、うまかった」と満足そうにした。

三一二号室に移ってから、私はまた夕食の時間に間に合うように病院へ通っていた。

六時少し前に病室に着いたら、母が布団をはぐってうずくまっていた。ひとりで起きようとしたが、思うようにいかないところだった。私が手を引っ張って起こしたら、ベッドの柵にしがみついて、

「もうすぐ夕食だから、準備しようと思ったけど、なかなかできない」と言った。

「えらい、えらいよ」と私が母を抱きかかえるようにして背中をなでると、

「褒められても、どうにもならないよ」と言った。

すると、私たちを見ていたのか、

「元気になられてよかったですね」

と、この病室で唯一の会話ができるSさんが声を掛けた。

昼食の時には、まだ目も開かないようだったが、これだけ考えることが出来るようになったのかと嬉しかった。顔つきも少しよくなってきた。

三一二号室へ移ってから五日目、若くて優しい看護婦が、母にウオーカーを押させて、トイレまで連れて行ってくれたと聞いて、信じられなかった。看護婦の勇気と優しさに、母は何度もありがとうと言った。しかしそれ以後は足がもつれて、歩くことが出来なくなった。

手も足も肉がげっそりと落ちて、しわだらけになり、骨と皮のようになってしまった。

私が一番心配していることは、入院が一日でも長引くと、頭が老化し、足も弱ることだ。

病院の食事がまずいので、私は朝、茶碗蒸しを作ったり、スーパーが開くのを待って白身の魚を買い、大急ぎで家へ帰って煮たりして、母に栄養を付けさせようと必死だった。母も点滴をしながらなのに、家へ帰りたい一心で食べた。

「何もかも嫌になった」と母が言った。本当にそうだろうと思った。でも、そういう風に考えることが出来るようになっただけ、睡眠剤が抜けたのかなと感じた。

翌日は快晴で、桜を見上げると、花と花の間から抜けるような青空が見えた。吸い込まれそうな深いブルーが、今の私にはまぶしかった。

「桜さん、まだ散らないでね」と心の中で呼びかける。

町役場に連絡したら、ベッドを貸してくれるというので、町外れの役場ま

で手続きに行った。担当職員は若い女性で、退院までに届くようにと機敏に対応してくれた。ありがとうございましたと、私は繰り返し頭を下げた。困っていたのでその職員の対応が身にしみた。

母は今日は元気がない。妹と明子が顔を見せたら、「揃ってきてくれて涙がでる」と言って泣いた。微熱があるせいかもしれないが、こんな日は私も辛い。

夜、夫が病室を訪れたときにも、「もう死んだほうがいい」と言って泣いたという。夫には今までも何回も泣いたとのことだ。両手で顔を覆い下を向いているので、最初は何をしているのだろうと思ったが、泣いていると分かったと言った。私の前では泣いたことはなかった。

次の日、「ここはお寺か?」と母が言いだした。私は内心どきっとしたが、「病院だよ」と平静を装って言った。すると、

「家へ帰りたい、こんな訳の分からないところで死にたくない」という言葉が返ってきた。私には考えたくないことを、母は考えているのだと思った。

まだ出ていた睡眠剤

風邪をひいてから八日目、内科の先生から、詳しい検査の結果異常がないので退院許可が下りた。その時に、母が眠ってばかりいると言うと、カルテを見ていた内科の医師が、いったん止めた睡眠剤がまた出ていると言った。そして付き添っていた病棟の看護婦に、止めるようにと指示した。私には信じられなかった。どうして再び飲ませるのだろう。手の掛かる患者は眠らせておくのだろうか。そのために、脳細胞がどんどん老化していくことを、どう考えているのだろう。疑問を抱いた私に対して婦長が言った。

「老人性うつ病というか、元気を出す薬だしてくださいと先生にお願いしたんですよ。少し眠くなることがあるんですよ」と。

私は頭に血が上った。誰が診断したのか。何が元気の出る薬だ。この婦長は何をどこまで認識しているのか。睡眠剤を飲ませられるたびに、母はおかしなことを言った。病院は患者の人生なんてどうでもいいのか。もう何を言っても無駄だと分かり、いや、もう馬鹿馬鹿しくて言う気もしなかったが、心底腹が立った。

母は今すぐにでも退院したがった。私は食べ物を食べられるだろうかとか、熱がもう出ないだろうかと気になった。

歩くことの出来ない母を退院させるのは人手がいる。長男と明子に頼んだ。

家具調のポータブルトイレや、母を入浴させるときに使う浴槽内の台と、取り外しが出来る手すりはすでに届いている。夫がトイレと風呂に手すりを付けてくれた。ベッドもセーフで届いた。夜遅く、夫と長男と次男と私は、母の部屋のベッドをどうやったら使い勝手がいいかと、あれこれ研究した。

母を迎える態勢は整った。時すでに夜中の十二時を過ぎた。早く寝よう寝ようと布団に入った。

老人たち

三一二号室にはわずか九日しかいなかったが、この病室にきて、一気に深刻な老人問題の渦中に投げ込まれたような気がした。

中年の看護婦や看護助手が、何故患者をぞんざいに扱うのか分かったような気がした。それは家庭で看護したがらない、手の掛かる老人を預かってやっているという気持ちが、無意識のうちに根底にあるからではないだろうか。この病室に足を踏み入れたときの戸惑いは、自分の力で歩くこともできない老人たちなのに、異様な怖さを伴うものだった。

Mさんは痩せた体でベッドに横たわり、瞳だけ大きく見開いて、新入りの私をじーっと見ていた。私が挨拶してもただ見つめ続けているだけで、どうしていいか分からず困ってしまった。まばたきができなくなってしまい、いつも大きな目を開けているとのことだった。色々な経過があったようだが、今ではひとりで起きることもできないし、家族の識別もできない。昼食になると息子さんの嫁さんが食べさせに来るが、自分では食べないので、口に入れてやってもかもうとしない。「かみなさい、かみなさい」とかけ声をかけると少しだけかんでいる。おかずは全部ミキサーにかけて刻まれていた。夕食時には食べさせに来ないので、看護婦か看護助手が口に入れてやる。看護助手はご飯の上におかずをのせて、雑炊のようにして口に突っ込んでいた。

「食べさせに来ないから、困るんだよね」

と、私たちに苦々しそうに言う。Mさんが聞いているのに……。分からないようでいてちゃんと分かっている。私が体を起こしてやったりすると、必ず「ありがとう」と言う。入院が長引い

ているので、退院するように言われているのだが、家族の受け入れ態勢が整わないようだ。嫁さんも働いているらしく、手の掛かるMさんをひとりにしておく訳にもいかず、困っているのはよく理解できる。

Aさんも手の掛かるおばあさんだ。数人が交代で食事の面倒をみるために来ていた。実の娘さんらしい人は時間も長く、よく面倒を見ていたが、嫌々ながら仕方なくという感じの人もいた。Aさんはゆっくりと起きたり、歩いたりできるが、ひとりでは危ない。よく娘さんが手をつないで廊下を歩いていた。家族が居なくなると、看護婦さんとか、隣の人（私のこと）とか誰かを呼びたがる。

「起こしてくんなせー」「ねせてくんなせー」「腹が痛い」「オシッコ出そう」と落ち着かない。ある夜、息子さんに家へ帰りたいと言っていたが、なだめられていた。

AさんもMさんと同じで、少しでも何かしてやると「ありがとう」と言っ

た。

Kさんは転んで入院したが、脳梗塞になって長引き、もう一年になるとのこと。やはり食事の時間になると、家族が交代で来ていた。話すのは不自由なようだが、人の言うことは分かるらしく、何かしてあげると、いつも両手をあわせて拝むようにした。ほとんどベッドに寝ているのに、食事を全部食べるのには驚いた。

Sさんも転んで入院した。家で使っていたと思われる老人用の乳母車を押して、何とかひとりでトイレへ行っていた。しかし、また転んだなどと言っている。やはり食事になると、家族が交代で来ており、ゴールデンウイークあけには退院できそうだ。

三一二号室のおばあさんたちは、手の掛かる患者たちだ。

夜になると看護婦が病棟で二人になるが、ナースコールは鳴りっぱなしで、てんてこ舞いしていて手が回らない。病院のロビーの掲示を見ると、患者二・五人に看護婦一人の特二病院とあった。特二病院といえば、最高の看護をする病院とのことだ。私には不思議でならない。患者から見ると、看護婦も足りないし、医者も足りない。

厚生省の医療費削減の方針で、付き添いが廃止されて、そのしわ寄せは患者と看護婦と家族にきている。家族にとって、食事の時間ごとに病院へ通うのは大変なことだ。また、長期入院患者は医療点数が下がるために、たらい回しになるという現実もある。

後になってから分かってきたけれど、他の病院でも手の掛かる老人は睡眠剤で眠らせていることがよくあるらしい。風邪が流行ると一渡り移り、点滴をして眠っているとのことだ。家にいたときには何とか動いていたのに、ばったりと寝たきりになってしまうという現状のようだ。治る見込みの少ない老人たちを、どうすればいいのだろう。

そんな中にあって、誠実に一生懸命に、患者と向き合っている若い看護婦たちの存在に、大きな希望を抱いた。

この人たちが真っ直ぐに伸びて欲しいと心から思った。

おばあちゃんに桜を見せよう

入院してから二十八日目に、母はようやく家へ帰ることができた。思えば辛い日々だった。

私と長男が病室へ着くと、妹と明子がすでに来ていて、荷物を片づけ始めていた。この病室にいた期間は短かったが、辛い思いをしただけ、同じような境遇の老人たちへの思いは深かった。余計なお世話かもしれないが、この人たちはこれからどうなるのだろうと気になった。

母を車椅子に乗せて駐車場まで来ると、長男の車の後部座席に、明子が母を上手に乗せてくれた。車椅子から移動させるのはコツがいるが、さすが現役の看護婦だと感心した。そして私が母を抱くようにして支えた。

「おばあちゃんに桜を見せよう」と私が言うと、「おやすい御用だ」と長男が張り切った。

私たちが乗った車の後ろから、妹を乗せて明子が運転する軽自動車と、その後ろに姉が運転するカローラが連なり、桜並木へと向かった。私がいつも語りかけた桜は三本しかないし、住宅街でゆっくり見ることが出来ないので、最近出来た穴場へ行くことにした。

数年前、亀田郷土地改良区が作った名所で、亀田から新潟までの農道に、三キロくらい桜並木が続いている。

平日なので人も車もいない。広く見晴らしのいい田んぼの中を流れる小川に沿って、桜の木がはるか遠くに霞むほど並んでいる。一本一本の木に、寄付した人や団体の名前が付けられていた。風当たりが強いせいか、開花が遅く、市街地の桜は散り始めたのに、ここは丁度見ごろだ。

それはまるで私たちを待っていたかのようだ。果てしなく広がる青い空の中に、薄桃色の花びらが、これもまた果てしなく、虹のようにどこまでも続

く。
「わあー、きれいだねえ」
「きれいだねえ」
母も不自由な体を乗り出して見上げた。
とうとう桜を母に見せることができた。
「桜さん、ありがとう」
私は心の中で繰り返した。
この一カ月間、桜の木に話しかけて、崩れそうな心を何とか支えてきた。桜の木は何も言わないけれど、いつも私の心に寄り添ってくれた。そして自然の流れの中に希望はあることを教えてくれた。その自然の中で、私は何とちっぽけで、右往左往していたのだろう。母を案ずるばかりに、看護婦に腹を立てていた私はヒステリーだった……。
思えば私はことのほか桜が好きだ。いつごろからなのかよく分からないが、気付いたときには桜は私の分身のようになっていた。
これから毎年、桜を見るたびにこの一月のことを思い出し、胸がしくしくするのだろう。
感動溢れる心を抱きしめて、家に着いた。
母がいつも座っていた居間の真ん中の座椅子に、ここだ、ここだとばかりに母を座らせた。
やっとここへ連れてくることができたと、みんなでホッとした。この一月、灯が消えたようだった我が家の居間に、久しぶりに笑い声が響いた。
姉がコンビニからおにぎりやお寿司や弁当を買ってきてくれた。ありがたかった。
私は母を退院させることに精一杯で、昼食の用意までできなかった。母はおにぎりとまんじゅうを一個ずつ食べて皆を驚かせた。そして入浴し、安心してベッドで眠った。もうお寺の夢は見ないだろう。
これから、長い介護の日々が始まる。
（続く）
（え・佐藤瑞江子）

★わいふバックナンバー
260号 トラブル旅行記
261号 嫌われる姑・好かれる姑
263号 わが家の親子ゲンカ
264号 ふるさとの伝統行事
265号 私の初体験
269号 再就職で得た仕事・得られなかった仕事
272号 カウンセリング体験
273号 子どもとテレビ
274号 引っ越し騒動
275号 料理と私
277号 不妊治療・私の場合
278号 〝おけいごと〟との格闘
279号 あなたの夫は何番目の男？
281号 思い出の地・再訪
283号 私の読書歴

自分にあった高校えらびの決定版 私立高校ガイド
ハイスクールレポート（関東版）
2001年度版
二〇〇〇円＋税

シリーズ老後の暮らし
お年寄りが安全に暮らすために
一五〇〇円

変わる主婦・変わらない主婦
一五〇〇円

お申し込みは☎〇三―三二六〇―四七七一

ズバリ一言

民主主義は何処へ

奈良県生駒郡　高松恭子

十河温子さんの「強制されて愛国心は生まれるか?」を読み、世の中が少しずつ、確実に変な方向に流れつつあるのを痛感した。

夫の勤務する府立高校では、今まで「君が代」は歌っていなかった。「日の丸」もグラウンドのポールには掲げられているが壇上には校旗だけだった。

ところが法制化されて初めての入学式となった今年は、そうはいかなかった。文部省から教育委員会へ、そして各学校の校長へ、強制的に実施するよう命令されてきた。大阪府ではすでに九十パーセント近くの学校が実施していて、この数値を百パーセントに持っていくよう校長を指導したという。校長はこれに従わないときの処分を恐れるあまり、「とにかく協力をお願いする」と、ビジョンを持たない政治家の選挙運動さながらに、ひたすら「お願い」をくり返すばかりだったそうだ。

そして、自分が職員会議でちゃんとこのことを言ったということを議事録に記録するよう書記に厳命した。ふだんは穏やかな校長がきつい口調で言ったことに、みな唖然としたらしい。

夫はこういう事態になると俄然と元気が出てくる。「私の名前を出して報告していいですよ、間違ったことは言ってないつもりですから」と、言って、はっきり反対意見を述べたそうだ。

夫は「君が代」には、反対している。「君」は明らかに天皇を指しており、民主主義の国の国歌にふさわしくない。しかし何も国歌が不要だと言っているのではない。日本にはすぐれた作曲家もたくさんいるのだから、広く一般から公募して新しい国歌を作るべきだという意見を持っている。

それが今回は、上からの命令で何が何でも歌えという。義務づけているだけで強制ではないと言うが、これが強制でなくて何だろう。たとえ九十九パーセントが歌ったとしても、一パーセントの歌わない人の意見に耳を傾けるのが民主主義であろう。それを国家権力を行使し、処分をちらつかせて百パーセントに持っていこうとするなどは、まさにファシズムではないか。言論の自由、思想・信条の自由はどこへ行ってしまったのか。各学校の個性を剥ぎ取り、画一化して統制しようとしている。これは絶対許されないこと

で、このような横暴に妥協すれば、自分の信条を貫いてきた三十五年間の教師人生を否定し悔いを残すことになると、断固、反対したそうだ。

議論は延々と夜遅くまで続き、大多数の教師が反対意見を述べ、職員会議で反対の決議をしたにもかかわらず、入学式では教育委員会から派遣された二名の「監視員」（名目は教育委員会の来賓）が見守る中で、「君が代」は歌われたそうだ。

私はこの話を、まるで戦前にタイムスリップしたような思いで聞いた。新入生もその保護者も何の疑問もなく歌っていたのだろうか。

私は自分の高校時代を思い出してみた。卒業式に「仰げば尊し」を歌うかどうか、生徒が意見を出し合って、歌わないことに決めた。

確か、エルガーの「威風堂々」で式場に入場したと思う。もちろん「君が代」もなく、歌ったのは校歌だけだった。壇上に「日の丸」は掲げられていたが、それに対し、在日外国人の生徒が、なぜ卒業式に「日の丸」なのかと、飛び出してマイクをとって校長に抗議するハプニングもあった。卒業生代表の答辞は、ギターの弾き語りで、朝日新聞が取材に来たほどだ。ちなみにこの弾き語りをやった河島英五さんは、現在も歌手として活躍している。

きちんとしたことの好きな校長先生の意に反した卒業式だったが、生徒が

主体であることを認めてもらえた時代だった。授業をボイコットして侃侃諤諤の議論をしたこともあった。それがたいして重要でないことでも、許してくれる教師がいた。三十年前、私たちはあんなに自由な中にいたというのに……。

一体いつの間に時代はこうも逆行してしまったのだろうか。一体いつの間に、生徒たちは自らの意見を自由に述べる権利を放棄するようになったのだろうか。

私は今回ほど、戦後の民主主義の風化を痛感したことはない。

公立中学校の現状

東京都世田谷区　後藤　晶（41歳）

地域によって差があるだろうが、今の公立中学の様子は、田舎で育った私の体験とはずいぶん違っていると思う。いじめや暴力の予防を重視するあまりか、学業成績よりも学級の和や班活動について熱心な指導をしている。保護者へのプリント類でも、班の編成や行事への取り組みについては詳しく説明されているが、進学や学習状況についての情報は少なすぎると私は思う。授業参観でも生徒の私語を先生は注意するどころか、それが活気のあるクラスの状態だと表現されたりする。

たしかに学校というところは、子供にとって知識とともに社会と人間関係を学ぶ場だ。友人がいなければ学校なんて行きたくないだろうし、学習意欲もおこらないだろう。今までのさまざまの学校を巡る社会問題も、根本は人間関係のもろさが原因だったともいえる。それはよくわかっているけれど、それにしてももっと学校では、実技を含めて学科の成績にこだわってほしいと思う。

というのも、多くの中学生が通う進学塾のカリキュラムを見れば、学校の授業の意味がわからなくなってしまうからだ。塾では「先取り」学習が一般的で、学校で習うよりも先に塾で教えてしまう。それなら学校の授業は復習なの？　私が体験したような、新しいことを学ぶ喜びを、学校で級友といっしょに味わう人はもう少ないの？

それほど人より先に先にと急ぐ原因は、現在の受験競争にあるのだろう。たとえば中高一貫私立校では、高二までに公立での六年分を教えてしまい、高校三年の一年間を丸ごと受験勉強にあてるという滑稽なことをするらしい。公立の生徒が対抗するためには、塾で学ぶしかないのだろうか。

学校が、授業で新鮮な知識欲を与えられなければ、協調性とか友情に重きを移すのも当然かもしれない。もちろん、塾に行かずに誠実に勉強をしている生徒もいて、それこそ本当の知性ある家庭なのだと、私はあこがれ尊敬する。

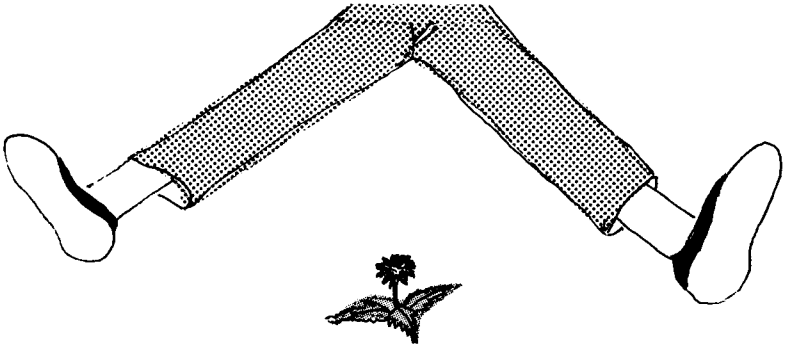
先取りどころか、人の後からついていったような私の思春期だったけれど、悔いはない。古きよき時代といえ

ばそれまでかもしれないが、田舎のダサイ青春は大切な私の一部分。子供たちにも公立校で、近道しないで進んでいってほしいと思うが、はたしてそれでも通用するのだろうか。自分のことではないだけに、不安と責任を感じる。

夫などは、たとえ今の風潮に疑問があるとしても時流に乗っていかないとしかたないんじゃないか、と言うが、理想主義の私には抵抗がある。

中学の保護者会で、英語の先生が英語検定の合格者の数を誇らしげに発表していた。中学程度の五級や四級ならともかく、本来なら高校で習う内容の級に合格する生徒も多い。それは、中学での指導の成果とは違うのに、なぜ先生は自分の手柄のように自慢するのだろうと思う。学校の状態がよいと、学業の成果もよいという理屈なのだろうか。

親があれこれ考えている時間も、ありがたいことに、子供は子供なりに成長していくけれど。



パラサイト・シングルの子供を持つ親へ！

東京都足立区　匿名

東京学芸大学の山田昌弘助教授が生み出した「パラサイト・シングル」という言葉をご存じの方が多いことでしょう。知らない人にちょっと簡単に説明しますと、「パラサイト・シングルとは、成人した後も親元を離れず、リッチな独身生活を楽しむ二十代から三十代の若い人たちをいい、簡単にいえば親に寄生（パラサイト）して生きている人たちのこと」をいいます。

病気で働けない親を助けているとか、自営の親を手伝っているとか、病気や障害をもっているとか、親に十万ぐらい払って自分の家事はすべてやっている人は、たとえ親と住んでいても「パラサイト・シングル」とはいいません。

問題なのは、親にお金を渡しても一万円から三万円で、家事のほとんどを親に任せきり、月に七万円から八万円を自由に使いまくっている人たちです。

「ひとり暮らしをするとお金がかかるから親元にいる」という理由が多いのではないでしょうか。その分専門学校へ行くなど自己投資したり、結婚や留学費用を貯金した方がいいじゃないかというわけです。実は本人たちはその方が楽だからなんですよ。

しかし、この問題は奥が深いのです。まず、家事も何にもできない人が増えること。結婚しても男性だったら妻に家事を任せきりか、やってもできないからやらなくなるのどちらか。また、食材の価格や、光熱費などどれくらいかかるものなのか、知らない生活感のない人が増え、環境問題などどこ吹く風といわんばかりに、電気は使いまくり、通信費は使いまくり、ゴミもどんどん出す……と挙げていけばきりがないのです。

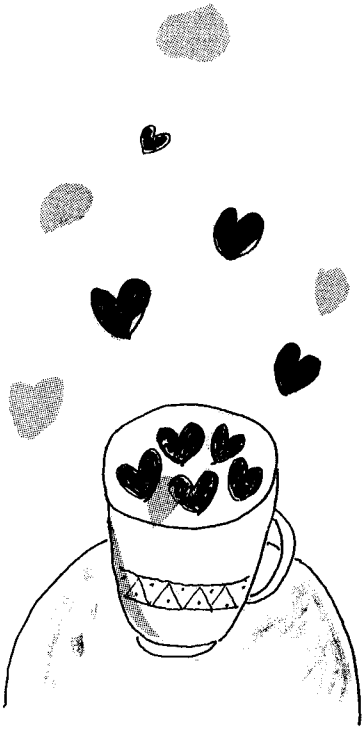
一番私が言いたいのは、「自分の好きなことだけをやって、イヤなことはやらない」という人が増えることが我慢ならないのです。好きなことや得意なことを伸ばすことはいいことです。でも食事を作ることや、風呂を沸かす

こと、掃除をすること、洗濯をすることは人間としてあたりまえのことですよ。別に暇な主婦みたいに手をかけすぎなくたっていいんです。必要最低限で。

やる気になればできると思っているかも知れないけど、慣れないことはめんどくさくてできないもの。

なんでひとり暮らししないの？　親から離れようとしないの？　うっとうしくない？　なんで親は出てけーっていわないの？　家事をさせないの？　生活費をもっと取らないの？　不思議です。

こんなふうにぬくぬく暮らしていたら、仕事だってつらいのを我慢してまでやらない人も出てくるでしょう。どうせ親がいるから生きていける、あくせくしなくたってねえ、と甘えてしまうんじゃないですか？　夫の稼ぎに甘える専業主婦と同じですね。これは本人にとっても、社会にとっても痛手ですよ。



このまま「結婚もいや、夫または妻となる人と苦労するなんてやだし、家事だってめんどくさい、子供の世話なんかもってのほか、親と暮らすのが一番楽」なんて大人になりきれない人（男ならマザコンとか）たちばかりが増えるなんて、皆さんどうお考えになりますか。人それぞれじゃないの？で済まされるのでしょうか。

パラサイト・シングルを許している親の方、私が納得できる反論をしてくださいませんか。夫と仲が悪いから子供が生き甲斐とか、家事は私の仕事なんだから取らないでとか、どうせ女の子は結婚したらやるんだから、独身のうちは楽させてやりたいとか。息子は結婚したら、奥さんがやってくれるんだからいいのよ、なんていう反論はやめてください。通用しません。このま

ま結婚しないであなたが死んでしまったらどうするんですかって言うんです。

そしてパラサイト・シングル自身の若者にも言いたい！　早く自立しろ！

崩壊学級の実態

神智　正

はじめに

私は教師として、これまでに公立の中学校を四校経験してきましたが、その内の二校で、ちょっと信じられないような荒れを経験しました。

荒れを経験して思ったことは、一旦荒れてしまうと、学校教育というのは何と無力なんだろう、ということでした。問題の子どもたちに対して自分の指導が入っていかない、ほとんど通じないという事態に直面し、自分がこれまでの経験で培ってきた(と思っていた)指導力がこんなにも弱々しいものであったのかということを思い知らされて、絶望的な気分に陥ったものでした。

学級がひとたび集団としてのまとまりを失いますと、授業はもとより、生徒会活動にも学校行事にも、もはや生徒を正常な形で参加させられなくなってしまいます。また学級での日常的活動である日直当番や諸係の活動や掃除活動なども、どれもこれも、とてもいい加減なものとなっていってしまいます。学級集団が崩れる、あるいは集団が歪むということによってもたらされる、学校教育全般への悪影響は大変なものです。また、生徒一人ひとりに及ぼす人格への悪影響は計り知れないものがあります。

崩れた学級集団がかもしだす人格破壊の力

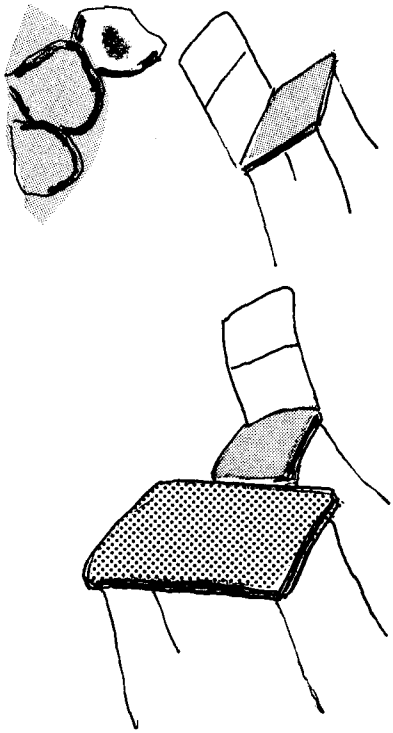
平成四年度に赴任したばかりの私は三学年を受け持たされましたが、その学年は年度初めからあれよあれよという間に崩れ、荒廃していったのです。

一学期の半ば過ぎには妙な雰囲気になってきました。そして二学期の中頃には、授業中ごく普通の生徒までもが大声でおしゃべりをしたり、漫画の本を読み出したり、異なる教科の問題集をやったりする者が出てきました。

ある時、授業中板書を終えて振り向くと、優等生のS子が漫画を広げて読んでいるのです。S子はそれまで聞く態度はよかったし、発表力もあるし、ノートも素晴らしいし、それだからテストの点もトップクラスだったのです。そのS子が漫画を読んでいる。

私はS子に向かって、「授業中なのに、君までが本気で漫画を読む気じゃないだろうね」と言いますと、目鼻立ちの整った純情そのものの感じのS子は、ちょっと顔を上げて私を見、「アハハハハ」とただ笑うと、再び下を向き何も言わず、その時間が終わるまで平然と漫画を読み続けたのです。

それから一週間くらい後の授業でのことでした。授業中、同じように板書を終えて振り向くと、今度は男子生徒五人が最後列のあたりで、トランプをしている姿が飛び込んできました。ついさっきまでそんな姿はなかったのですから、これは彼らがトランプ遊びをしたいというよりも、明らかに私への嫌がらせ、私への意図的な授業妨害であるわけです。許すべからざることと思い、すぐさまやめるよう注意をしたのですが、彼らはトランプを続けるふうを装いながら、「やってない」とうそぶくのです。



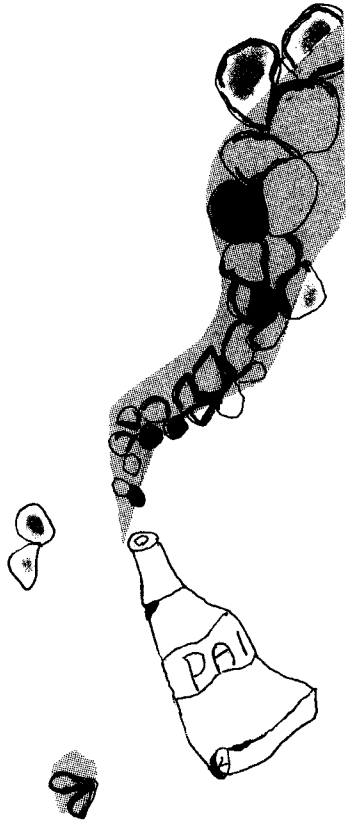
私がこの目で、トランプをしているのを見ているから注意しているのに、「やってない」と言いつつ平然と続けるのです。ひどいものです。ここまでどうして悪くなれるのかと思うと同時に、私はカッとなって怒鳴っていました。

「現に君たちがやっているのを、私がこの目で見ているから注意しているんだ。それをやってないとは、おまえたちはバカじゃないのか」

そう言った途端、一人がガバッと立ち上がり、「バカと言ったな」と私に殴りかかってきました。自分たちの行為は棚に上げて、私の「バカ」と言った言葉に、今で言えば切れたわけです。殴られる寸前に、前列の二人の男子生徒がその生徒を抑えてくれたので事なきを得たのです。

また、同じクラスでのことでしたが、別の社会科の時間に、教室に入っていくと数人が、紙飛行機を飛ばし、互いにあてっこしているのです。「授業をはじめるよ」と言っても一向にやめません。

そのうち、他の一人の生徒のおでこに飛んできた紙飛行機の先がツンと当たりました。彼はカッとなってその紙飛行機を丸めると紙つぶてにして投げ返しました。すると相手側も紙つぶてを投げ返し、紙つぶて合戦がエスカレートしていきました。すぐに消しゴムが飛びかうようになり、そしてハッ



としたのですが、遂に、そのうちの一人がガラスの瓶（絵の具の入った握り拳半分ぐらいの大きさの瓶）を力一杯投げ返したのです。それが教室中央の柱に当たって、破片があたりに飛び散ったときには、怪我人が出るんじゃないかと、ゾッとしました。

ちょうどその時、巡回に当たっていた担任の先生の姿が廊下に見えたので、私は助かったと思ったのですが、その先生、教室の異常な騒動に気づかないはずはないのに、教室に入ってきませんでした。

一般の生徒はというと、いつの間にか被害を被らないように机を前と後ろに寄せて、教室の真ん中を空けてじっとしていました。我関せずです。「友達だろう、やめるように言えないか」と言ってみたら、「この雰囲気じゃ先生、何か言えるはずがないでしょう」と言われてしまいました。

集団が崩れてしまって荒廃しきっているので、デタラメを押し通す者を制止する力が働かないのです。たとえ正義感の強い子がいたとしても、ここまできたらもはや何もできないのです。

社会の授業をすべくチャイムと同時に教室にはいると、生徒が十人いるかいないかでガランとしています。理由を聞くと、前の時間に体育の授業内容がバスケットの試合で、男子の大半はそれがおもしろくて、時間を無視してゲームを続行しているのだというのです。様子を見に行くと、体育教師の注意にも耳を貸さず、バスケットゲームに夢中の様子。誰も止められない。

一年の体育の授業が始められないので、一年生が体育館の脇で、三年生の身勝手な振る舞いをジーと見入っているといった状況です。女子のかなりの部分も男子に調子を合わせ、というかこれ幸いに授業開始のベルを無視し、好きなところで仲間と「たむろって」おしゃべりを楽しんでいるといった案配です。

職員室の生徒指導部の係に状況を伝えると、デタラメをやっている生徒の

保護者に連絡を取るなどの対応がとられ、早く駆けつけてくれた親もいて、その親の手前、授業時間の終わり頃、彼らは不承不承、しかし悪びれもせずぞろぞろと教室に戻って来たのでした。

際限なくエスカレートする無軌道ぶり

奈良・京都方面修学旅行の行きの新幹線車中でも、早くも許せない違反行為が出ました。ビールを飲み、顔を真っ赤にしている生徒が何人か発見されたのです。この時点ですでに、この旅行が相当大変なものになることを、職員の誰もが覚悟したのでした。

顛末はこうです。就寝時間になって、職員が手分けをし、明日に備えて十分睡眠を取るように指導して回っていますと、室内で騒いでいる部屋があるのです。中に入ろうとしますがドアが開きません。禁止されている「内側からの鍵」を掛けているのです。ドアに耳を当てて中の様子をうかがうと、彼らツッパリグループが学級を超えて一堂に会し、酒盛りをしているようです。

彼らは普段でさえ、衝動的、感情的、刹那的に振る舞う連中です。アルコールが入ったらどんなことになるか、それは火を見るよりも明らかでした。

一時が過ぎて、彼らは真っ赤な顔をして部屋からどっと出てきました。「就寝時間が過ぎている、早く自分の部屋に戻って寝るように」との注意に従う気配は更々なく、下に行くのだと言って聞きません。彼らの部屋は四階にあり、下、つまり一階には女子の部屋があって、その女子の部屋に行こうというのです。私たちはあらかじめそうしたことも予想して、男子を旅館の最上階に割り当て、女子は一階の、しかも職員の目のよく届くところに割り当てたのでした。

ほとんどの職員、特に男の先生方は階段に身体を寄せ合って、必死で彼らの行く手を阻んでいます。階下への通路はそこしかないので、そこさえ守れば大丈夫と職員の主力をそこに集中していたわけです。ところがそれは意外な落とし穴があったことを後で知ることになりました。

真夜中に、階段途中での押し戻したり押し戻されたりの攻防が二時間ほども続きました。子どもたちはいざ知らず、朝早くから休みなしの引率指導でくたびれている私たち職員は、もし三、四時間程度の睡眠がとれないとなると、翌日は相当にしんどいことになります。

二時三十分を過ぎた真夜中の頃でした。職員の主力が階段途中の激しい攻防を繰り返している間に、ゆゆしき事態が進行していたのです。女子の職員が女子生徒の部屋を巡回していくと、この遅い時間に話し声が聞こえます。しかも男子の声が混ざっているのです。まさか、さては、でもどうして？

男の先生を呼んで部屋の中に入ってもらいました。布団から出ている生徒は誰もいません。みんな布団の中に入

り、今や静かにしています。
「この中に男子がいることは分かっている。それがどういうことであるか、冷静に考えれば分かるだろう。直ちに出てこい」
さすがに観念したとみえて最初は一人が、張りつめた職員の気配を感じてか、さらに二人の男子生徒が布団の中から出てきたのです。彼らは好きな女性と添い寝?をしていたのです。布団に招き入れた女子生徒も既に相当なところにきています。
それにしても彼らの一部は、男子職員があれほど厳重に警戒していたなかを、どうやって抜け出て下に降りられたのか疑問でした。問いただして分かったことは、思いも寄らぬこと、窓から外に出て雨樋づたいに下まで降りていき、女子の部屋の窓をノックして入ったのです。このことは同時に、男子の進入を待っていた女子生徒が何人もいたということになります。
もし高所から足を踏み外しでもしたら、と考えただけでもゾッとしました。
その他、常軌を逸した彼らの行動が重なっていったので、私たちは修学旅行をこれ以上続ける意味がないと判断し、旅行をうち切って直ちに引き返す覚悟を決め、ツッパリグループと話し合うことにしました。重大な話がある旨を告げて彼らをロビーに集め、話し合いをしたのです。
結果、彼らは、「オレたちは悪い。しかし、他のみんなは関係ないのだから、全員を引き上げる必要はないだろう。オレたちだけが帰ればいい」と言うので、即、生徒指導担当職員が引率して帰路に就くことになりました。しかし、この後の処理が残念な結果を生んでしまいました。
それは担当職員のちょっとした温情(甘さ)から、すなわち「もしお前らが、今後おかしなことはしないと約束するなら、旅行を続けてもよいのだが……」と水を向けた途端、せっかく帰る気になっていた彼らの決意は揺らぎ、「もう二度としないから」と口先だけの約束をさせることとなり、担当職員の言葉を真に受けて旅行を続けた私たちは、言うもおぞましい思いをさせられることになったのです。彼らは何の反省もなく、破廉恥極まる行動を取り続け、職員は誰しもほとほと疲れ果てて、空虚な思いでこの修学旅行を終えることになったのでした。
昼食の時間にラジカセを教室に持ち込み、耳をつんざくような大音量ではやりの曲を流したり、授業中教室を抜け出て校外に行き、お菓子や食べ物を買ってきて好きなときに食べるなどということが日常茶飯事になりました。ちょっと注意をしたり咎めれば対教師暴力に発展しかねないのです。この段階ではソフトな注意の仕方しかできません。
暑い時期には、授業中によそのクラスの問題児がアイスクリームをぺろぺろなめながら入って来て、平気で数人の者に話しかけ、話をする度にアイスクリームが辺りに垂れ落ちる、といったこともしばしば。こうした状況を眼

前にする教師の胸の内をお察しいただきたい。他のクラスの者が好き勝手に教室に入り込み、勝手なことを言ってゲラゲラ笑ったり、時には突然怒り出すのですから、授業妨害も極まれりです。

トイレの扉という扉は蹴破られ、蝶番をねじ曲げて半開きになっているもの、きちんと閉まらなくなったものがほとんど。男子のトイレ側から女子トイレに穴を空けられたことも。廊下の天井や一部の教室の天井はモップなどで数知れない穴を空けられ、教室の机はまるで版画のように落書きがほどこされていきました。階段の踊り場などに付けてある全身を移す等身大の鏡は全て、いつの間にか剝がされてどこかに運び出されていました。火遊びをして体育用具庫が焼けそうになったこともありました。

このようにして器物破損が進行していきました。

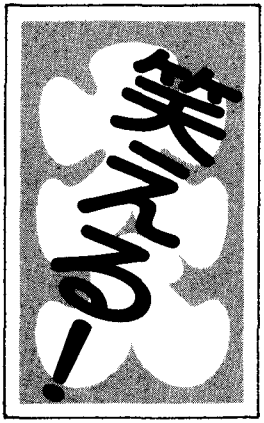
校内のあちこちにアメやガムなどの包み紙が散乱するようになり、二つの

校舎の間にある中庭（花壇や枝振りの良い木々、鯉が泳ぐ池がある）さえ、飛ばされた紙飛行機で覆われんばかりになっていきました。紙飛行機の材料は授業などで配られたプリント類です。

これらは一部の者の仕業という段階を過ぎて、学年全体の生活がしまりのないルーズな段階に進んだことを示すものです。

平成四年度の荒れの原因は、小学校で既に問題行動を多発させていた双子の兄弟の存在と、その保護者の子どもへの関わり方の不正常さ（異常さと言うべきか）に、そもそもの根はあったと言えるのです。兄弟はわがままや問題行動を暴力で押し通し、親はひたすら子どもをかばい、担任教師や学校のやり方を批判し続けたということです。すでに特別な存在と化した兄弟が、中学で暴力を背景に仲間集団を形成し、わがもの顔に振る舞うのにそんなに時間はかからなかったのです。

（え・田沼千恵）



ママゴン

東京都世田谷区　太田啓子（41歳）

横文字に弱い母は、どうしても「マザコン」という言葉が覚えられない。何度注意しても、「ママゴン」と言ってしまうのだ。先日も、

「Eさんの息子って、すごいママゴンなのよ。もう社会人だっていうのに、一日に何回もお母さんの携帯に電話してくるんだから!!」

といきまいていた。

その昔、阿部進という人が、教育ママのことをママゴンと呼んでいたのを思い出す。

そこで一句。

ママゴンが　育てた息子　マザコンに

こう考えてみると、ママゴンとマザコンには、深いかかわりがあるではないか。

それなら母が、何度間違えても仕方がない。

母自身、まぎれもなくママゴンだったのだから。

（え・弘法堂達二）

自費出版は「わいふ」へどうぞ！

「わいふ」編集部では自費出版の制作をしています。本をお出しになりたい方はぜひご利用ください。

自分史、回想録、旅行記、童話、詩集、歌集、句集、同人雑誌、絵本、コミックまで、何でも作れます。

イラストも用意できますし、お書きになれない方のために、聞き書きのまとめもいたします。

費用はモノによりいろいろ違ってきますが、市価よりは確実にお安いです。事情を伺いご相談に応じますので、ぜひお問い合わせください。

ちなみに最近は、読者からのご依頼により、「紅の雲」、「春のかたみ」、「出会いに合掌して」などを制作いたしました。

皆さまも人生の記念に計画されてはいかがでしょう。

父の死

東京都新宿区　林　直美

父がいよいよ最期の時を迎えようとしている。胃癌の転移で、父の肝臓はその機能をまったく果たさなくなっていた。全身倦怠感、黄疸、腹水、振戦、点状出血と、肝臓の末期症状が、一つ、また一つと父の体に現れてくる。

夏が終わろうとしている九月、手術からすでに三カ月が過ぎた。病院のベッドの上で、父は今、身のおきどころのない、たとえようもない激しいだるさに襲われて、苦しんでいる。

五月中旬、夜になって、四国の実家の母から電話があった。様子を聞いてくれるいつもの電話だろうと、明るく返事をしたら、母は神妙な声で父の入院を告げた。

なかなか調子の良くならない父が、ちょっとした診察のつもりで気楽に行ったかかりつけの病院で、検査の結果、胃潰瘍で緊急入院になってしまったのである。

これには母も驚いたが、父も驚いたらしい。父のいない家から、母は東京の私と福井県の兄の家へ電話をかけたのである。

父は入院後、他にもいろいろな検査を受けた。はっきりした結果が出るまで、約二週間待つことになった。

約一週間が過ぎた金曜の夜、母から電話があった。母が病院から戻っている間に、家に主治医から電話があったらしい。

月曜日に結果を説明するので、父に見つからないように外来へ来てほしいといわれたのだ。ごく短い会話の中で、主治医は「残念ですが」と言ったそうだ。

月曜日、覚悟を決めた母が外来へ行くと、話が通じていたらしく、すぐ看護婦さんに診察室のような小さな部屋へ案内された。そこで母一人が、主治医からの説明を受けた。結果は胃潰瘍ではなく、悪性腫瘍、癌だった。胃はもとより、すでに肝臓へも手術ができないほど転移しており、リンパ節への転移もあって、父は末期状態にあり、余命六カ月と宣告されたのである。

「一病息災」と思ったのに

父は現在七十一歳で、仕事をしていた頃は、高血圧や胃潰瘍やアトピー性皮膚炎など、いろいろな病気を少しずつかかえていたような感じだった。

退職してからは、糖尿病が主体であったが、常日頃から足がしびれる、冷える、頭がふらつく、肩がこる、鼻が気持ち悪い、体がだるいなどと、いつも口癖のように言っていた。しかし、自らも一病息災と言っ

て、ぶつぶつ言いながら元気で、特に問題もないような感じだったので、まさかこんなことになるとは思いもしなかった。

振り返ってみると、虫が知らせたのかもしれない。偶然と言われればそれまでだが、私は父の入院を聞く前に、自分もそろそろ親との死別を考えなくてはならない年になったと、しみじみ思ったことがあった。息子が六歳を迎え、生まれた日の曜日が一巡したことに、私は深い感慨を覚えたのだ。その時に、ふと子供にとって初めての身近な人間の死は、やはり祖父母ではないだろうかと考えてしまった。

友人の年賀状にも、やたら喪中のハガキが目につくようになった。私もそろそろ覚悟しなければならない年代にきたということである。自分の親だけがいつまでも生きているはずもなく、いつかは死別する日が来ることを覚悟せねばならぬのだと、自分に言い聞かせたばかりであった。

父の病名が末期の胃癌であるとわかってから、一週間、今度はそのことを父に告知すべきかどうかで、頭を悩ました。母と兄と私で電話を使って相談した。だが、離れて暮らしている子供なんて何の頼りにもならず、結局は、看病することになる母に任せるしかなかった。

父に癌と告知することは、父の気力をなくし、がっくりさせて治療への協力が得られないことは、火を見るよりも明らかだった。父はかつて告知を希望していたが、それは自分が健康だからこその結果だと思う。元気な時だからこそ、自分がそんな場に立たされるとは夢にも思っていないからこそ、豪語できたのだと思う。母も兄も、それから父のことをわずか数日しか見ていない主治医さえも同じ意見だった。

検査結果が遅れていると言って、父を焦らせてしまったのだが、主治医は大きい胃潰瘍と説明した。しかし直径が三センチもあるともはや潰瘍とは言わないと話し、主治医は胃癌をほのめかした。父は手術が適応される場合でも、潰瘍なら切らずになおすと頑固に言い張ったからである。

五段階評価だと、すでに一番悪い五の状態で、最高に悪いのだとそこまで言ったのだが、結局、話の中で主治医は癌という言葉を一言も口にしなかった。

主治医から説明を受けた夜、父はベッドの上で天井の一点を凝視するようにして、身動きひとつしなかった。深く落ち込んでいた。胃を切らなければならないことと、自分が癌だと察したことで、激しいショックを受けていた。揺れ動く気持ちの中で「先生は一度も癌とは言わなかった」と、かすかな希望も父は持っていた。主治医の細かい配慮のおかげである。まだ三十代の若い医師ではあったが、優しくて誠実で、父のことにも一生懸命に取り組んでくれた。

結果的に、父には暗黙のうちに胃癌を告知したことになったが、肝臓やリンパ節への転移と余命六カ月ということはふせてあった。

一刻も早く手術を受けた方がいいのだが、かかりつけのこの病院では、今の時期、医者が足りなくて、外科についてはごく簡単な手術しかしていないからと父に説明し、ここよりも大きい市民病院へ紹介された。

手術を決めると今度は、慣れ親しんだこの病院で手術を受けたいと、父がしっかり自分の希望を訴えたからである。父には前述のように説明したが、実はあまりに大きい危険な手術になるために、この病院では設備が整わなくてできなかったのである。父にはふせていた肝臓の方にも薬を入れるための管をつけるなど、ただ胃癌を取るだけの手術ではなかったのだ。六月五日に父の手術が決まった。

父は市民病院でもあれこれと希望を訴えた。特に手術ではできるだけ胃を残すよう主治医に念を押した。病院スタッフにとって、さぞやりにくい、応対の難しい患者だったことと思う。努力すると言って、主治医は父を安心させてくれた。

私は手術が決まったことを確認して、六月三日に帰省した。父はわざわざ帰らなくてもいいと言ったのだ

が、私は幼稚園のＰＴＡ（会長をしていた）が忙しくて疲れたから、父の病気を理由にして帰ると逆に言いわけし、子供を連れて飛行機に乗った。

徳島空港からの途中に市民病院があって、その日私は父に会った。病室へ行くと、父は横になって目を閉じていた。五月の連休に帰省していたので、会わなかったのはほんの一カ月である。しかし、病室での父はかなりやつれた感じがして、私は一瞬声を失った。父は気配を察してすぐに目を覚まし、私や息子に笑顔を見せてくれた。もう、いつものよく知っている父で、「遠くから帰らせて悪かったなあ」と言って、普通に話をした。福井からもひとまず兄だけが帰ってきた。

手術後の日々

六月五日、手術当日、母と兄は朝早く病院へ行った。私は熱を出した息子と留守番になった。前日、それまで元気だった息子が急に熱を出し、不機嫌このうえなく、少し吐いたりもしたので、あわてて近くの医者に駆け込んで薬をもらった。

この肝心な時にと、父のそばにいたかった私は、熱を出した息子が少し恨めしい気もしたが、一日早かったら、私は徳島へ帰ってくることもできなかったのだ。

父の手術は思いのほか早くて、三時間程度で終わった。その夜は集中治療室に入ったが、翌日には病棟の個室に移り、母は手術後からずっと病院へ泊まり込んで、父の付き添いをすることになった。

手術後、母と兄が切り取った父の胃癌を見た。体の中にあったとは思えないような〝異様なもの〟だったらしい。周辺の肉はどろどろに腐っていて、そのまん中に大きな灰白色の、岩のような癌があった。

三分の一ではあるが、胃を残したことを父はとても

ほっとした様子で、術後希望を持ち、回復に向けてがんばっていた。しかし、ほんとうは、胃を全部取っても取らなくても変わらない最悪の状態で、それならばと、父の希望するように胃をわずかとはいえ残したというのが事実であった。肝臓に対しても処置を予定していたのだが、それが役には立たないほど進行していて、何もせずに手術を終えたようだ。父の手術をした執刀医は、手術後の説明の中で、父の余命を三カ月に短縮したのである。

手術後、兄はまもなく仕事で福井へ帰ったのだが、子連れの私は、父の看病というよりは母の手伝いといった感じで、そのまま約二週間徳島にとどまった。

父は順調に回復していった。傷口からの浸出液が多く、この時すでに腹水がたまりかけていることを私は感じていた。しかし父はすべてを手術の影響によるものと思っていたようで、「この年になって腹を切るとは」と、私の前では、病気に対しての苛立ちを時折り見せるくらいだった。

食事も流動食から開始され、点滴を押しながらも歩けるようになり、少しずつ元気を取り戻していった。

父が個室から大部屋に移り、母も夜は帰ってくるようになったのを機に、私はひとまず帰京した。

そして息子の夏休みを待って、再び徳島へ行った。

父は状態が落ち着いてくると、市民病院の環境に再び不満を言うようになり、かかりつけの病院へ転院させてもらっていた。慣れてくると今度はそこでも食事

がまずいなど、いろいろと不満を言った。
ちょうどそこへ、私が息子を連れて帰り、ひょっこり病院に顔を出したものだから、父の思いが頂点に達したのか、急に家へ帰りたいと言い出した。周囲を強引にねじふせて、結局、私が帰省したその日に退院してしまった。長年連れ添って、父の性格をよくわかっている母は、可能な限り家で過ごせるように面倒を見ようと覚悟するしかなかった。
それから約二週間、私は徳島の実家で、母のバックアップ的役目に精を出した。病院でも言い出したら聞かない頑固な父に、よくわかっているとはいえ、母は大変だったようだ。父は娘の私には何も言わなかった。もちろん話はするが、訴えるといったことや、わがままともとれるような言葉は、すべて母だけに言っていたようだ。目の前にいる私に母を呼ばせて、母に枕もとの物を取らせたりして、何やらとても不思議な感じがした。四十年という年月の中で、父と母が築いてきた信頼を見たような気がした。

家に帰ってすぐの父は、生き生きしているように見えた。体調がいいと、家の具合や庭の様子を見回ったりした。車も整備して、母と私の反対を押しきり、運転して出かけて行った。さすがにわずかな距離で戻ってきたが、宝くじを買いに行ったり、大好きな囲碁の本を読んだりと、思いどおりに過ごしていた。
だが、動けていたのもほんの一週間程度だったろうか。次第に疲れるようになって、その後の父は、とにかくよく寝ていた。寝ているというか、肝臓が悪いために、思考力を失わせているというのがほんとうのところかもしれない。肝性昏睡の一歩手前という雰囲気だった。
幸いにも痛みはまったくないらしく、父は穏やかに過ごしていた。ただ、あまりにもよく寝てしまうので、自分でも不思議に思っていたようだ。しかし真夏の暑さもあったし、私も父の横でよくごろごろして見せていたので、不信感を持つまでにはいかなかったようだ。肝臓がかなりはれてきて、手で触れてもわかるくらいになっていたのだが、これも手術の傷跡の影響と思っていたようだ。
母は一生懸命に世話をした。病院での付き添い時に膝を痛めてしまったが、自分のことは二の次で、三度三度の食事にも気を配り、次第に弱っていく父の看病をした。私には母のようにできる自信などまったくなく、頭が下がる思いがした。
母はかつて祖母や伯父（母の母や兄）の入院に、病院に泊まり込んで世話をしたことがある。きめ細やかな看病に、心臓が悪かった伯父は、自分の妻よりも妹（母）を、一日千秋の思いで待っていたらしい。

父も退院する際に、看護婦よりも頼りになる母がいるからと、主治医を説得したようだ。父に「幸せ者やなあ。よう世話してもろて、いたれりつくせりで、うらやましいわ」と言うと、父はにっこりと満足そうに笑っていた。母は「それでも文句を言うんだから」と、あきれたように言って笑った。

八月、私が帰京した間に、私と入れ替わるように、福井から兄一家が帰省して父と過ごした。兄たちが福井へ帰ってから、私は再び帰省した。そのわずか二週間の間に、父はびっくりするほど弱っていた。起きている時には、ゆっくりではあるが普通に動いていた父が、もう、家の中で歩くのもやっとという感じになっていた。兄の帰省時に、風呂やトイレに手すりをつけてもらっていて、それにすがりつくように、ようやく一歩を出している状態だった。腹水はそれほどひどくはなかったが、黄疸は誰の目にも明らかにわかるほど進んでいた。

見かねた母が入院の話をすると、まるで母が父を追い出すかのように言って父が怒ると言うのだ。私も見ていられず、一度ちらっと入院をすすめたが、娘の私には返事をせず、横を向いて何も言わなかった。食事も三口くらいがやっとで、力も入らず、箸さえも落とす時があった。父は落ちた箸をじっと見つめていた。私はこみ上げてくる思いを必死でこらえて、何気なく振る舞い、箸を拾った。入院はしないという父に、母はあきらめていたようだったが、父がベッドから出る

と、とにかく心配で、何も手がつけられない状態だった。
後ろ髪を引かれる思いで、私はいったん帰京した。父に「東京へ帰ってくるから」と声をかけたが、それ以上言葉にならず、私は息子に挨拶をさせた。父は背中を向けて横になっていたが、もう振り返る力もなかったようだ。が、そのまま手をあげて、息子に一言、声をかけてくれた。玄関のドアを閉めたとたんこらえきれずに涙がぼろぼろとあふれ出た。
徳島の家を出るたびに、父とはもう会えないかもしれないと、見送ってくれた父の姿を目に焼き付けてきたが、今回は間近に迫った父の死を感じて、駅へ歩くその間、涙があふれてどうしようもなかった。寝台列車に乗るため、夜道だったこともあって、私は息子のあたたかい小さな手を握りしめて、精一杯泣いた。父が息子にかけてくれた言葉は、私が聞いた父のまともな言葉の最期になった。

父は次の朝、とうとう自分から入院すると言い出した。私が東京の家へ無事着いたことを伝える朝の電話で、父の再入院を知らされた。父はもう限界だったのだ。翌日の午後、父は急変し、私は帰京した次の日の夜に飛行機の最終便で、徳島へ戻ることになった。父の兄妹や、福井から兄一家も夜遅く病院へ集まった。
今度は兄が母のサポートをするために、有給休暇をすべて使い果たす覚悟で、徳島に残ってくれることになった。そして私も一度東京へ帰った。
ずっとつきっきりで看病してきた母は、一日のわずかな二、三時間を兄にたのんで家へ帰った。母はゆっくりすることはなく、家事をするのが精一杯だったが、それでもいい気晴らしができ、ストレスの発散になったことは確かだ。そんな母の様子や、兄がいてくれることで連絡もしやすく、安心感もあり、私には兄の決心がほんとうにありがたかった。

九月も半ばを過ぎた今、ベッドの父は、あれほど身悶えていたのが嘘のように、静かに横たわっている。さらに状態が悪化して、たとえようもないだるさから解放されたのだろう。刺激にもほとんど反応を示さなくなった。父にまだわずかな意識があった頃、床ずれの予防のために体の向きをかえるのだが、母の時は嫌がってしないのに、私が言って手伝うと、父は協力して体を動かした。母にはいつまでも体をさすらせたが、母にかわって兄や私がさすっていると、もういいからと手で示した。母だけが付き添っている時に、だるさから声をあげてうなったりした。
兄や私の前とはあまりに違う父の態度に、母はすっかりあきれていたが、父は無意識のうちに、母を選んでいたのだろう。そういう感じだった。その分、母は

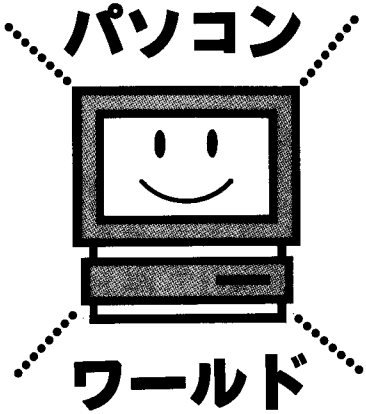
大変で、わずかな間に一回り小さくなったようにやせてしまった。

二十三日、また一段と状態が悪くなった。血圧が不安定になり、薬でさえ維持することができなくなってきた。尿もほとんど出ていない。もうだめかもしれないと見守っていたが、その日は兄の結婚記念日だった。偶然だろうが、父はそれを覚えていて避けたと思われるように、また持ち直した。

父は静かに息をして眠っていた。穏やかな顔をしていた。父がいて母がいて兄がいて、私がいる。私の息子もいたけれど、私が子供の頃はいつも四人だった。こんなふうに四人で過ごしてきたのだ。懐かしいあの頃は、二度と戻ってはこない。そしてもうすぐ父がいなくなってしまう。四人で笑うことはもう二度とない。何とも言えない切ない淋しい気持ちがする。あの家族での楽しかった思いを、今度は私が息子に伝えていかなくてはならない。生きていくというのはこういうことなのかもしれない。

（九月二十四日、午後八時五十分、とうとう父は旅立った。たまたま私と兄が席をはずした、ほんのわずかな一瞬をねらうようにして、母だけに見守られながら。）

（え・カステラネンコ）



パソコンをかわいがる

横浜市港南区●矢島紗恵

夫が十年前に仕事で使うからとパソコンを買ってきた。朝から晩まで働いて帰ってきているのに、その頃、可愛い盛りの子供やまだ若さの残る妻も放ったらかしで、パソコンに夢中になっていた夫。

当然パソコンはケンカの元となり、私はパソコンの回りには近寄るのもイヤだった。

最近、勝手に夫がパソコンを買い換えて、私の立ち入らない一郭はずい分とスマートな機械が並んでいる。

熱心に勧める夫に応えて、Eメールとやらを始めてみた。もともと英文タイプなら四十ワードはこなせていた経験もあり、キーボードを叩くのは不自由しなかった。メールを送るのが楽しく思えてきて、やたらと友人にアドレスを渡したりし始めた。すると、返事等のメールを受けるのはもっと楽しくなった。

夫の策略通りインターネットもやりはじめて、調べ物や買い物にと毎日パソコンと向き合うようになった。夫はそんな私を横目に、シメシメとやらで、デジカメやスキャナー、プリンターと次々に買いそろえた。家計を顧みないでそこまでやられても困ると、またブツブツ私が言いだす。

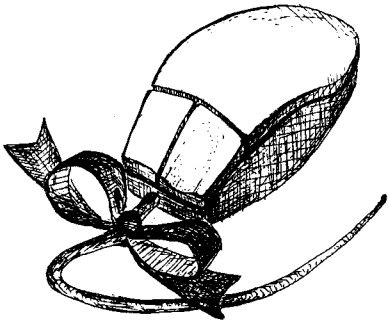
すかさず夫は、こんなものもパソコンでできるのだと、かわいらしい子供の写真の入ったカードを差し出す。最近御無沙汰している、互いの実家に送るのには最適だ。きっと両親は目を細めて見るにちがいない。やられたと思いつつ、やり方を教えてもらうことになった。かくして、年賀状にはパソコンを駆使して家族が干支に変身して登場した。

相変わらず夫は暇さえあればパソコンで仕事をしているが、私は私でそれなりにおつきあいや遊び、サークル活動でパソコンを使いはじめている。とにかく情報量は多いし、時間や曜日を気にせず家に居ながらいつでも勝手にどこにでも行けて、サッとオフできるのだからおもしろい。

若い人だけのはやりと思い込んでいた私だったが、こんな話を耳にした。独居老人にパソコンがはやっているという。足腰が弱って外出もままならず、話し相手も少ない生活にパソコンはいろいろなものをもたらしているそうだ。メル友というメール友達をつ

くって楽しんでいたり、ネットで買い物して食料等生活品を宅配してもらったり、医療相談もしているという。いきいきとパソコンに向かい「自分にとってパソコンは生きがいです」とおっしゃる姿は、りりしくもある。

また、視覚障害者と聴覚障害者がネットで会話しているという話も聞いた。実社会では、両者が自身で会話をすることなど不可能に近いが、パソコンを使うと自由にお互いをつなぐことができるのだ。



感心ばかりしている私に夫はまたもや、もうちょっと勉強すればパソコンで仕事ができるとささやく。

夫を家庭からうばったはずのパソコンは、すっかり私の手でほこりもはらわれ、リビングでかわいがられる存在になった。

行ったこともない遠い所や、出会えるはずもない多くの人々との間をパソコンでつなげる可能性の大きさにはたいへんな魅力を感じる。守られるべきプライバシーへの侵害や、様々な悪さをするやからがいるのは、どの世の中でもなげかわしい限りではある。

しかし、肌や目の色、国籍にも関係無く、年齢、性別、生活が違っていても、お互いをつなげる手段というのは他にあるだろうか。

とにかく、我家ではパソコンを家族仲良く楽しめるまでになって、めでたしめでたしである。

（え・橋本美智子）

お友達に「わいふ」をおすすめください

新しい定期購読者をご紹介くださった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

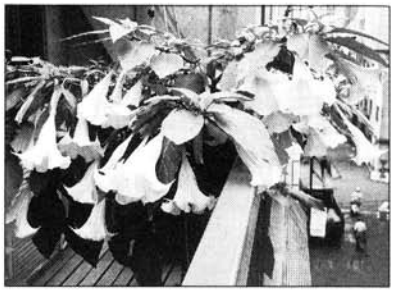
●定期購読者をお一人ご紹介くださるごとに誌代プラス送料とも一号延長。

「わいふ」年間分をプレゼントにお使いください

●ご結婚、赤ちゃん誕生のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。お申し込みいただければ、新読者に、贈り主のお名前とプレゼントのおしらせを同封の上、一年分、計六回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介の場合と同様に、お一人につき一号分延長させていただきます。

●また十冊以上ご購入くだされば割引がございます。



エンジェルス・トランペット

東京都台東区　高梨陽子（57歳）

大きなラッパ状の花をたくさん咲かせる、熱帯花木のエンジェルス・トランペットが、我が家にやってきたのは二年前の春であった。

友人が挿し木して、五十センチぐらいに育てたものを頂戴した。一年ものは開花時期が三回あるというので、いつになったら咲くかしらと首を長くして待っていた。二年目以降は年に四回も開花するという。

生育の早い花木なので、どんどん枝葉が伸びてくる。日光の当たる場所に置き、水をたっぷりと与えることが肝心である。野菜のオクラのような蕾がつくと聞いていたので、毎日のように蕾を探していた。

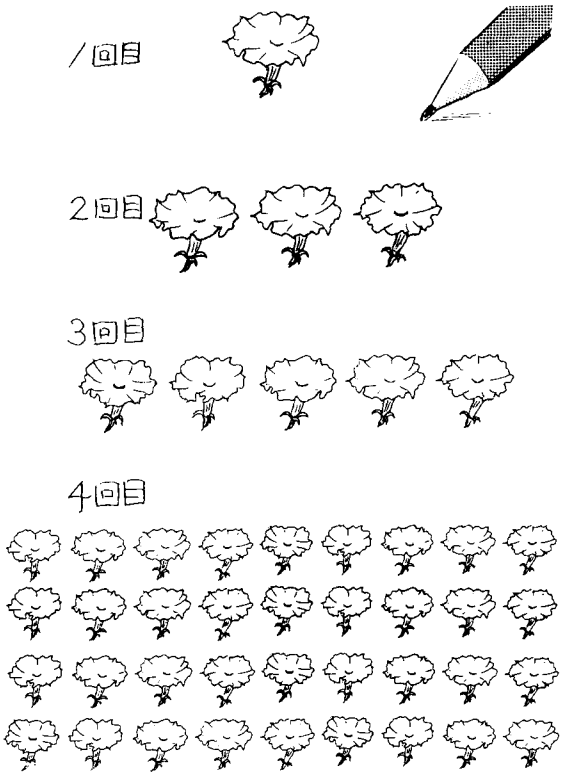
六月中旬になると、やっとオクラのような蕾を四つ見つけて大喜びした。ラッパ状の花が二輪開花したのは七月二日の夕刻であり、花色は白で微かな香りがあった。早速、カメラで撮影して記録した。翌日、残りの二輪が咲いたので写真を撮った。

二番花は九月の中旬に三輪だけ花をつけて終わってしまい、もっとたくさん咲くだろうと期待していたのでガッカリしてしまった。

三番花が咲くころには高さが二メートルぐらいになった。蕾が二十九もついて、十月末からつぎつぎと見事に咲き、十日間も楽しむことができた。十一月三日には、最高の二十五輪も開花したので、ベランダへのドアを開けると芳しい香りが漂ってきた。連日、咲いた花の数を日記に記録し、もちろんカメラにもおさめておいた。

花が終わり、十一月末ごろには中心の幹だけを残して、ほかの枝を切り落とした。切り落とした枝は、二十センチぐらいにカットし、九本を挿し木して友人、知人に差し上げて育てていただこうと思った。春先までは室内で、コップの中で水栽培することにした。

冬の間はコップの中でどんどん根を伸ばし、昨年の四月になってから鉢植えにした。根付いた五月ごろに友人、知人のところへ養子（？）に出したのであった。



友人の住まいは目黒、柏、船橋、土浦とそれぞれであり、四人が別々に引き取りに来られた。また、四本を日暮里にある菩提寺の檀家仲間にお届けした。もちろん、菩提寺のお庭にも植えていただくことにした。ほかは和光にお住まいの方と、佐倉にお住まいのお二人に差し上げ、残り一本はパート先で一緒の、狭山に住んでいる女の子に手渡しをした。

我が家のエンジェルス・トランペットは二年ものになるので、一番花が五月末にひとつだけ開花したのである。

二番花をつける七月になると、枝葉が縦横に伸びて高さが二メートルぐらいになり、狭いベランダの半分を占めるほどに成長した。六十数個の蕾がつき、中旬ごろにはつぎつぎと開花して、二週間ほど豪華な花を堪能することができた。一度に多くの花が咲くと香りも強い。七月十八日には最高数の五十二輪もの花が一斉に咲き、その見事さに圧倒されて興奮してしまった。この二番花は二十四枚撮りフィルム一

本すべてをカメラにおさめて、みんなに得意気に写真を披露している。

二番花が終わった後で、洗濯物や布団を干すスペースが狭められてしまったので、枝葉を半分ぐらい落としてしまった。でも、三番花が九月中旬に三輪咲いたのであった。

十月中旬から下旬にかけて、十日間ぐらい最後の花を愛でる。蕾が四十数個もつき、十月十九日には三十六輪開花した。これで友人の言うとおりに、年に四度、エンジェルス・トランペットを楽しむことができたことになる。

我が家の二番花が咲くころになると、養子に出したトランペットが、それぞれの土地に馴染んで順調に育っているかが気になって仕方なかった。この心境は娘を嫁に出した感じに近いようでもある。ただし、我が家には息子だけで、娘はいないのだが……。

菩提寺には毎月、法話会に出かけるので、玄関前に植えてあるトランペットの成長ぐあいを観ることができた。なかなか育たないので心配していた

が、やっと十一月中旬になって一番花が五輪咲いたので安心した。これで終わりかと思っていたら、二番花が十二月末から年を越して一月の中旬まで、つぎつぎと十輪近く開花したのである。ご住職が「わたしと同じで晩生のようです」とおっしゃる。

花は小振りになっているが、日当たりのいい場所に植えてあるため、冬になっても咲くことができたらしい。寒さには弱いと聞いていたので、健気に咲いているトランペットは感動ものであった。

柏の友人宅では、九月中旬に一番花が二十数輪も咲いたと大喜びであった。二番花は十一月中旬に蕾を十数個つけたが、残念ながら蕾のすべてが落ちてしまったとのこと。

和光のお宅は、八月末に一番花が二十数輪咲いたことを聞いて、安堵の胸をなで下ろした。二番花は十月中旬に七輪咲き、これで終わったという。

目黒の友人宅は十月に二輪咲いただけで終わってしまい、土浦の友人宅も

同じように十月に四輪咲いたきりだったという。でも、一回だけでも花が観られたのでよかった。

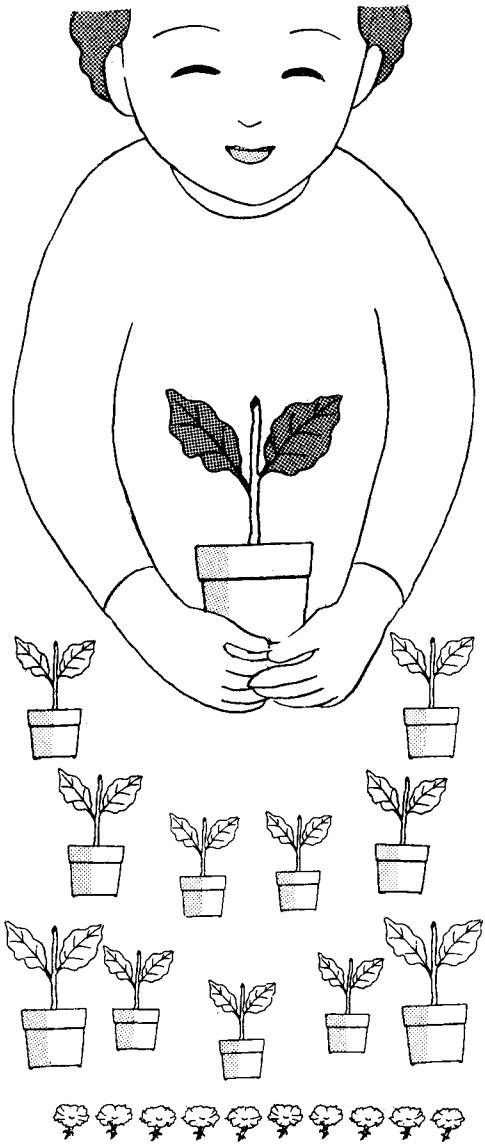
船橋の友人と佐倉のお二人、狭山の女の子宅ではまったく咲かなかったというので、申しわけないような気がする。でも、この四軒のお宅も二年目の今年は、多分花をつけるだろうと期待している。

エンジェルス・トランペットの花色は、ホワイトのほかにピンク、イエロー、オレンジ、レッドなどと種類が多いらしい。

我が家のトランペットが、順調に成長して多くの花をつけるのを、さも私の手柄のように言っているが、実は一日に数回の水やりなど一切の世話係は夫であり、私はもっぱら愛でる一方で、記録と写真撮影係なのである。

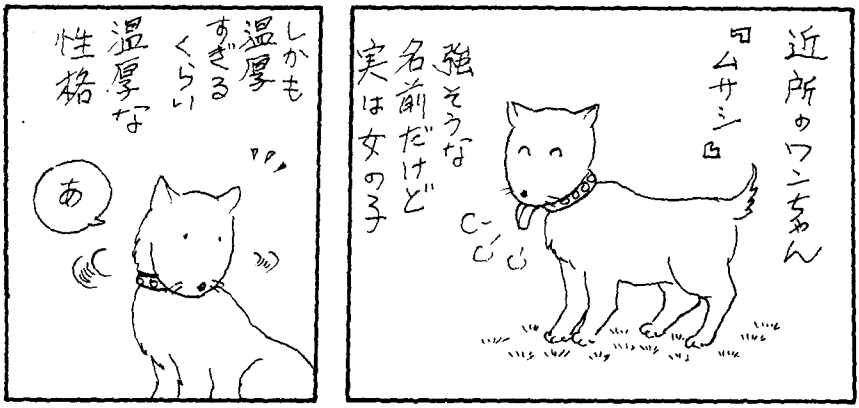
今年もまた挿し木して友人、知人にお届けすることになっている。エンジェルス・トランペット仲間をたくさん増やしていきたいと思っている。

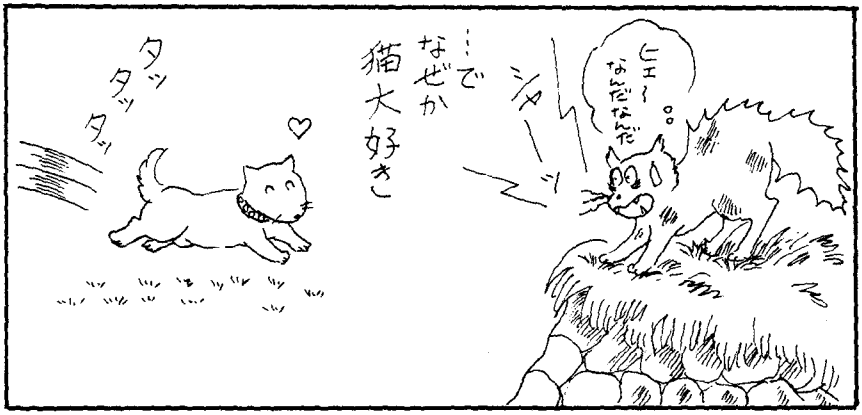
（え・梅村　苺）

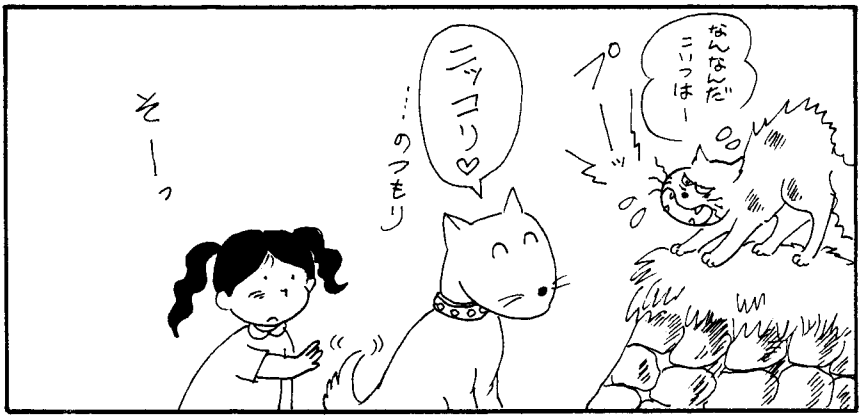


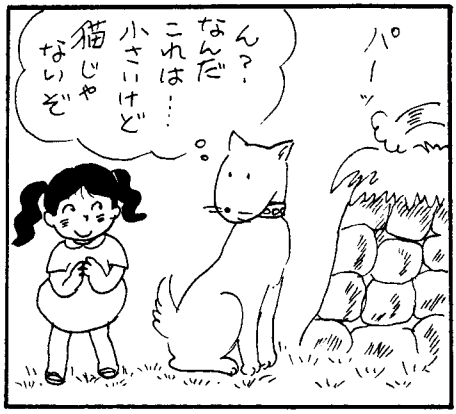
これが子供の生きる道

栗田美紀

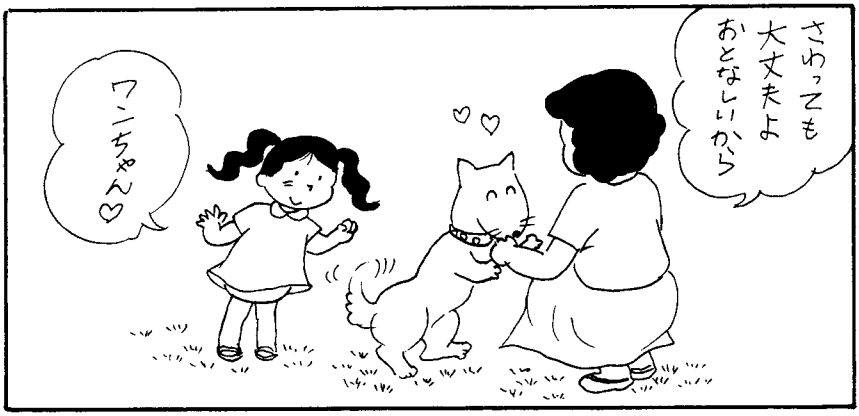


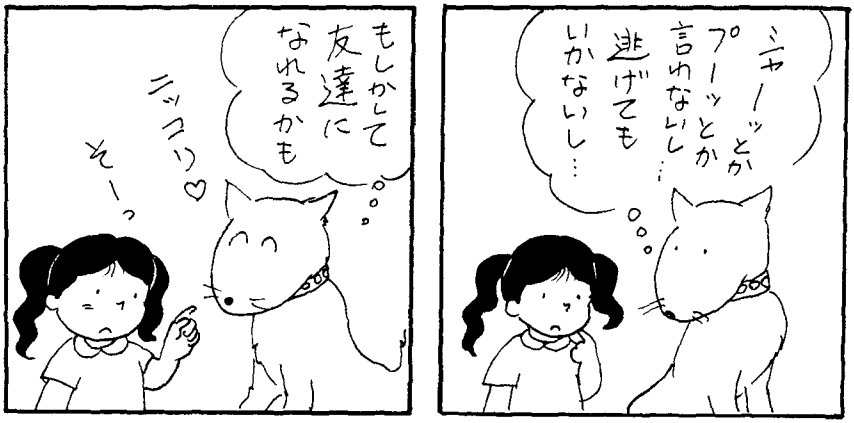



なんなんだ
こいつは―
プー
ニッコリ♡
…のつもり
そーっ

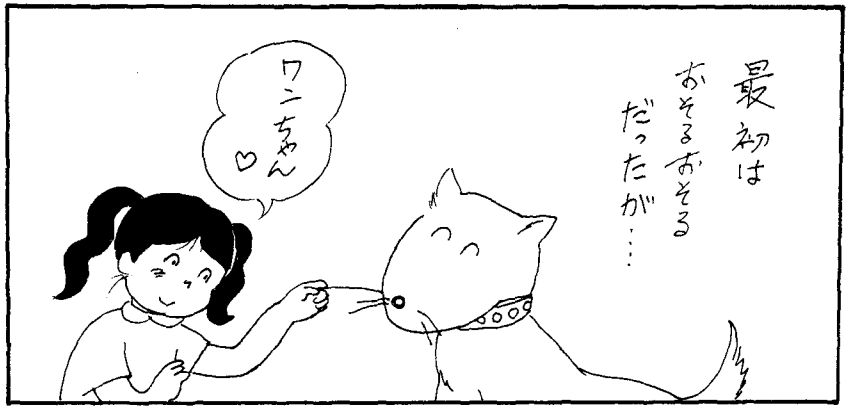

パーッ
ん？
なんだ
これは…
小さいけど
猫じゃ
ないぞ

あら、かわいい
どこの
おじょうちゃん？
あ、
おかあさんだ

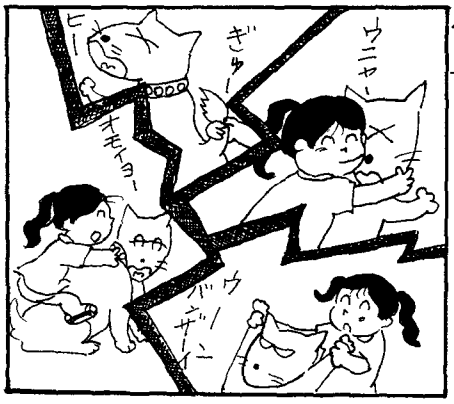

さわっても
大丈夫よ
おとなしいから
ワンちゃん♡

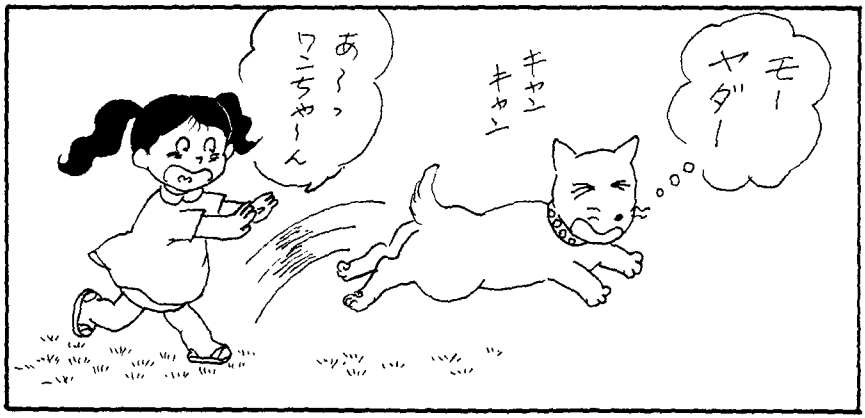

シャーッとか
プーッとか
言わないし…
逃げても
いかないし…

もしかして
友達に
なれるかも
ニッコリ♡
そーっ


最初は
おそるおそる
だったが…
ワニちゃん♡

だんだん大胆な
行動に……
キューッ
そーっ

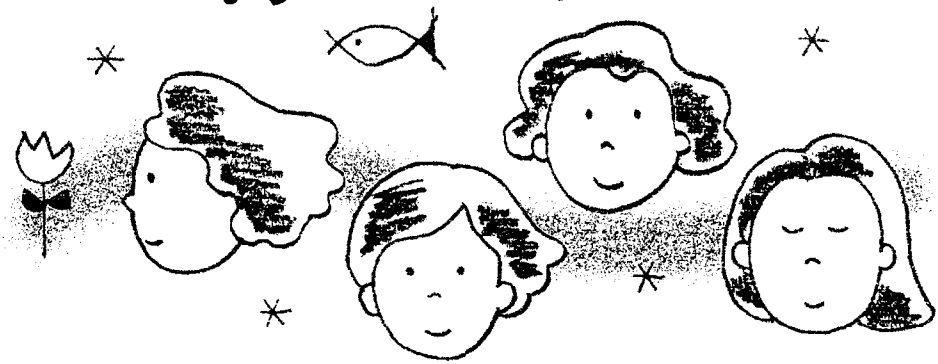

そして……。
ウニャー
ギャー
ヒー
オモイヨー
ウ
ハッ
ザイー


モーヤダー
キャン キャン
あ〜っ ワンちゃーん

あらそう もうすぐ ニオなの
もうすぐ にさい
に、にさい??
そーか にさいって 猫より コワイ 動物なんだ
…と 弁シは この日 はじめて 知った… …かどうか?!

座談会　私も言いたい

日帰り旅行に行ってみた



出席者　菊池裕子　高梨陽子　水落時子
山本郁子
司　会　和田好子　　**編集部**　田中喜美子

どんな旅行がお好み？

司会　この度の座談会は「日帰り旅行に行ってみた」というタイトルなんですけれども、皆さん、日帰り以外にも、一泊ぐらいの旅行はよく行ってらっしゃるみたいなので、その両方の経験をいろいろお話しになってください。

私は時間がなくて全然行かれないんだけれども、大旅行ではなくて、ちょっと行くっていうのもいいですよ。日本は幸いにして四季があって、見るところがたくさんある。

菊池　私、旅行大好きで、日帰りは年中行ってますけど、ツアーはこの間初めて一人でバスに乗って行ってきました。

バスで行くツアーは、こういう案内が来るんですね（厚さ二センチほどのパンフレットを見せる）。これはKツーリストなんだけど、これから探したりして。

司会　そんな本が出てるのね。

水落　会員になると送ってくるんですよ。

電車やバスもあるし、北海道や九州とかいろんなところがでてる。

菊池　海外もあるし。

山本　私は、日帰り旅行ってあんまり行ったことないんですけどね。この間、赤城山の俵崩子さんのところで、陶芸をするツアーっていうのがあったんですよ。

司会　そんなツアーまであるの。

山本　それがけっこう、面白かったんです。俵崩子さんが長い時間付き合って、親切に指導してくださったり。大きなお皿を作ったんですけどね、模様は素人には描けないので、木の幹に陶器を押し付けて模様にしたんです。ユニークな面白いのができる。窯で焼いてから送ってくれるのが、まだきてないんですけど、楽しみなんです。

私、ゆっくり行って、お昼もゆっくり食べてっていうのが好きなんですよ。だからバス旅行って苦手でまず行かないんですけどね、今回はよかった。

水落　私は美術館巡りをするんですよ。MOA美術館の「紅梅白梅図」なんかは、年に一回、一般公開されるわけです。そういうのを狙って、梅を見ながら美術館を巡って歩くっていう日帰り旅行はよくしてましたね。

司会　それはどこで募集してるの？

水落　これはね、パックとかじゃないんです。自分で行くんです。

田中　どういうふうに行くわけ？

水落　MOA美術館と、熱海の梅林に行こうと思ったら、自分で鉄道から調べて。ほとんど電車ですね。土日に行くときには、車だと混んで昼間は動けないですから。

司会　自分で計画して短い旅行を楽しむということね。

水落　そうですね。パックは、たとえば山梨の美術館でミレーの絵の展覧会があるときなんかね、ブドウ狩りとセットされているパックツアーに行きました。土日はだめです、やっぱり。時間のゆとりがない。

菊池裕子さん

日本人は、やっぱり花見

高梨　私は日帰りバス旅行っていうのは、だいたい花巡り。ヒマワリを見たり、桜を見たりとか、そういう花を見るツアーにパックで行くんですね。

高遠（たかとお）に桜を見に行ったときもちょうどいいとき見られましたし、それから、三春（みはる）に泊まりでいったんですけど、滝桜、あそこもちょうど見ごろでしたね。

花を見に行くときは、まず最初、問い合わせるんですね。東京には各地方からの観光案内所があるので、電話をかけて、「どこどこに行くんですけど、花はいつごろが見ごろでしょう、平年だといつごろですか」って。日帰りパックツアーでも、申し込むのは一カ月前ぐらいですから、前もって聞いておくんです。そういうふうにして行くせいか、はずれってことはそうないん

山本郁子さん

ですね。

山本　はずれる人が多いんですよね。高遠なんか、五、六回行ってもまだ当たったことがないって方がいた。

司会　そんなにうまくいかないものなの。

水落　特に桜はね、見ごろが短いでしょう。

菊池　角館（かくのだて）の桜もね、四月の末がすごくいいっていうので、一月から申し込んでいる人がいるんだそうだけど、今年はだめ。開花が遅れたから連休明けになるって。

高梨　去年は早かったのよね。連休で間に合わなくて、みんなキャンセルしたんですって。

山本　花の咲いてないときと、咲いているときと、全然違いますものね。

司会　そりゃそうだ、「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」っていうじゃない。

山本　本当にそう。私、角館の枝垂れ桜を見に、ちょうどいい時期に行ったんです。夏に行くとね、ただの柳なんですよ（笑）。

司会　だけど、桜を見ることを花見っていうじゃない。ところが、この頃はコスモスを見に行ったり、水仙を見に行ったりね。「何のこともないような花をよく見に行く」って私が言ったのよ。そうしたら「たくさん咲いてればそれでいいんだ」って。

山本　そうですよ。

菊池　きれいですもの。

高梨　すごいですよ。私もコスモスを山梨へ見に行きましたけど、休耕田になっているところにみんな植えているわけ。いろんな色で、すごくきれいですよ。

司会　昔はなかったのよ、そういうのは。みんなお米を作っちゃうしさ。

水落　ヒマワリがそうですよ。

高梨　人寄せに。

田中　ヒマワリが咲くのがきれいなの？

水落　中を迷路ができちゃったりね。

田中　あんな花……。

水落　群生するとやっぱりきれいですね。

司会　ヒマワリは油取るんじゃないの？種から油を取るのよ。マルチェロ・マストロニヤンニとソフィア・ローレンが出てくる映画「ひまわり」、あのロシアのヒマワリは油取るためよね。日本じゃ見せるためなんだ。

菊池　村おこしです。

司会　とにかく何の花でもね、咲きさえすればみんなわーっと見に行く。

菊池　そのクチですよ、私は。

田中　やっぱり日本人にとって最大の喜びっていうのは、花なのかねえ。桜と言わず。

菊池　季節感があるから、一年に何回も行くじゃないですか。旅行会社が考えることは、いかに人を寄せるかですから。「この週しか見られないお花です」とか、「ここまで行くとこういうのがあります」って持ってくる題材として、お花は四季があって客寄せにいいですね。

花よりダンゴ

司会　イチゴ摘みのツアーなんてのもありますよね。

水落　ありますね。

司会　この間、イチゴ摘み農園のイチゴをもらったら、えらくおいしかったんでね。これならちょっと行ってみるべきかなっと思ったのよ。新鮮なのを取ってすぐ食べればやっぱりおいしいわけよね。

水落　一味違いますよ。

山本　おいしいって言いますよ。

水落　私、久能山に行ったことがあります。やっぱり桜と一緒で時期があるんですよ。人が摘んだあとに行ってもだめ。

菊池　もう堅いイチゴしかないものね。

水落　食べ放題でもだめなんですよ、取られたあとだから。どのハウスに入れてもらうかで違ってくる。まだ誰も入ってないハウスがいいんですよ。

菊池　和田さんの食べたのは、ちょうどいいのがわかる専門家が採って詰めてくれたから、おいしかったんでしょう。素人が見て赤けりゃいいと思ったって、内側がまだ白かったとか、そういうことがあるから。

田中　行ってみたら、一個もなかったってことはないの？

菊池　一個もないところには入れないですよ。

水落　まだ赤くなってないのがいっぱいあるっていうことはありますけどね。

菊池　探しているうちにおなかいっぱいになっちゃう。

山本　胸がいっぱいになっちゃう。

高梨　やっぱ、詐欺じゃない、それじゃあ（笑）。

水落　パック旅行の面白さは、そういう食べ物と、見どころがセットになっているところですよね。私は久能山で徳川家康のゆかりのものを見て、イチゴ摘みに行ったんです。だからイチゴ摘みだけで、あんまり熟れたのがなくてしおしお帰るのはイヤだけど、久能山で満足したものだから「まあイチゴはいいか」とかね。

菊池　だいたい、二つくらいセットにしてある。

司会　なるほどね。やっぱりお客を呼ぶものが二つあったほうがいいですよ。

高梨　二つとか三つとかありますよね。

水落　女性を集めようと思うと、一つは必ず食べ物よね。

山本　おすし食べ放題とかね。

水落　私は佐渡に行ったときに、カニ食べ放題だったんですよ。みんながカニをもりもり食べながら「何とこのカニはやせてる、肉がない」とか言っていたんです。そうしたら添乗員さんがね、「いやあ皆さん、よく召し上がれていいですよ。先週なんか海が荒れて、船は大揺れ。みんな酔っちゃって、陸に上がったときにカニ食べ放

題でもほとんど食べられなかった。皆さんはよく食べられます」って（笑）。中身が少ないって、文句も言えない。

菊池　ディナークルーズだって、私は行かない。夜景を見ながら船の中でお料理なんていうのは、だいたい揺れてね、気持ち悪くて食べられない。

田中　酔う人はだめだわ。

旅の目的さまざま

田中　皆さんやっぱり、旅行の目的は花見っていうのが最大なの？　食べるのは別として。

菊池　いろいろ目的がありますよね。

菊池　やっぱり、花・温泉・味覚の旅が多いかな。

司会　温泉の旅があるわね。

山本　日帰りの温泉もありますよね。でも、温泉に入ると慌ただしい。

高梨　だから私は日帰り温泉の旅行は行かない。

田中　私も。

菊池　温泉に入るのが、楽しいんじゃない？

水落　日帰りで入るのはつらいね。きつい。

司会　温泉って、泊まれば二度も三度も入ったりするじゃない。日帰りだと一回だけだから意外と疲れないと思うけど。

水落　旅館の名物をお昼ご飯に食べて、お風呂にも入れますよっていうパックがあるんです。温泉は付け足し。

司会　四国の巡礼もパックツアーで、十日くらいで回っちゃうらしいね。くたびれるだろうなあ、八十八カ所回るのは大変だろうなあ、なんて思うけどね。

高梨　だって今、飛行機だかヘリコプターで、空から回っちゃうっていうのがあるって。

司会　そりゃあ、ひどい。

水落　冗談じゃあないわよ。

高梨　何のためにやってるのかねえ。

司会　とにかく歩けば千五百キロっていうんだから、そう簡単なことじゃないわけ。それでそういう考えがどうしても出て来るんでしょう。今の世の中忙しいからね。

格安ツアーに行ってみた

山本　でも日帰りの旅行って気楽ですよね、安いし。

菊池　そうそう。

山本　日帰りで二千九百八十円（ニーキュッパ）とか、あるわよね。

田中　えーっ。

高梨　私が行ってきたんですけど、お弁当付き。熱海の梅園を見て、修禅寺の梅林と長岡の菜の花を見て、それで伊東の桜の里で桜を見るというコースだったんです。

　ただし書きに「菜の花が摘んであったら見られません」ってあったのね。私たちが行ったときは、もう刈っちゃいましたっていうことで、菜の花はだめで。

　伊東の桜は、添乗員さんが言うには、「早咲きの本数が少ないので行ってもつまらない」と。「そのぶん、熱海の梅園と修禅寺の梅林で時間を取ったほうがいいんじゃないでしょうか」って、聞いてくださったので、じゃあいいですってことで、

結局四カ所行くところが二カ所にはなりましたけど。

司会　ゆっくり見られた？

高梨　まあまあですね。そうはゆっくりできなかった。

菊池　四カ所見てたら大変だものね。

司会　お弁当の味はどうなんですか。

高梨　幕の内風の、普通に買えば四百円くらいかなあ。一応彩りよく。何しろお弁当がついて二千九百八十円なので。

司会　ニーキュッパで。

高梨　そうなの、ニーキュッパで。電車賃考えただけでも、修禅寺の方までは行けないでしょう。

司会　そりゃ、今電車賃が高いから、そんなに行かれないわよ。

高梨　友達と二人で行ったんですが、「わっ、上等、上等。おにぎり二個でもいいわ」って（笑）。自分がお昼を用意することを考えたら楽ですし、天気もよく梅も見ごろでよかった。

山本　満席でしたか？

高梨　すごいですよ。私、阿佐谷から出たのに乗ったの、二台で。新宿と池袋からも二台ぐらいで出ていて、満席。

安いパックだと、添乗員さんが二台に一人しかつかないんですよ。だから休憩する度に、一号車と二号車を行ったり来たりして。そういうところでコストを削ってる。

山本　そうでしょうね。

高梨　短い行き帰りのパックなのに、ばかにお土産屋さんに連れていかれるんですよ。

司会　ああ、割り戻しをもらうためなのね。

高梨　最後に添乗員さんが、「皆さんお気づきだと思いますが、ばかにお土産屋さんに行くとお思いでしょう。これは裏を話せば、いろいろと事情がございまして」ですって（笑）。

水落時子さん

田中　みんなお土産買ってるの？

高梨　私はほとんど買いませんけど、降りたところで必ず買う人っているんですよ。

菊池　やっぱり、止まれば商売になる。それをトイレ休憩って称してね。

田中　みんな買ったものどうするの？　そんなつまらないものって言っちゃ失礼だけど。

菊池　食べ物ですよ、だいたい。

山本　近所に配るわけ。

司会　食べ物なら誰にあげたっていいじゃない。

菊池　ちょっとした漬物とか、お菓子とか。

水落　いくら安く行っても、ああやって買っていたら、全然安くないよね。

菊池　でも高いので行っても、お土産を買うから、もっと高くなっちゃうわよね（笑）。

司会　この前、沖縄に三万いくらかとかで行けるって言ってなかった？

菊池　行ってきましたよ、去年。

高梨陽子さん

司会　どうだったの、それは。
菊池　すごく安かったと思う。
司会　悪くなかった？
菊池　悪くなかったですよ。食事もちゃんとしてたし。
高梨　食事が全部ついて？
菊池　全部はついてないけど。四万円弱ぐらいで、沖縄ってなかなか行かれないんですよ。
水落　結局値段はね、食事が三度三度ついているかどうか、どれだけ自分が払わなきゃいけないかっていうところも見なければ、一概に安いとは言えないんです。
菊池　いっぱいパンフレット探して、T観光に決めて行った。沖縄は交通機関がないですから、自分たちで行ってもレンタカーを借りないとだめなんですね。それで行きたいところを全部網羅したツアーを選んだんです。
司会　鉄道がないの？
菊池　ないです。バスもそんなにないから、やっぱり運んでくれるものがないと。

違うバスだった！

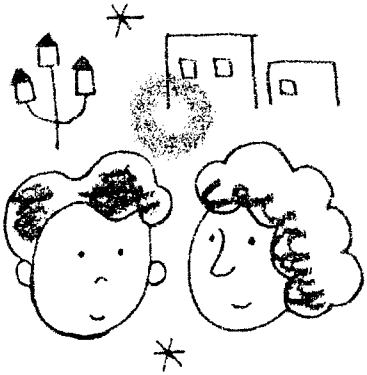
司会　自分の知らないところに行くわけだから、道に迷うってことはありうるよね。
菊池　休憩が短時間だったりすると危ない。バスなんてみんな同じようだしね。
高梨　そう。しっかりと覚えておかないとね。
水落　いちばん怖いのは、自分のバスがどれかわからなくなることよね。
一同　そうそう！
田中　急に思い出したんだけどね、もう何十年も前の話、レニングラードで観光バスに乗った。そしたらどこかで、違うバスに乗っちゃったわけよ。
司会　だれが？
田中　私たちが。夫婦で。
一同　（大笑い）
菊池　いるんだ、そういう人が。
司会　そのバスも観光バスだったの？
田中　そうなの。ルーマニア人の団体のバスだったの。いつの間にか変なやつが乗ってるってわけ。添乗員が来て、人を疑うときの「目の色」ってこういう目なんだって思ったけど、何とも言えない目で見るのよ。私たち、すごい大間違いをしたとそのときは思っていない。呑気よね。そしたら、まあいいことにしようってことになった。向こうも呑気なの。あと、フランス語ができたからよかったのね。
菊池　ルーマニアってフランス語なの？
田中　フランス語。それで、そこにいる人たちと仲良くなっちゃったの。そこから先も、途中で降りて見物したりして、最後にホテルに戻ってきたら、同じホテルの団体だったのよ、我々のグループと。もう皆テーブルでディナーを食べてるわけ。こちらは無事に帰ってルーマニアの団体と食べた。

菊池　探していたでしょう。

田中　それが、全然探された覚えがない。

高梨　あらあ。日本じゃ考えられませんよね。

田中　考えられない。そのツアーのおばさんと仲が良くなってね、二、三年手紙のやり取りしたりしてね。ルーマニアの制度はひどい、私たちは何の楽しみもないから、こうやって方々旅行して歩いてるだけなんだ、とか何とかすごい剣幕で悪口を言ってた。我々みたいな変なやつらが舞い込んできても、みんな呑気な顔をして金を取ろうともしない。もっとも、その二人をつまみ出して、放り出すわけにもいかないでしょうね。



司会　言葉ができたからよかったのよ。

田中　それはそうね。変な出来事だったよね、今思うと。あの時の旅行はものすごい変な弥次喜多やってた。

司会　弥次喜多っていうのは本当に面白い話（東海道中膝栗毛・十返舎一九作）だけど、今でも二人でどこかに行けばああいうことあるでしょうね。

田中　いろいろまちがいがあったりしてね。日本のパックは頭数を数えて、きちんとしてるよね。日本人はそうやって組織的に物事動かすのはとてもうまい。

ちょっとこわーい話

菊池　うちの子供が観光バスの添乗員やっていて、二年目に入りました。

司会　添乗員って、しょっちゅう人の頭数数えてるよね。あれ、一人いなくなったら、大変なことなのよね。

菊池　うちの子が注意するのは、一人参加の人なんですって。二人連れの人は、どっちかが集合時間を覚えていたりして、急がなくっちゃ危ないって注意する。だけど一人の人っていうのは、時計を読み間違えていたりすると、間違いがわからないから。

うちの娘の話の受け売りなんですけどね、秋の紅葉の銀山湖（奥只見湖の別称）ってあるんです。尾瀬の奥の方から入る奥只見っていうところで、紅葉を見に行くツアーに添乗員として行ったんです。

銀山湖に着いて、船に乗るんですって。遊覧船から紅葉を見るので、バスは全員をそこに降ろして、陸路で向こう側に回って待ってるんです。

船に乗るために桟橋に降りていったら、紅葉の葉っぱがいっぱい落ちていたんですって。湖面にも、びっしり葉が落ちていたんでお客さんの一人が湖に落っこっちゃった。それが普通に歩いていくようにして落っこちたっていうのね。踏み外したとか、誰かに押されたとかいうんじゃなくて。歩くように、湖面に入っていった。

ドボドボって入っちゃったけど、泳げる人だったから浮いてきたんで、すぐに引き上げた。全身びしょぬれ。秋ですからね、

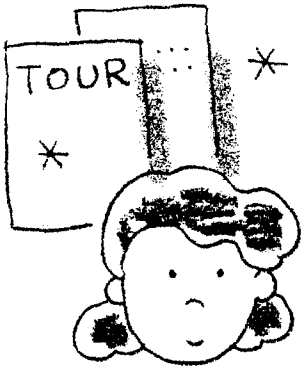
寒い。泊まりがけだったら、着替えを持ってるんだけど、日帰りだから何にも持っていないじゃない？

連れの男性がいたから、二人で事務所に行って、船には乗れませんから、どうぞ先に行ってくださいって言った。みんなは船に乗って、観光に行っちゃった。

落っこちた人は乾かしたかなんかして、車で陸路を送ってもらって、追い付いて観光バスに乗ったらしいのね。紅葉を見るために何時間もかけて新潟まで行って、紅葉は見られなかった。遊覧船には乗れなかったけれども、命は助かったからよかった。

今度は違う人の海外のツアーの話。海外でディナークルーズに乗るときに、やっぱり海に落っこちた人がいた。船にはいろんなツアーの人がいっぱい入るから、知らない人がたくさんいる。「何々さん、いないわね」って言いながら、「じゃあどこそこにいるんじゃない」ってみんなで船を降りてホテルに帰ったけど、部屋に戻って来なかった。それで捜査願いを出して探したらば、落っこちて亡くなっていたわけ。

水落　うわーこわい。



山本　一人では行けないよね、やっぱり。

菊池　仲間がいてもそれだから。

山本　少しは気がついてくれるでしょうけど。

司会　だから添乗員が、頭数ばっかり数えているんだ。当然のことよね。

パック旅行のいいところ　悪いところ

水落　高梨さん、パック旅行を選ぶときに、旅行会社はどういうふうにして選ぶの？

高梨　Kツーリストからパンフレットが来るでしょう。それから新聞にH交通社ってところが出ていて、あとはJ旅行会社。この中で行きたいところがあれば、私が回りたい場所がコースに入っていて、どこから出発するか、私は秋葉原がいちばん便利だから、秋葉原から出ているか、それで料金がいくらで、平日の出があるかとかを見る。

菊池　旅行会社自体はそんなに関係ない？

高梨　関係ないですね。自分の目的に合ったものがあれば行く感じ。

司会　競争があるから、そんなにひどく悪いっていうのはないでしょうね。そうしたら来なくなってしまう。

菊池　口コミの評判で決まるから。

司会　よく募集してるけど、人数が集まらないとだめになっちゃうの？

高梨　ええ。何人から、ってありますから。

司会　すると申し込んでおいても、必ず行けるとは限らないわけなのね。

山本　けっこう流れちゃうことも多いですね。それも直前になってわかるんですよね。

高梨　日帰りバスツアーでもね、私は土日を外して平日を選ぶんですよ。普通、日帰

りバスツアーだと、土日は五百円とか千円プラスなの。別にお金出すこともないし、混むときに行くこともないからと思って、平日に申し込むと、旅行会社によっては「平日のは人数が集まりませんので、土曜日の方をお選びください」とか。そういうふうに持っていくところもありますね。

山本　実際集まらないんでしょうね。

高梨　それだったら別の旅行会社で行ったほうがいいわけ。

山本　やっぱり土曜日って混みますよ。

高梨　土日っていったら、高いうえに、混んで。帰りは新宿が七時半の予定です、っていったって、ひどいときは十時過ぎちゃうこともありますから。

司会　渋滞で遅れるんだ。

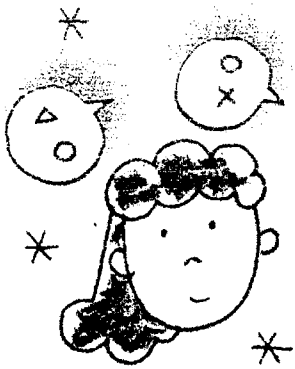
高梨　行くのに一時間、一時間半と遅れてしまいますから。見るところが割愛されちゃったり、お昼の時間帯がずれちゃったり。

司会　バスってつっかえたらおしまいだものね。

高梨　そうなんですよ。ですから私は平日に出るものを選んでますね。

山本　土日でなくても、花の時期とかすごいですよ。途中で「バスが渋滞に入ってしまったので、ここから歩いてください」って。

菊池　パックツアーに行くと、連れがいなくてもすっごいおしゃべりな人がいるのよ。いつも一人で参加して、隣の人抱え込んでずーっとしゃべってるの。「あの時はこういう花が咲いていてね」って。しゃべる種があるわけです。



山本　しゃべる人っていますよね。新幹線の中でもずっとしゃべりどおしっていう二人連れがいます。

水落　どういう人と連れになるかっていうので、楽しさが半減することがありますよね。できるだけ次に座るときは離れたいけど、だいたい一回座ったら、そこに座るのよね。

菊池　決められちゃってるしね。

高梨　パックのときは指定席。乗るときに決まってる。

水落　パック旅行で困るのは、時間に遅れる人がいることですよ。

山本　そうそう。

水落　必ずいるんです。同じ人が毎回遅れるんですよ。みんなに迷惑かけたから早くしようって気がまったくない。次に休憩したら、また遅れる。

高梨　そうなんですよ。

水落　あれはちょっといやよね。

田中　さっき、だいぶ行きたくなってたんだけど、今度行きたくなくなってきた。

一同　(笑)。

菊池　だからパックツアーもいろんな部分があるわよね。

高梨　今回はどうかしらっていう楽しみももちろんありますから。

(え・長谷川てるみ)

小さい兄ちゃんはブラジル人（下）

横浜市緑区　三田サキ（63歳）

昔ブラジルに発つ前、力行会での訓練生活をしていた時の事や航海中の話、ブラジルに着いてからの様子などの話に花が咲いた。今度日本に来る事になったのを妻のコンセイソンに話をしたら、彼女はわーんわーんと大声で泣き出して、どうしようもなかったと言ってしょげていた。

そして兄はあっちこっちの弟妹の家に招かれるままに応じて、忙しく一カ月が過ぎてしまった。いよいよブラジルに帰る日がきた。私達弟妹は揃って成田空港まで見送りに行った。出発の時間がせまった時になって兄は、ふーっと「おお日本が気に入った。また近いうちに来るわ。出稼ぎに来ようかなあ」と一人言のように、つぶやきながら別れたのだった。

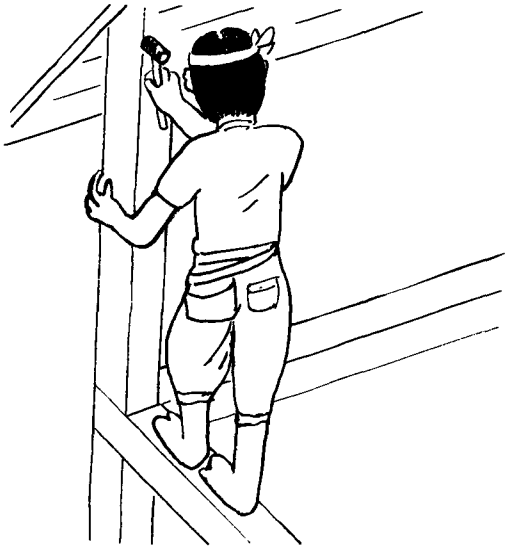
兄、出稼ぎで日本へ来る

一年の月日が過ぎたある日、また突然に通男兄からの電話を受けた。今度こそは「ブラジルから？」と聞くと、「いや今日本に出稼ぎに来て、もう働いているよ」と言うのでまたまたおどろいてしまった。私は思わず「奥さん泣いたでしょうに」と言ってしまった。すると兄は「今はもうブラジルでは何をやっても駄目なんだ」と胸をつまらせた様子だった。

「娘は二人共嫁にやったし、残された家族の二年分の

生活費もきちっと出来るように調えてきたから心配はない」という事だった。

兄は弟の口ききで、ある工務店で大工として働き始めた。今から十二年前のその時はまだ世の中の景気は今程悪くはなく、仕事には恵まれた方だった。兄は友達と三人で連れだって出稼ぎに来たので、三人共同じ職場で働く事になり、三人分の仕事をもらったのだった。



だが、友達二人は仕事についた途端にホームシックにかかり、もう辛抱出来ずにさっさとブラジルに帰ってしまった。一人残された兄はもらった仕事に責任があるので三人分の仕事を一人でこなさなければならなくなった。おかげで早出、残業、休日出勤と大変忙しく働いた。側から見ていて身体をこわさなければ良いがと、心配でたまらなかった。だが本人は気をはっているせいか病気ひとつせず、落ちつくまで無理な仕事をやり通した。

そして兄の技術も認められ、信用されていい仕事を回してくれるようになった。アパートの部屋代は会社持ちだし、ぜいたくさえしなければ毎月六、七十万円のお金をブラジルの奥さんのもとに送金出来るようになったらしい。こうしてビザが切れるまでの二年間みっちり働いて、一度ブラジルに帰った。この二年間働いたお金で、早速マンションを購入したという。

日本では高給がとれるし、ブラジルは物価が安いので、日本ではうそのような話だが、それはうそではなかった。

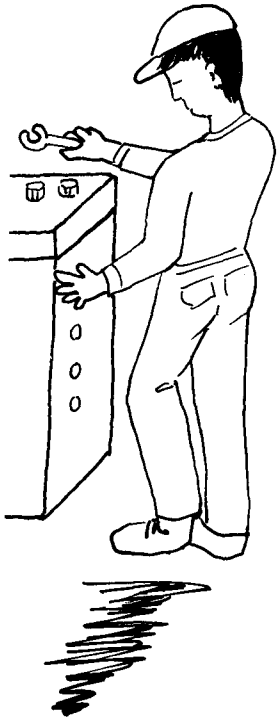
兄の家族も日本へ来る

あまりの稼ぎの良さに、高校を卒業したばかりの末っ子の秀樹が興味をもち「お父さんの国で働いてみ

たい」と言って今度は父親の後を追って日本へやって来た。そして自動車の部品を扱う会社に就職して働き始めた。職場では最初に、むずかしい仕事を与えられてずいぶん苦しんだらしい。

でも月日が経つうちその仕事にもなれ、仕事とは、こんな苦しいものだと納得して働くようになった。そしてまじめに休まず働くので、すっかり会社から当てにされ大事にされるようになり、良い月給取りになった。彼もまた月々相当の金をブラジルに送金することができた。

今度は長男の重男が、弟のあまりにも稼ぎの良いのに魅せられて、つい欲を出し（当時大学を出て銀行に勤めている身分なのに）、それを捨てて弟の後を追って日本で働くと言ってやって来た。だが日本でする仕事とブラジルでやる事とあまりにもちがうから駄目だと言って、何日も経たないうちにさっさとブラジルに帰ってしまった。



それなのにまた何カ月か後に、今度は心を入れ変えて反省したから、もう一度日本で働くと言ってやってきた。弟の働く会社で働く事になった。同じとき、長女の恵子も主婦の身でありながら夫をブラジルにおき、単身で日本に働きにやってきて、いまだに日本で働いている。

兄嫁日本へ観光に

兄の家族四人揃って日本へ来たが、あと次女の春江と妻のコンセイソンと孫の春美の三人だけが日本を知らないでいるので、今度はこの三人も日本へ招こうという相談がまとまった。いよいよその日が来た。四

月、五月の二カ月間の滞在だから、ホテルをとるより、一軒家の方が良いだろうという事になって、秀樹の会社のそばにある一軒家を借りて寝泊まりはそこに決めて、まずは落ちついた。

千葉の義妹がコンセイソンとその娘達を連れて東京見物等をして、色々と面倒見よく楽しませてくれた。そのあと「今度は、どこを見たいか」と聞くと雪を見た事がないから見たいと言いだした。今時分雪が見たいなら……黒部だ、そう黒部に行こうという事になった。

義妹が一人でコンセイソン、春美、恵子、春江の四人を連れての旅だった。何しろ言葉が通じないので義妹は大変な苦労をした。その時すでに日本で働いていた恵子の、おぼつかない通訳で何とか旅が出来たのである。黒部に着いてまず雪が目にはいった瞬間、コンセイソンが思わず「オー雪」と言って、感動のあまりハンドバックを道端に放り出したまま、雪にすいこまれるようにして立ちすくんでしまったという。

義妹が「ハンドバックを放しちゃ駄目よ。持っていかれるよ」と通訳を通して言うと「大丈夫、日本治安いい」と言ってすましている。

言葉の通じない人達が迷子になったら大変だから、必死でこの四人を見守ったのだった。四人にとっては生まれて初めて見る雪だったのでまるで子供のように、飛びあがって喜んでいた。

のんびり屋のブラジル人

通男兄もそうだが、ブラジル人は至ってのんびり屋だから、毎日せかせかして暮らしている私等は付き合っていけぬと思う位腹の立つ事が多い。

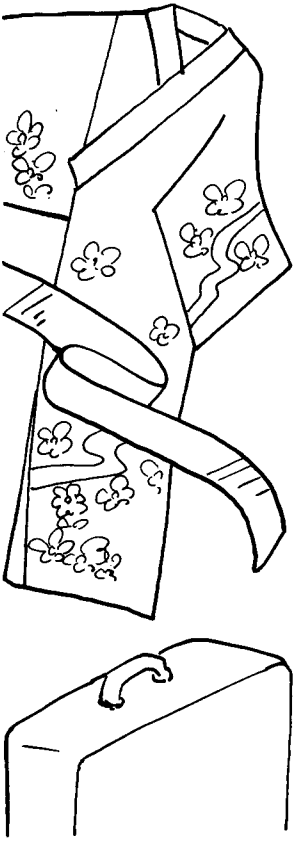
兄がブラジルに渡った当時、ある用事をすませるた

め電車に乗った時の事である。一寸走った電車が止まって仲々動かないので、どうしたのかなあと思っていて、ふと見ると運転士が電車から降りて、喫茶店でコーヒーを飲みながら、のんびりしている姿が目に入った。

兄もその時はまだ新米のブラジル人だったので、こういう様子はめずらしくておどろいたけど、今ではもうすっかりなれっこである。

私達の家に招いた時など約束時間に三時間も遅れてきてすました顔である。全く日本では考えられない位の感覚である。

兄がある時、秀樹を連れて九州の実家に行った時の事である。新幹線の東京発の時刻と小倉着の時刻表をよく見て確かめたところ、全く予定通りに着いたので、秀樹はこれにものすごく感動して「オー定刻通りに着いた。一分もちがわない。ぴったりなんだよ」と大声で叫びまわったのである。



兄の家族ブラジルへ帰る

こうして兄の家族は日本見物の旅を終え、ブラジルに帰る事になった。色んなおみやげを買い揃えた。コンセイソンはゆかたが大変気に入ったらしく、義妹に仕立ててもらっておみやげに持って帰った。

兄は家族を成田空港まで送り届けたあと、また毎日毎日仕事に専念した。

その日から三年位経ったある日、身内の結婚式で兄弟姉妹が集まる事になった。その披露宴も終り雑談が始まった頃、通男兄のそばに座っていた私が兄に話しかけた。

「小さい兄ちゃんまだ日本で働くの？　もう稼ぎまくったのではないの。一間のせまいアパートで一人淋しく不自由な生活をするより、もうブラジルに帰って奥さんの手料理で毎日晩酌を楽しみながら暮らした方がいいんじゃない？　私も小さい兄ちゃんも、もう老い先短いんだから、もう働かなくてもいいんじゃない？」と言って、なまいきかなあと思ったが兄に説教してしまった。

兄仕事を終えてブラジルに帰る

そんな事があって二カ月位経ったある日、突然通男兄から電話があった。「五月の初めにブラジルに帰る事になった。日本ではもう仕事はしないが、来年の親の法事にはワイフと二人で九州に行くよ」という事だった。

そして息子達も連れて帰る事になった。息子の秀樹は自分でためたお金で自分の好きな自動車の関係の学校に行く事になったという事だった。

私は「ああ良かったね。それが一番いいよ」と言って喜んだ。兄が出稼ぎで日本へ来てから十二年間働いて（途中で何度か帰る事はあったが）めでたくブラジルに帰る事になった。そして日本を発つ前日、弟妹揃って千葉で盛大な送別会を開いた。その翌日、皆で成田空港へ見送りに行った。

昔兄が初めてブラジルに渡る時のあの家族の大きな悲しみは、まるでうそのようである。海を渡ったら最後、もう一生会えないのではないかと心配したのは昔の事となった。

四十一年過ぎた今では、飛行機で二十四時間で来られる世の中である。親の法事位で一寸日本へ行ってくるよという気軽さである。

小さい兄ちゃんも今ではすっかりブラジル人になりきって、のんびり屋となってしまった。（終）

（え・奥島千恵子）

私の意見・あなたの意見

子どもの臓器移植について

「賛同」だけがいい人？

愛知県春日井市　河野弓子（35歳）

子どもに関しては、臓器を取り出すことも、受け取る事も親が決定しなければなりません。

少し前、私が住んでいる町で二歳になる女の子の臓器移植に対する募金活動を通し、友人達と話し合う機会を持ちました。

その活動に賛同するのが当たり前だと感じていた私は、何の疑いもなく協力する事を承諾したのですが、友人から「私はその活動には参加しない」という意見を聞き、「なんて冷たい人なんだろう」と感じるのと同時に、どうしてそういう考えになったのか聞きたいとも思いました。

彼女の意見はこうでした。

「移植をしないと生きられないという病気ならば、その余命をいかに有意義に過ごすかを考えたほうがいい。まして、募金をしないと出せないような多額のお金を他人様に出してもらい、移植が成功しても一生薬漬けかもしれない。この先本当に幸せが待っているという保障もない。親として生きて欲しいという希望はわかるが、子どもにとって生かされるのは本当に幸せなんだろうか？　だから私は募金活動の手伝いはしない」というものでした。

私も彼女も子どもを持っている母親です。私は自分の子どもにあてはめて考えた時、なんとしても助けてやりたいと思うのが当たり前だと感じていましたが、確かに彼女の意見も一理あると……。

改めて、臓器移植を考えさせられるいい機会となりました。

お店に募金箱をお願いする場合、ある店ではイメージアップのために置いてあるという話を聞きましたが、臓器移植に賛同する人イコールいい人になっているだけでは、いけないと思うようになりました。

しかし、考えていくうちに、判断材料が少ないと思ったのです。

成功の確率。成功した場合のその後の状態。薬の事。ほんとうに欲しい情報が得られていない事に気付きました。

そして、それらを考え合わせた上で、各個人が考えた事を尊重できる環境になるのがベストだと思います。

脳死とは？

東京都練馬区　井上暁子

日本で初めて臓器移植手術が行なわれたとき、当時小学校一年だった娘が、どうして今日はずっと病院のニュースをやってるの？ときくので、私なりに脳死の説明をした。

事故などで脳が壊れてしまって、もう治せない。まだ心臓は動いているけれど、何時間か何日かすると心臓も止まってしまう。脳が先に死んでしまってまだ心臓は動いているけれど、もうけっして治すことはできないので、その人はすでに死んだと認めて、その人の身体から、まだ元気な心臓や胃ぶくろ（他の臓器のことを娘にわかりやすくこう伝えた）を取り出して、心臓や胃ぶくろだけが病気で、それを取り替えれば元気になれる人のと取り替えっこする手術が、今、日本で初めて行なわれているの、と話した。

娘は、えーっ、そんなことしていいの、と大変驚いていた。私は、「もしも梢子（娘）が、頭だけトラックにぶつかっちゃって、先生に、もう助かりませんて言われたら、元気な梢子の心臓や胃ぶくろが誰かの身体の中で生き続けてくれたら、梢子の命もずっと続いていくって思えて、お母さんもそうするかもしれない。でも、天国に行ったとき、心臓や胃ぶくろのない身体ではかわいそうだし、いくら助からないとわかっていても、心臓が動いている間は、もしかしたら奇跡が、って思って、梢子が死んだとはとても認められないかもしれない。その時になってみないと、自分がどんなふうに考えるか、とても想像できないよね。でもとにかく、そんなことにならないよう、トラックに頭ぶつけないでね」と言った。

柳田邦男氏も著書『犠牲　わが息子・脳死の11日』に、日々変わっていく気持ちを綴っている。脳死・臓器移植については、その事態に直面した人が、それぞれに答えを出していく問題だと思う。

親にそこまでの決定権があるのか、との問いかけとは多少ずれてしまったが、以上が私の意見である。

（え・弘法堂蓮二）

子育てフォーラム

NMSのページ

自然に学ぶ

千葉市若葉区　小山佳世子

小学校二年になった長女は時々私に「お母さんは大きくなったら何になりたい？」と聞いてきます。私は心の中でもう大人なんだよと笑ってしまいます。四歳の次女も真似をして「お菓子やさん？　お花が好きだからお花やさんだ」などと言っています。

二人の娘たちは大きくなったらどんなふうになるのか？　二十歳（はたち）の姿は思い浮かばないし少し怖い気もします。「お母さんは怒ってばかり、怖いもん」と憎たらしい口を聞く長女に、本当にそうだよねと心で泣いています。果たして私の育て方で真っすぐに個性を伸ばしてくれるか？　芽を摘んでしまってないか？　時々不安になります。

娘たちは広い自然の中で毎日友だちとけんかをしながらも楽しく遊び、大きくたくましくなりました。入学した頃はランドセルばかり目立ち、子どもの足で四十分の通学はかわいそうに思いました。十人の登校班の中で一年生たちは真っすぐ歩かず、草花を摘んだり四つ葉のクローバーを探したりで、お兄さんたちが一緒に行くのを嫌がった時もありました。暑い夏も寒い冬もがんばって歩きました。三学期を迎える頃はランドセル姿も頼もしくなり、走って帰ってくることもありました。私の心配とは反対に、嫌がることなく元気に楽しく大きくなりました。

一年の移り変わりを体で感じ、花を摘んだり虫を見つけたり、たくさん自然に触れて心を豊かにしたようです。友だちとけんかをしても自分であやまりにいったり手紙を書いたり、自分で考えて行動することが少しずつできるようになりました。虫や動物に触れることで小さな命を大切にすることを覚えました。地域の祭や学校でのおじいさんおばあさんとあそぼう集会に参加して、日本人としての心を知りました。私がひとつひとつ教えるよりも自

然の中で生活することでたくさんの経験をして学んだと思います。

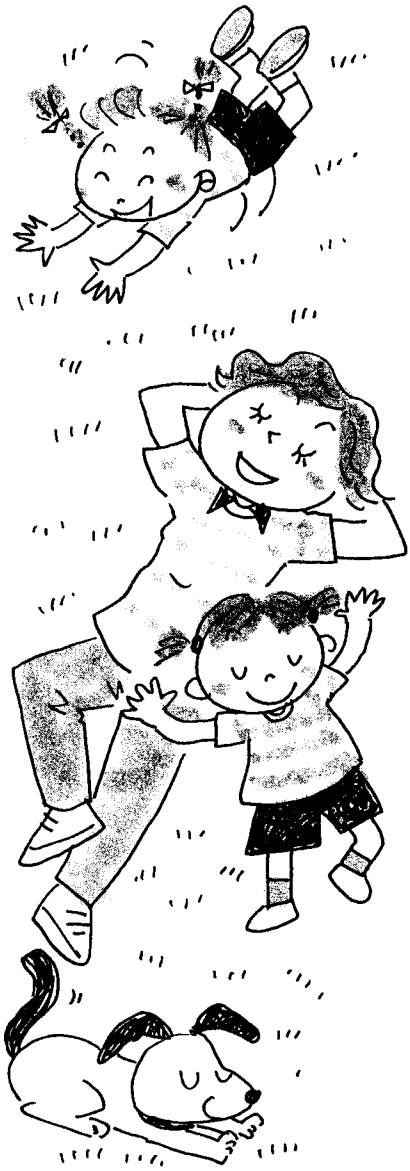
私が参加した家庭教育学級では、「子どもの教育と人格形成における最終責任は家庭である」と言っています。そのために賢い親であり、我が娘たちにとって良い母親でありたいと思いました。子どもを一人の人格として見ること、どの子も素晴らしいものをきっと持っていると信じて見守ってあげることの大切さを、改めて家庭教育学級で教わりました。子どもがもらってくる成績はその時の結果であり、通過点であるのみで全てではありません。これからも娘たちのそのままの姿を受け止め、踏まれてもまた花を咲かせるたんぽぽのように育てたいと思います。

四月に主人の転勤のため、娘たちは大好きな自然とさよならをしました。友だちと別れ涙を見せましたが、新しい生活も娘たちなりに楽しんでいるようです。順応性にすぐれ、一日一日と成長していく娘たちがとてもうらやましいです。

これからも主人の転勤について、三年か四年ごとに引越しをし、新しいところでまた生活していくことを思うと暗くなります。せっかくできてきた私の生活設計もまたやり直しなんだ……。観光気分でいろんなところに行け

ていいではないかという主人に、そんな簡単なものではないと文句を言っています。

私のやりたいことは何なのか、何をすればいいのか、先が見えず不安です。それでも娘たちに「お母さんは○○をしたいんだよ」と答えたいと思っています。私も二人の娘たちのように輝いていたいから、二人の笑顔が私に元気を与えてくれます。自然の中での生活は私たちの大切な宝ものです。あの時の気持ちを忘れずにいたいと思います。



授かりものではなく

東京都世田谷区　水沢瑞穂

もうすぐ二歳になる息子を昼寝させると十五分ぐらいで目を覚ますので、しっかりお昼寝するのよと、背中をトントン、手をよしよし。そうしているうち、もうかわいくてかわいくてたまらなくなって、いつものように、どうして神様は私にこんないい子をくれたんだろう？なんて思ってうっとりしてたら、今日は、ああ、違うんだって、急に、そしてはっきり思った。

くれたんではなくて、ちょっと貸してくれてるだけなんだって。

子どもは授かりものだというけれど、預かりものなのだと。

子どもが大きくなって、一人で人生を歩いていけるようになるまでの、大切な預かりものなのだと。

喜びや楽しみをたくさん味わわせてくれて、私に強い心を育ててくれる子どもという存在。預かりものだと思うといろんな複雑な思いも一挙に解決する。

幼い子を育てるのは大変だ。それはもう毎日身につまされて感じている。しかし、障害すれすれの個性（個性すれすれの障害？）を持つ上の子を育てるのはそれとは比較にならないほどの大変さだ。

普通の子を育てるって、こんなに楽なことだったの？　日々下の子と向き合っての実感だ。よく、二人目は楽、なんて言うけど、そういうのとはレベルが違う。障害を持つ子（生きて行くために、内にも周囲にもたくさんの困難が存在する子）を育てるというのは、まあ障害の種類や程度によっても違うだろうけど、うちのような場合は、もう苦行と言っていい（苦行の内容はあまりに多いので、また別の機会に）。だから、下の子が普通に育っていくということは、それ自体が、大変な喜びであるのは言うまでもないが、上の子の育て方が悪い、とか、私が無能な母親だとか、世間が勝手に貼ったレッテルをペリペリはがしていく心地よい作業でもある。それで私の心は辛うじてバランスを保てるようになるのだが、逆にそれは、やっぱり上の子はノーマルではなかったのだという事実を、日々確認させられていく辛い旅でもある。

だから、なぜ私がこんな思いをしなくちゃいけないの？　なんて世の中不公平なの、なんて常々思っているわけだけど、でも上の子は大変な思いをした分だけ、ながーく貸してもらえるんだ。神様は私を見込んで預からせてくれるんだ。だから大事に育てよう。私が老いぼれるまでに一人前にすればいいんだから。だから大事に育てよう。

先ずは、上の子が神様からもらいそびれた能力ゆえの犯罪を犯さないよう、あわよくば、神様からもらいすぎた能力を存分に生かして、エジソンやアインシュタインのような偉大な科学者に、あるいは、モーツアルトやダ・ヴィンチのような芸術家に、まあ、現実的には自分の口を糊するだけの仕事に就いて、休みの日を楽しめるような趣味をもったおじさんになるように、あせらず、ゆっくり、大事に、神様の子を育てよう。

幼稚園の父母会役員って……

横浜市磯子区　十文字圭子（37歳）

息子の通う幼稚園は、シュタイナー教育を基本理念に、子ども主体の保育を行っているとても良い園だ。一クラスの人数も、年長でも二十人ちょっと少人数で、本当に個性を大切にしてくれる。押しつけということをしないので、運動会などではどうしても走り

たくない子どもと先生が一緒にリレーに出たりして、微笑ましい。

悪いことをすればもちろん、注意はされるが、大声で叱責するのは「命に危険があるような時だけ」というように、園の中で先生方のどなりちらすような声は、ついぞ聞いたこともない。それでも、子どもたちは数カ月もすれば、朝のお祈りも蠟燭を使って静かに出来るようになる（年少児もだ）。そんなところが気に入って、今年で通算五年、子どもを通わせているのだが、問題は役員の負担が半端ではないということだ。

クラス役員というのが二名、バザー委員と図書委員が同じく二名ずつ。これだけで六名。その他にもやれ、プールの付添い・運動会・遠足・芋掘り等々、行事毎のお手伝いがとても多い。それはある程度幼稚園という性質上仕方がないとしても、下に乳幼児を抱える人はなかなか難しいので、自動的にいつも同じメンバー内で、ぐるぐる回ることになる。

私も上の娘の時は免除されてきたので、息子の時はある程度、覚悟していた。案の定、去年は五、六人で、年間の係を数回こなした。それでも、この程度ならまあ、楽しみ半分で出来る。ところが、近所の人がひょんなことからこの父母会の会長を引き受けることになった。

クラス役員が全体で集まり、その中から会長以下執行部が選出される。ヒラでも十分に大変なのに、これになるとそれこそ、園に日参しなければならないらしい。全体の定例会というのが月に一回、他に執行部だけの集まり、三役（会長と副二名）会、園長との打合せ等、何やら幼稚園にご出勤？というありさまになってくる。

予算編成から始まって、父母会主催の年間行事の設定、各懇親会への顔出しで、それこそほとんど毎日のように出掛けるうちに、みるみる彼女は痩せていき、六月頃には五キロ減。ダイエットもちょっと、過激過ぎるんじゃないの！という周囲の声を聞く間もな

く、ほっとしたのが夏休みだった。

たまたま、スイミング・クラブの夏期講習で一緒になり、話を聞くと子どものために引き受けたのに、当のその子が近頃おかしいという。何度も手を洗ったり、しつこく自分が汚れていないか、聞いたりするらしい。ひとりっ子でお母さんは専業主婦、どちらかというとべったりと子どもに付き合っていた母親が、急に忙しくなり情緒不安定になっているとしか考えようがない。これでは本末転倒である。

そうこうするうちに二学期になり、行事は目白押し、彼女の日参は再び始まった。免許を持っていない彼女は、自転車と電車を乗り継いで園まで行く。帰りも子ども連れで、通園バスでは十五分のところを、四十分以上かけて帰る。その間にも、習い事の付添いなどもして、いつぞやは夜の八時過ぎに親子で歩いているのを見たと夫が言っていた。

いつ家の前を通っても、ほとんど平日は洗濯物を見かけない。つまり、子

ども をバスで送りだしてすぐ、自分も出掛けているということだ。家のことをやっている暇もないらしい。何なんだろう、そうやってまで役員というのはすることなんだろうか。人ごとながら、だんだん疑問符が頭の中に一杯になってきた。

年が明け、慌ただしく三学期が済むと、やっと久しぶりにゆっくり彼女とお茶を飲む時間が出来た。温和でどちらかというと長と名の付く役には向かない彼女の性格と、たまたま執行部のメンバーの顔ぶれにまとまりが無かったという事情もあったようだが、彼女の口からは堰を切ったように、幼稚園に対する疑問の言葉が出てきた。

私立の幼稚園と父母会という立場関係が上下なのであれば、かえって問題もない。時には上下であったり並立であったりすることが、とてもやりにくく、まして完全なボランティアである。どこまで他のお母さん方に負担を強いたらいいのか、それも頭痛の種であったらしい。園長との個人的な関係もあったらしく、詳しくは計り知れないこともあるが、そんなこんなを聞いたあと、彼女の口から最後に出てきたのは、「役員をやらない方が、園を好きでいられたかもしれない」という一言だった。

息子が年中になっての初めての懇談会は、幸か不幸か娘の学校のそれと、時間から日にちまで同じだったので欠席となり、従って役員も引き受けなかった。来年はとうとう、幼稚園も最後の年となる。来春が恐ろしい。

二番目の子どもがやってきた ⑦

横浜市戸塚区　杉田みほ

藍は一歳二カ月、ひなまつりの晩を最後に、おっぱいにさよならしました。

誕生日を過ぎてから、ずっと迷っていました。淋しかったのは私です。

「離乳食の用意が間に合わない」とか、「食べさせてる暇がない」とか言っては、「いいや、まだ『ならし』だもの、赤ちゃんせんべいで」「トマトジュースでもあげとくか」「噛んでからあげればいいか。後はおっぱいでお腹いっぱいにしてもらおう」。そんな具合で、離乳の進め方は遅々としたものでした。

八カ月の末に、ようやく一日二回食べる日が続くように。その頃には、かなりの量を食べるようになっていたの

で、食事前後の授乳をやめることにしました。乳腺が詰まったり藍が熱を出したりで、何度も飲ませた日もあるけれど、九カ月の終わりには落ち着いて、離乳食二回・おっぱい三回から離乳食三回・おっぱい二回（朝晩）へ。そのうちに、朝起きても泣くわけではなく、朝食まで待てることがわかり、起床後の授乳もやめました。

間食を与えないせいか、三食とも実によく食べます。藍は小柄なのに食欲は野歩（のぼ）（二歳）といい勝負で、二人とも少食の大人並み。ボーッとしてると、私の分がなくなります。

三食プラスお風呂上がりのおっぱい、という日々が長く続いていました。ほかの時は全然おっぱいを欲しがらないのに、お風呂の後だけは毎晩あせって求めてきます。「これじゃあ、当分やめられそうにないなあ。でもまあ、一人で寝ついてくれるし、何かとよく我慢してくれるし、一日一回くらいならいいか」

と、ある日思い当たったのです。「もしかして、お風呂上がりだから喉が渇いてるだけじゃない？」

そういえば、野歩に最後のおっぱいをあげたのは、一歳の誕生日を過ぎて少し、実家に泊まりに行った晩でした。野歩は一口飲んだだけでいじって遊び始めたので、「じゃあ、もうおっぱいはバイバイしようか」。それきり欲しがることもなく、あっさりしたものでした。

たしかあの時、私より先にお風呂から上がった野歩は、母に野菜ジュースを飲ませてもらっていたのではなかったっけ？

そう考えると、藍がおっぱいにさよならするのも難しくはなさそうです。

「いつまで飲ませようかな。なんだか、まだまだ飲ませていたいよなあ」

授乳している限り、まる一日離れ離れになることのないこの子と私。たまには離れたい気持ちと、必要とされていたい気持ちの間で揺れます。

無事に誕生日を過ぎたので、夫と野歩がいなかった晩、試してみました。お風呂から出たら、おっぱいを欲しがる前に人参ジュースを飲ませ、そのまま授乳しないでベッドへ。藍はいつもと変わらず、静かに眠りにつきました。

あんまり簡単だったので、本音は「私が淋しい」だったのだと、はっきりわかりました。

次の日からはまた、お風呂上がりのおっぱい。でも、「あんまり大きくなってからだと、子どものほうの執着が強くなりそうだな。一歳二カ月を過ぎると、自分の力を試そうと手こずらせることが多くなるみたいだから、その頃までがやめどきだろうな」

今週いっぱい、明日まで……と迷っていましたが、一歳二カ月になってしまったので、野歩に宣言しました。

「おひなまつりの日で、藍ちゃんはおっぱいバイバイするよ。もう、少し大きくなって、歩けるようになったからね」

さりげなく言ったつもりでしたが、翌日野歩に「藍ちゃん、大きくなったからおっぱいバイバイするんだよ」と

言われては、あとに引けません。

決意を固めて、最後の二日間のおっぱいタイムを楽しみました。

それから一カ月、お風呂上がりに必ずしも何か飲ませなくても寝るようになり、パパと二人、ママ抜きで泊まりに出かけてみました。いつも私に抱っこをせがんでばかりの藍ですが、離れているときは全然平気。一度も泣かずに一晩過ごしたそうです。

初めての子どもの時は、それこそ「這えば立て、立てば歩めの親心」

毎日毎日、新しくできるようになったことを見つけては喜び、母子手帳を見て「野歩はまだできないけど」と気をもみ、離乳も早すぎず遅すぎずでほっとしたものでした。

それに比べ、どうでしょう。あわただしくしているうちに藍はどんどん成長してしまい、「待って、待って！」という感じ。もうちょっとゆっくり赤ちゃん時代を楽しみたいのに、「もう這った、もう歩いた」、そして「もう、おっぱいいらないの……？」

親って、勝手なものです、本当に。

（え・小沢恵子）

沖縄家庭料理入門

おいしさの秘密は「ティーアンラ」

渡慶次富子（とけし）
吉本ナナ子　著

渡慶次富子
吉本ナナ子　著
農山漁村文化協会
定価1750円

東京都八王子市　**和田好子**

日本一の長寿県、沖縄の食生活に関心が寄せられている。健康志向の風潮が強くなって、飽食への反省から素朴でヘルシーな沖縄料理が注目されているのだ。

実際のところ、沖縄の長寿者たち（八、九十歳の）が戦前に食べていた食事は、今とは相当違うという。

昔の沖縄ではサツマイモが主食で、米や豚肉は特別な日のごちそうであった。戦後アメリカに占領されていたためと、しだいに食糧が豊富になったことで、豚肉も米も日常食べるものとなり、ビーフステーキは流行するし、マヨネーズやウスターソースなどが常用されている。

これでは長寿県の名誉もやがては返上になる、と警告されているそうだ。そこで本書のように、伝統家庭料理を見直す本も現れる道理。

もっともこれは入門編とあって、本土向けの編集には違いないが、沖縄の若い人にも役立つだろう。アメリカナイズされた食生活、上手にとり入れた洋風料理や食材の話も出てきて、それを全否定するのではなく、伝統料理と混ぜて食べることがすすめられている。こうした混ぜこぜ精神は沖縄の本質といってもよく、チャンプルーという混ぜ炒め料理に現れているという。

このチャンプルーはもっとも一般的な家庭料理で、基本は野菜と豆腐をチャッと炒めたもの。そこへゆでて薄切りした豚肉、アメリカに教わったランチョンミートの缶詰などが加わり、とにかく何でも一緒に炒めて食べる。

チャンプルーのみならず、本書で扱われている伝統料理は、本土に比べ一手間二手間はぶかれていて、手早くできるものばかり。これは沖縄女性が、昔から共働きを続けてきたためだそうだ。現在でもそれは変らず、外食や既製のおかずが盛んに利用され、しかもそれが全て、家庭料理と変らぬメニューなのが興味深い。

一読作ってみたくなるレシピ揃い。

あなたへスマッシュ

「熱性けいれん」私の場合

神奈川県中郡　石井しのぶ（41歳）

二八二号の「発熱―熱性けいれんのあとに―」を似たような経験がある私は、かつての恐怖をよみがえらせながら何度も読んでしまった。

私の息子は九年前の十一月の土曜の午後、ちょうど二歳半の時熱性けいれんを起こした。はじめてのことだったので、あわてて救急車を呼び病院に行ったが、そこの看護婦さんは「たかが熱性けいれん」という冷たい態度で、カゼ薬をもらっただけで帰されてしまった。この時けいれん止めの薬があることは教えてもらえなかった。翌日の日曜も四十度を超える熱が続くので、心配で別の休日診療所にかかったが、その帰り、二度目のけいれんを起こしてしまった。そこで急きょ紹介された病院に入院することになった。夜になってベッドに横になりながら私にむかっておしゃべりしている途中、突然三度目のけいれんを起こした。目の前の息子の変化に気が動転し、頭がおかしくなりそうなほどこわくて震えていた。結局三日間入院し、四日目に熱は下がったが、その間、また起こすのではないかと思うとずっと眠れず、薬の時間ばかり気にしていた。

そして西尾さんと同様、私もそれからが自分自身の恐怖心とのたたかいだった。熱を出すことが何よりこわくて外出もひかえ、いつも息子のおでこに手を当てていた。夫も実家の母もそんな私を異常だと言ったが、あの恐怖を味わった者でなけれ

ばこの気持ちはわからないだろう。正直なところ、十一歳になった今でも熱を出すと非常にこわい。何年たっても記憶は生々しくて、簡単には消えてくれない。たぶん西尾さんも、この先何年かは不安感に悩まされてしまうのではないだろうかと心配になる。私はその後自律神経が乱れて、激しい動悸がたびたび起きるようになってしまった。お医者さんや看護婦さんは、こんな母親たちの気持ちを考えて「たかが熱」と思っても、対処のしかたや薬の説明など、めんどくさがらず親身になってアドバイスしてほしいものだと、今でも思っている。

S子ちゃんとお母さんへ

東京都世田谷区　後藤　晶（41歳）

二八三号の『「いや」と言えない子供』を読みました。子供の成長過程で出会う大事な出来事のひとつだと思いました。お子さんはよくお母さんの気持ちを理解しているようだし、相手の方も常識的な方なので、私はちょっと安心しますが、当事者としてはご心配なことでしょう。

良識とか価値観は、家庭によってずいぶん違うものだと、わが家の子供たちの友達づきあいからも感じます。小学生になり子供どうしで遊ぶようになると、親にもさまざまな発見があります。TVゲームや文房具、おやつのたぐいに至るまで、うちとは全然違うお金の使い方をする家（つまり気前がよい）、かなり遠くの友達の家でも、低学年から一人で自転車で平気で行き来する子などに、びっくりすることがありました。

うちでは息子と娘が、時々友達にバトル鉛筆（キャラクターが描かれた遊べる鉛筆）やアイドルグッズをもらってくることがありました。「いらないって言ってるのに、友達もいらないからと言ってくれた」とか、「自分のと交換した」などで、私も「これくらいはいいかな」と思えるときもあります。しかし、物によっては相手の親に確認したり、返しに行かせたりしたことがありました。

子供が選ぶ友人の好みが、親にはわからないときもあります。十歳の娘が先日急に家庭で、自分の仲良しの子について激しい言葉で悪口を言い始めたので、驚きながらも私は、そんなこと言うもんじゃありません、とも言わずに聞いていました。今までそんなことは言わなかったのに、数日間つぎつぎと友達の悪口を聞かせるので思わず、「そんなにいやなら遊ばなきゃいいのに、そういう勇気がないの」と私が言うと、娘はぽろぽろと涙をこぼしました。その様子はつらくてくやしそうで、私は、幼稚だった娘がひとつ階段をのぼろうとしている、ちょっと複雑な少女の心理の世界に入ろうとしてい

るんだな、と思いました。
その後、悪口は減り、友達とも変わらぬ付き合いです。それまでは友達のすべてが大好きだったのに、はじめて人には長短両面があることに気づいて、娘自身が戸惑っていたのかもしれません。
S子ちゃんもいろんな経験をして少女になっていくのが楽しみですね。

「いやと言えない子供」はなぜ育つ？

東京都新宿区　野本美希子

二八三号の表記のご投稿を読んで、ふと思いました。
よく「素直な子」「いい子」が思春期になって不登校になることがあるぞ、だから「おどける子」「ふざける子」がいいんだ、なんて言ってる「先生」の論を読んでは反発を感じていたのですが、この投稿を読んで、もしかするとホントかも、なんて思ったのです。
失礼なこと言ってごめんなさいね。
もしかするとこのお子さんは、いつもお母さんのいいつけを黙ってき

く「いい子」ではないのでしょうか。そしていつの間にかそれは、お友達の言うことにも反対できない性質にもなってしまったのではないでしょうか。

大切なものを友達にあげてしまったとしても、それはその子が責任をとるべきことで、子供に任しておいてもいいのでは、という気がします。そんな体験を重ねることのなかから子どもは成長していくような気がするのですが、みなさんどうお考えでしょうね。

二八三号「要約筆記」入門を読んで

神奈川県座間市　青島典子（44歳）

「要約筆記」入門は、十年以上前に要約筆記付の講演を聴いた時のことを思い出して、実に面白かったです。今思えば飯島さんのような駆け出しの人が書いていたようで、話すスピードに書くスピードが追いつかず、尻切れトンボが何度か続きました。それを見かねた先輩らしき人が助太刀に登場して、末尾を書き加えだしたので整った文になり、筆記のまずさにプッと吹き出す楽しみがなくなりました。

この作業は学生の時サボッた講義のノートを、人から借りた時を思い出させます。ノートに後から思い出しながら書き込む人はまれで、ハッキリ言って書きっ放しで乱字の上、意味不明の文を書いている人が多いのです。自分で読んでわかればいいのであって、サボッた人に貸す為ではないのですから当然か。

生まれつきの聾の人は読唇術も手話もマスターしている人が多いそうですが、中途聾の人はその時から勉強しなければならずなかなか大変で、この要約筆記サービスは大変有難いと、その講演の後で感謝の言葉を述べている若いお母さんもいました。

手話教室や点字教室は女性の参加者で満員状態ですが、その仕事の需要と供給はすでに飽和状態とも耳にすることがあります。聾者が就職の面接や契約等で手話通訳者が必要な時、派遣するサービスは多くの自治体がすでに始めているようです（私の市にもあります）。だけど中途障害者についてはあまりにケースバイケースで、要約筆記が広く知られない理由でもあるでしょう。

女性は出産の時の事故で聾になる人が意外とあって、新聞の投書で二件その事例を知った後、子供が幼稚園に上がると現実にそういうお母さんが一人いました。

市議会の教育福祉常任委員会を傍聴に行った時のこと、話題になっているサイダンという言葉がわからず、何だろう何だろうと不安でした。

祭壇の貸し出しサービスが話題になっていると教えてくれる人はいなかったのです。祭壇と分かるまでの苦しかったこと。

隣に座っていた議員さん（他の委員会から傍聴に来た）は、議題等の資料を入手していたけれど、一般傍聴者へのサービスは何もありません。

ましてや難聴者の場合、文字によるサービスは絶対必要だと思います。

講演でも珍しい言葉は聴いてもよくわからず、書いてもらってやっとわかるということはあります。私の友人は東急ハンズのオープンの時、ハンズ、ハンズと耳にするので英語の辞書を引いたもののそれらしい単語に当たらず、わかってみれば何だ、ハンドの複数形だったのねと苦笑まじり。私は環境問題で化学物質の話をナノグラム単位で言われるとお手上げで、算数嫌いだったからなあとタメ息が出ます。

話し声が大きくできる電話のハンドレスの技術は、難聴の人の為に考え出されたそうですが、私の住むこの地は米軍の飛行訓練のコースに当たり、軍用機の飛行中はテレビも電話もお手上げ。電話の音量を上げることは商売をしている人には有難い技術でもあるようです。

障害者との共生と言われても、ただ一歩譲ることだと驕っている日常、健常者にも障害者にも、共通して便利な技術はもっとあるはず、要約筆記を含めてそうしたものの普及が望まれます。

「要約筆記」入門 II

神奈川県平塚市　飯島まゆみ（44歳）

「要約筆記」入門講座の後半では、オーバー＝ヘッド＝プロジェクター

（ＯＨＰ）を使う協同作業（チームワーク）の実習と、要約筆記の基本である「ノートテイク」（紙に書く）を練習した。

①チームワーク

講演会の要約筆記者はおおむね四人だが、講演会の規模や要約筆記者側の都合などによっては、人数に若干の変更はあるようだ。

ＯＨＰのライトは非常に強いので、筆記者たちは眼を保護するために、必ずサングラスを着けることにしている。

まずＯＨＰを使ってフィルムシートに要約筆記する主筆者を、「Ａさん」と呼ぶ。Ａさんは背後の画面にできるだけ目障りな影を作らないように、ペン先の角度などにも注意する（筆記中にシートが横にズレないようにと、左手をシートの中ほどに置くのは厳禁だ）。

ところで、左利きの筆記者はどうするのだろう。私が講師に質問したところ、

「ほかの作業はともかく、左手で書くＡさんはまだ見たことがない」

とのこと。受講生同士のヒソヒソ話から出した推論では、「原則として横書きの要約筆記を左手ですると、すでに書き終えた左側の文字の上に左手の影を落とし、画面の文章が読みづらくなるからだろう」と相なった。

（ちなみに、主筆役を二人で務める「二人書き」もある。この場合、まず左側のＡさんが一行の左半分まで書き、続けてもう一人が右半分を書く）

次に主筆者の右隣りの補助者が「Ｂさん」。Ｂさんは主筆者の先導者、水先案内役として、話の流れを正確に聞き定めながら、要点を簡潔にメモする。また主筆者の誤字脱字を、すぐその場でシートの上で訂正する。

「Ｃさん」は主筆者と対面の席から、画面の観衆を代表する者として、画面をチェックする。そして主筆者が書きやすいように、フィルムシートのロールを手前に引く。またＣさんも誤字脱字を画面から見つけた時は、シートの上に上下反対の文字を書く要領で訂正する。

主筆者の右斜め前は「Ｄさん」。Ｄさんはタイムキーパーを務める。熟練の筆記者でも、ＯＨＰを使って主筆を務める集中力は一コマ十五分程度だそうで、Ｄさんは「交替です」と書いた紙を他の三人に示し、席（役割）の交替を促す（区切りのよいところで、時計回りにそっと席を移る）。またＤさんは辞書で漢字を確かめたり、話の中から頻度の高い語句を拾い上げて「カットシート」を作ったりもする。たとえば講演のテーマが教育問題なら「虐待」とか、映画の話ならば「撮影」などのカットシートを作ると、Ａさんが手書きする手間が省ける。

以上が「チームワーク」の概略だが、補助者の心得は一にも二にも「主筆者の進行状況に合わせて」である。でも受講生たちで実際にやっ

てみると、各自マイペースな個別作業になってしまった。

要点のメモをとるのに夢中で、そのメモが左隣りのAさんから見えにくかったり、誤字を訂正してあげるのを忘れたり（Aさんの手元を覗く余裕がない）。シートのロールを引くタイミングがつかめなくて焦りながら、突然大胆に引っ張って、Aさんを驚かせてしまったり。皆が首尾よく出来たことといえば、交替のお知らせぐらいだろうか。

②要約する時のポイント

要約筆記する際は、「話の内容に忠実」な範囲内で、言葉を適宜省略したり、別の言葉に置き換えたりする。

その一つとして、文中に「略号」や「略語」を使うこともある。私が習ったのは十語程度だが、たとえば「手話」は「㊥」、「要約筆記者」は「㊦者」、「コミュニケーション」は「コミ」とだけ書くこともある（略号や略語の一覧表を作っておく）。

また、一つの話題の中に同じ人名や地名が幾度も登場する場合、二度目からは「彼（彼女）が」とか、「当市では」という書き方も使う。

さらに、話し手の語調が非常に丁寧で、重ねがさねの敬語を使う時は、ある程度まで平易な表現にして文末を短くすることもある。

そして何より大切なのは、事前の学習と日頃の勉強だそうである。「聞き取り」の訓練は言うに及ばず、講演のテーマや講話者の背景―活動分野や所属する団体名、著書名など―を下調べしておくと、固有名詞の漢字にも強くなれるだろう。

③ノートテイク

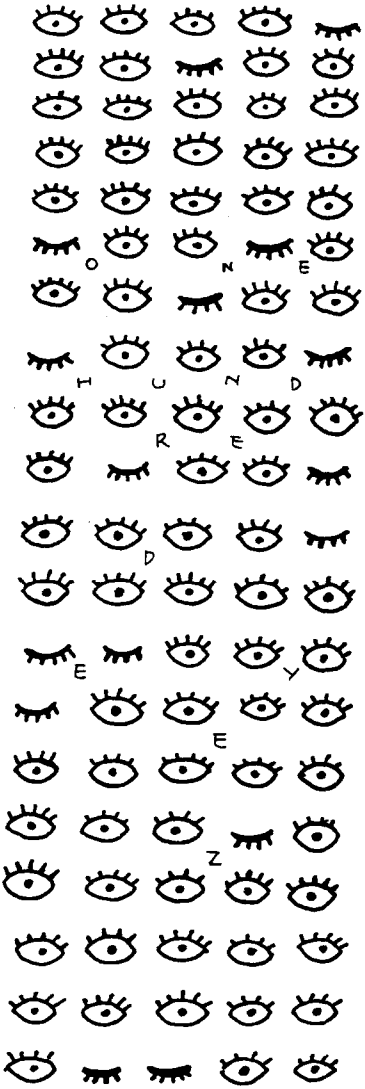
実技の最終回は、筆先の細い水性サインペンで紙に書く、「ノートテイク」の練習だ。ノートテイクはおもに、聴覚障害者の個人的な情報保障のためのもので、筆記者は病院や役所、PTAなどへも同伴する。もちろん筆記者には、利用者（クライエント）のプライバシーに関する守秘義務がある。

筆記者が利用者の右側に並んで書くのは、筆記者の動かす腕が利用者の体に当たらないようにするためであり、利用者が筆記者の腕越しに文字を読む煩雑さを避ける配慮でもある。

ノートテイク用の紙は、白い無地のもの（できれば利用者側に用意してもらう）。B5サイズ程度がよいが、新聞の折り込みチラシの中から、片面刷りのものをストックしておくと重宝する。ちなみに、OHPのBさんがメモをとる時も、このノートテイク用の紙を使っている。

それまでOHPと悪戦苦闘してきた受講生一同にとって、このノートテイクは紙に書くだけに書きやすく、講演会の衆人監視でない分だけ「気楽そう」に思えたが、個人的な情報保障の方がもっと責任重大である。

利用者の身体生命や財産に関わるケースでは、大事な注意事項を万が一にも聞き違えたり、書き落としを



疑われるトラブルを避けるためにも、要約筆記者は複数必要になるそうだ。たしかに、病院で薬や手術の説明を受けたり、役所の窓口で日頃耳馴れない法律用語を並べられると、健聴者の私にしても非常に緊張してしまう。

ノートテイクの練習では、受講生が二人一組になって、失聴の擬似体験学習もした。一人が講師の話をノートテイクしている間、もう一人は耳を塞いでいるのだが、漠然と声は聞こえてくる。だが相棒のノートテイクだけを頼りに講師の質問に答えてみると、どうしても話の辻褄が合わないケースも多かった。

そしていよいよ最後は、話が一区切り終わるまで筆を置いて集中して聞き、その後で話の流れに沿いながら、要旨をまとめて文章にする練習である。聞き取りは百字程度の文章だったが、我ながら上々の出来で、講師からも過分なおホメにあずかった私は、すっかり舞い上がってしまった。

こうして私の「要約筆記」入門講座は、おめでたく終了した。

「要約筆記」とは、手話や字幕のように、音声言語を視覚言語に換えて情報伝達するものである。そして特に、手話を得意としない難聴者や中途失聴者（それもかなり年齢が高くなってから）のための、より多くの情報保障の一つである。

この講座ではＯＨＰを扱う練習が

中心だったが、健聴者同士の擬似体験を通して「要約筆記」の一端に触れただけである。

練習に使われた、さる難聴者の講話―「要約筆記の重要性」―のテープの中では、

「…要約筆記は、『通訳』の仕事です。…ですから、『私は文章を書くのが好きだから』だけでは、要約筆記は出来ません…」

とあって、思わずハッとさせられた。

私はまだ要約筆記の学習を始めたばかりだが、今後の訓練次第で、筆記術の向上はいささかなりと望めるかもしれない。でも独りよがりで粗忽な性分が、通訳としての自覚を培う際の大きな課題になりそうだ。

これで私の「要約筆記」入門体験談は終わりだが、本誌読者の皆さんには、要約筆記に少しは関心をもって頂けただろうか。

最後に、ここ平塚市の要約筆記サークルの世話役であるS氏の言葉を、皆さんにもご紹介しておきたいと思う。

「受講生の皆さんが、今後要約筆記者を目指すかどうかはともかく、この入門講座での体験を活かして、『要約筆記』という言葉を、まずその名前だけでも多くの人たちに記憶してもらえるように、広くはたらきかけて下さい」

「高齢者の多くなるこの社会で、難聴や中途失聴は決して他人事ではなく、私たち皆にとって身近な問題なのですから」

〈追記〉

最後に講師からホメられて、自分の出来心にもハズミがつき、私はこの四月に当市の要約筆記サークルへ入会した。

私はまだ海のものとも山のものともつかぬ、ボランティアの卵だが、「要約筆記なんて、私にはとても無理だ」と性急に諦めてしまうのも、何だか勿体ないような…。

今度は自分の往生際の悪さを尊重して、サークルの勉強会に通うとしよう。

前向きなとみちゃんへ

二八三号ワーキングライフの松本とみよ様へ

アメリカリトルロック市　伊藤琴子

とみちゃん、と、一度も会ったことないのに、いつも軽〜い調子でお便りしてしまうのは、貴女がとことん明るい性格だからでしょうか。

いつも「わいふ」の文章を楽しませてもらっています。今回の新聞配達の文もとてもおもしろかった。

人はなにげない日常に生きている内に、新鮮な発見や驚きをなくしてしまいがちです。毎日、毎日がただぼんやりと、すばらしく胸がドキドキする興奮もなければ、極端に不幸なことも起こらない。そんな日々がどんなに恵まれているか、有難いこ

とだということは、地震や火山の噴火がないとわからなかったりする。

とみちゃん、貴女の観察力、明るく楽しいものの見方はすごいよ。いつも生きてる、単純でとりえのないような毎日の中に、「わォ」と感じられることや、「すごい」と気づくことってたくさんあるんですよね。私は貴女の文を読むたびに、うふふっと笑い、そして、「私も頑張るぞー」と、励まされています。

以前、貴女が本を出版するという文を「わいふ」で読み、私も、と、出版しました。そして、今年は私もテレビ出演してます。

一月にローカル番組にゲスト出演した時に、プロデューサーの目にとまり、私のトーク番組をすることになったんです。勿論、夢は全米進出、でもみんな初めはローカル局から始まるのです。「ドクター　キンコイトウ　ショウ」という、タイトルはちょっとファッショナブルじゃないけど、三十分のショウです。

本を出したのも、テレビ出演するのも、とみちゃん、貴女の文が私もやってみようと、私の気持ちをうながしてくれたからです。

どんな物事に対しても、真面目に努力をする貴女の姿が文章から、エネルギッシュなパワーと共に伝わってきます。いつも素敵な文を有難う。

「新しい専業主婦」についての二八三号の三人の方へ

東京都東大和市　長谷部治子（38歳）

三人の方から、スマッシュされて驚きました。それぞれの意見は、私が納得するものばかりでした、が。

たとえば、一介の女性が、パート先のスーパーを辞めたからといって、就職先の会社を辞めたからといって、テレビ局が、わざわざ取材に来ますか。

取材したのは、相手が大企業に勤めているエリート女性だったからです。

大企業は、いわば公の顔です。

一企業であると同時に、公の会社でもあるのです。そこに勤めている人たちは、一社員であると同時に、公人でもあるのです。

彼女たちに、公人としての自覚がどこまであったのか。女性として、時代をリードしているという自覚がどこまであったのか。

そのことを問われてもいいはずです。

確かに女性の体力で、男性の体力以上に働くことは困難でもあり、まして、そこに競争とセクハラが加われば尚のこと、疲れ果ててしまうのも事実でしょう。

退職の直接の理由が母性ではないにしても、少なくとも、母性が理由になっていることも確かなのです。公人であった彼女たちが私人に戻れたのは、母性があったからです。言ってしまえば、母性を、隠れ蓑に

することが出来たのです。

エリート女性であってもまだまだ、母性が隠れ蓑として通用する社会のあり方に、私たちは目を向けなければいけないのです。企業のあり方といってもいいでしょう。

何故、女の退職だけ寿がつくのでしょうか。何故、会社を辞めるのに「おめでとう」と祝福されなければならないのでしょうか。そこに、隠れ蓑としての母性があるからでしょう。

「母性に縛られる」とは、そういう意味も含まれているのです。

燃え尽きてしまうのは、男性だって同じです。過労死がいい例でしょう。男性には、逃げ道も隠れ蓑もないことを、女性である私たちはもう少し考えてもいいはずです。

母性を社会に還元していける方法を、男性と共に考え実践していく時代が、これからの時代だと思います。

大変だといいながら、母性を独り占めしてきたのも、女性の方ではないでしょうか。

私たちは、簡単に母性、父性といってしまいますが、もしかしたらその観念こそが、母性に縛られている原因かもしれないのです。

母親であっても、女性であっても、一人の人間として充分に生きることが出来る社会を、やはり私は望みます。

（え・荒井知恵）

私も ひとこと

wishbone

静岡県小笠郡　鴨川典子(45歳)

赤毛のアンでお馴じみのモンゴメリ。他作品もどれもが素晴しくて、とても好きな作家だ。最近読んだ『もつれたくもの糸』に、持っていると望みを叶えてくれるという、「黒猫のウィッシュボーン」なる言葉が出てきた。ウィッシュボーンとは鎖骨のこと。小説の題名になりそうで、なんて素敵な言葉！　で、家のは三毛だが、「アンタのでも効果あるかもしれない」と迫っている悪い飼い主の私。

メール友達のコーナーについて

熊本県八代郡　砂原富美子

メール友達の記事が、最近載ってないですが終了したのですか。

友達になりたくて、メール送りましたが記事の会員の方から返事はありませんでした。

そこで私のアドレスを載せていただきました。パソコンの輪はまだひろがってないのでしょうか。

このままコーナーが消えるのは寂しい気もします。

rentarou @msj.biglobe.ne.jp

ホームページ共同制作

イギリス　ウイリアムス典子

糖尿病と癌を患う義父。〝外国人〟の配偶者と息子。パートの仕事とペットうさぎ。多忙だが野心満満の私のためにホームページを作ってくれるという兄。その言葉を真に受けて原稿をEメールで送っている私。

「作者に失礼だから手直しはしない」とは言え「勝手なこと書いとるわい」と思っていることであろう。ごめんなさい、でも感謝。

http://www.andoando.com/andi/

点も丸もない手紙

愛知県春日井市　伊藤てる子

〝とうふうさんはほんとうにあんなにじがじょうずなのかなすごいですねしょうがくせいになってもがんばりますくぼたさとし〟

この手紙は昨年の暮れに『書聖小野道風公ともぐらのもん太』の絵本を、保育園へ贈ったら六歳の男の子から来た礼状である。

点も丸も一つもないのに、精一杯の気持ちがジンジン伝わってきた。外の二人も同様だがよく分かる。どれも貴重な私の宝物だ。

子供のいない園庭

東京都世田谷区　太田啓子(41歳)

いつものように春が来て、息子の通っていた幼稚園にも、色とりどりのチューリップが咲いている。しかし、そこに子供の姿は一人もなく、小屋から出された鶏が、のんびりと地面をついばんでいる。ここが休園してもう何年になるのだろう。少子化の波は、歓声の絶えなかった幼稚園の姿をこのように変えた。

誰もいない園庭に、子供達が戻ってくることは、もう二度とないのだろうか……。

貧乏力のパワー

千葉県佐倉市　渡辺早苗

母の米寿を祝って記念誌を作ることにした。俳句の好きな母の句を冒頭に、後は親類縁者の母へのメッセージを載せることにした。

母の姉弟、甥姪そのつれあいや子どもたちから、便箋に一行書きから原稿用紙三十枚までアッという間に集まった。何、この結束ぶりは。母曰く、「貧しかったから助け合う気持ちが強いのよ」。ウーン、貧乏力のパワーに脱帽。ところで、発起人の私はまだ遅々として筆が進まず、悪戦苦闘が続いている。

ごめん・口が足りなくて

東京都足立区　島村君子

新聞に「孫・育てる言葉・ダメにする言葉」「あなたも思い当たるセリフはありませんか？」という本の広告があり、先日のことを思い出した。孫（男）が希望の私立中学に特待生で合格したとき、私は「お父さんが頭が良いからね」と言った。後で娘に「努力もしたから受かったんだよ。本人、傷ついていたよ」と言われてしまった。「ごめん・口が足りなくて」。おばあちゃん、この本読んでみようかな。

アイム・カウンセラーコース受講開始！

東京都三鷹市　林　夏子（45歳）

四月二十日午前十時、乃木坂のアイムの教室に座っていた。零歳児をかかえ共働きに挫折、一度前線を退いた私は、〝わいふ〟を心の依り所として、このスタートの日を待っていた。姑の病気、息子の受験、娘の不登校とささやかな人生経験の後、絶妙なタイミングでこの日が来た。初めて会ったとは思えないなつかしさを感じさせてくれる仲間たち。何が始まるのか。十年後を夢見て出発します。

田中先生にお会いできた！

神奈川県川崎市　増井幸子

先日近くの市民館のパートナーシップの講座の一コマに、田中喜美子先生が来て下さいました。先生が以前書かれた『書きたい女たちへ―体験的文章入門』の御本を宝物のように持っていた私としてはお目にかかれて大感激。

家族とのちょっとした会話を大切にするコミュニケーションのお話や、四十代の頃一番男性に声をかけられたとの楽しい体験談等。おしゃれでカッコイイ先生からたくさんの元気を頂きました。

ヒジキの煮付

神奈川県藤沢市　本間美恵

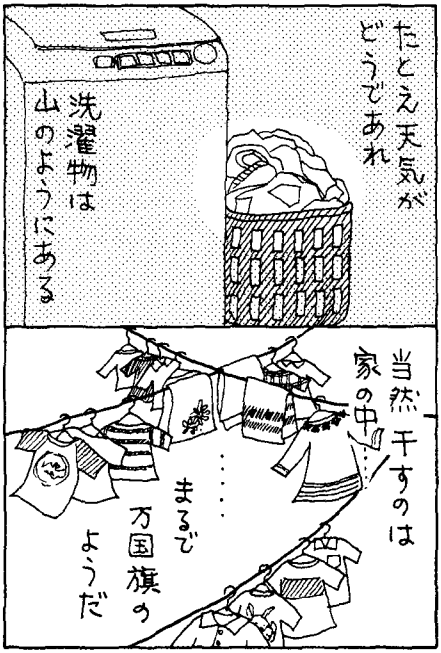
久しぶりでお弁当を作ることになった。家事を片づけてからなので、ありあわせをつめあわせるだけの簡単なお弁当である。近くのスーパーの冷凍食品コーナーでヒジキの煮つけのトレー入り六個を買う。熱を加える必要がなく、朝出かけて、昼の食事時には自然解凍されているというもの。久しぶりのお弁当づくりだが、こんなところにもわが国の改善改良の食品ありを再認識し喜んでいる次第。

（え・弘法堂健二）

毎日が平日

海砂

梅雨です
あーーあ……
今日もまた雨か
ホントに
よく降るよなぁ……


たとえ天気が
どうであれ
洗濯物は
山のようにある
当然 干すのは
家の中!!
……
まるで
万国旗の
ようだ

それにしても タオルが多いよなぁ…
んで。の理由
んで?
このタオル 温ってるぞ… 新しいのに とり替えて おこう
ふーー… あつい! あつい! 汗びっしょりだよ
とても汗っかき
……と、まぁ こんなかんじ
やれやれ
んこぜ!
みなさぁーーん 今日からタオルは 1人、2日で1枚の 配給制になりまーーす
ご協力 お願いしますね!!
えーーっっ?!
どーして?
なんで…そんな…
?
はい! これは パパの分
これは ゆうすけの分ね
うん
はーい
なんだかうまく いっちゃった こうなったら 他にも 何か……
次は何を 考えてるだ? …こわい…
うーーん さすがに下着は 毎日洗わなきゃ ダメよねぇ…

情報コーナー

長寿社会への提言　優秀論文集「動物とのふれあい」

（『ふれあいねっと』臨時増刊号）

社団法人長寿社会文化協会（WAC）では、毎年テーマを変えて「長寿社会への提言」と題した論文（作文）募集をしています。第十回のテーマは「動物とのふれあい」でした。

原始の昔から、人間は動物と共に生きてきました。家族として、仲間として、友人として、そして何よりも人間が生きていくために必要な栄養源として、動物たちは人間に多大な貢献をしてくれているのです。

二十一世紀の少子・高齢社会の中で、動物たちは単なるペットではなく「新しい伴侶」として注目されるようになってきています。また、盲導犬や介助犬など、高齢者や障害のある人のために働く犬たちの存在も重要です。

この優秀論文集には、二九三編の応募作品の中から、提言の要素を含み、審査員を感動させた作品二十一編が収録されています。

また、資料編では、子どもたちに馬とのふれあいの場を提供する「ポニースクールかつしか」や日本動物病院福祉協会の訪問活動、ペットの里親を探すARK（動物避難所関西）の活動なども紹介しています。

●定価一〇〇〇円（税・送料込み）

●お申込み・お問い合わせ

社団法人長寿社会文化協会

TEL〇三―五四六〇―〇五二一

FAX〇三―五四六〇―九八二〇

『誰もがおしゃれをⅢ』発行　特集・スリランカ訪問

高齢者・障害者のための着やすくて、着て楽しい洋服作りの活動を続けている「ハンディ&シニア企画」は、ヨーロッパとの国際交流も回を重ねてきました。

二〇〇〇年より、アジアの発展途上国への協力・支援として、タンスに眠る着物や帯を集め、スリランカの女性の地位向上の手助けを開始。一月訪問の報告と洋服や小物の作り方つきの冊子を発行予定。ご協力を！

▼発行日　七月中旬予定

▼定価　八〇〇円＋送料二〇〇円

送金は本に同封の振込用紙で

▼問い合わせ・申込み

ハンディ&シニア企画

品川区小山五―十七―二三

FAX〇三―三七八一―八五一二

「雪谷十姉妹（ゆきがやじゅうしまつ）の会」って？

チェルノブイリ事故から二年後の一九八八年、幼子を抱える母親たちの切羽詰った思いから作られた脱原発グループです。

写真展や連続講演会の開催。通信発行。カンパと署名などの地道な活動も行ない十二年目を迎えました。

現在は原発の他、ごみ、環境ホルモン、干潟保全などに海外情報も加わり、「よろず井戸端会議」を開いています。

▼毎月一回、土曜日の午後

▼大田区立・嶺町文化センター

★興味のある方は一度覗いてみませんか。　（中川あゆ子）

TEL〇三―三七二〇―三九五三

Eメールアドレス：

ayunaka@din.or.jp

『母と子』 6月号　　定価５００円／送料６８円

＜今月の視点＞　翔ぶ母と翔ばぬ母
子どもを育てつつ自分を探す
－九人の母親たちが語るそれぞれの歩み－

◆〈アメリカ便り〉「レ・ミゼラブル」　山本由美
◆〈子どもと本と図書館と〉図書館での飲食を認めるか　有吉末充
◆〈幼児と遊ぶ〉竹とあそぶ　有吉有巳子
◆〈子どもの権利条約を考える〉「べき」の語りと規範　山田雅康
◆学ぶ環境としての学校を問う（前）　杉村房彦

当世学校事情　【『母と子』臨時増刊号シリーズ】

203-0054 東久留米市中央町5-4-8電話0424-74-9125　母と子社

女たちの情報紙
ふぇみん
femin
婦人民主新聞
WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

見本紙 お届けします。お問い合せ下さい。

草の根は伸びつづける。

からだのしんぱい
はたらくもんだい
こころのえいよう
さべつへのいかり
アジアのうごき
あんぜんてなに？
きのうまでのみち
あしたへのみち
わたしのいけん
あなたのいけん
おんなという
ちから。

世の中に？をもち始めた男たちにも。

創立以来、無党派の立場で50年。
女の視点で創る、もうひとつのメディア。

新聞代
（送料込）
1ヶ月　750円
3ヶ月　2,250円
6ヶ月　4,500円
1　年　9,000円

毎月・5日・15日・25日発行

東京都渋谷区神宮前3-31-18-301　大阪府協　大阪市北区中崎西3-1-5
TEL 03(3402)3244、3238　TEL 06(371)2429
FAX 03(3401)3453

ふぇみん婦人民主新聞
婦人民主クラブ責任編集

私もひとこと
わいふネット 質問
わいふネット 答え

（○で囲んでください）

タイトル・住所・氏名

本文

私もひとことは、投稿してみたいけど、長いのはチョットという方のためのコーナーです。わいふネットは相談や質問、掲載された質問への答えをお寄せいただくページです。あなたの声をお待ちしています。

投稿には、右の原稿用紙をご利用ください。

●タイトル、住所、氏名は一行めに。もし、二〇字を超える場合には桝目にこだわらず、小さい字で。住所、氏名は他のコラムを参照してください。

●二行めから本文、全体で九行一八〇字。

会員番号

スタッフから

大学二年の甥が本屋でアルバイトをはじめ、がんばっている。一万円で雑誌を買おうとした客に「一万円頂戴しました」と言ったところ「君にあげたんじゃないよ」と言われた。家で、最小限の返事しかしない甥が「どのように言えばいいの」と、その時の話をしたそうだ。母親は本屋に授業料を払っても良いと思っている。（成井）

ベランダに出てびっくり。目の前の花梨の木にインコがいる。八羽も。黄緑の羽根に赤いクチバシ。三十センチはある大型のインコたちだ。

これで分かった。きのうからマツバギクのつぼみばかり落ちていておかしいと思っていた。

次の朝早く〝ピ・ヨ〟と鳴く声にそっとのぞくと、やってるやってる。モグモグモグモグ。コラ！コラ！コラ!!（望月）

若葉がキラキラ揺れている日、甲斐駒ヶ岳の麓にある父の生家を訪ねた。住いは崩れているが、蔵は凜として立ち続けている。父の甥が「あのお蔵の中で、おじさんはいつも勉強していた」と言った。私は努力家の父の机に向かう姿を思い浮べた。

頬を撫でる風は心地よいのに父の介護をやさしくできなかった苦い思いが蘇る。（山本）

冬になると庭の隅に餌台を置き、野鳥を呼んでいる。メジロ、シメ、アオジ、シジュウカラ、ヒヨドリ、シロハラなど、多くの鳥が集まって、目を楽しませてくれる。それぞれの鳥に好物の餌があり、食べる順番もルールがあるように見える。新緑の季節になり、餌を置かなくなったが、さえずりが楽しい。庭ではムクドリが巣作りのための落ち葉を集めている。（水落）

〝女性議員を国会へ〟と送り出すために、学生や若い女性向きのマニュアル本が欲しいと思う。地域運動もこれからの女性たちに、政治への関心と参画に大切なことや、若い年齢で議員になった実例や体験談をまとめてあるといいな。憲法や法律の知識ばかりでなく、地域に根ざした市民レベルの解説であれば、良い議員を選ぶための参考書にもなるだろう。（菊池）

手早くできあがる夕食。三十分で三品はできる。「わいふ」で仕事をするようになって家事の時間は短くなった。手ぬきはないつもり。しかし以前は何もしなかった夫が、見るに見かねて手伝いだした。最近は縄ばりを荒されそうになってきた。指図までされるとムッとしてくるがシメシメだ。十日間位留守にしても家の中の波はおだやかなものとなった。（野村）

聴神経腫瘍というものができて、ガンマナイフという放射線治療を受けた。三日間の入院で、治療自体は痛くもかゆくもない。

しかしかける位置を正確に計るため、金属のフレームを頭にボルトで四カ所止めつける。局所麻酔をしてドライバーでねじ込むので、あとが穴になって傷がなおるまで二週間かかった。二度とやりたくはない。（和田）

今日は僕が買物に行く、と出かけていった夫が、ビニール袋ぶら下げて帰ってきて言うことには「Mさんに出会って、まァ、旦那様がお買物ですか、って同情されちゃった。考えてみりゃそうだよな」

Mさんとは姉の家のお手伝いさん。すごくいい人なのに、まったくもう……。女の敵は女、とは思いませんけども。（田中）

「ファム・ポリティク」より

●日本で一番腐敗しているのは政治家、と思っている人は多いものですが、九三年から「ファム」を発行し、臓器移植の運動にもかかわって痛感するのは、女性政治家ばかりでなく、男性政治家でも理想に燃え、体を張って仕事をしている人はいる、悪質なのはむしろ自分は安泰な場にいて国民をバカにしている官僚であり、それよりダメなのは、「正義の味方」のふりをして、実際には強いほうについてしまう風見鶏のマスコミだということです。

●徹底した現場検証に基づく公平・客観的な調査報道こそ使命であるはずなのに、最近の新聞報道は、臓器移植のような大切な問題に対してさえ情緒的な空騒ぎばかり。ほんとうにうんざりしてしまいます。

（次号の「ファム・ポリティク」に臓器移植の実態を掲載します。興味のある方は「わいふ」へお電話ください）

ＮＭＳ研究会より

●オープン以来、ＮＭＳに相談を寄せられた方たちは二百を越え、これまで行なったアドバイスは千通以上に達しました。

●このシステムの第一のモットーは、「幸福な子育ては幸福な母親から」というものですが（幸福の基準は世間並みのものではありません、念のため）、仕事を進めれば進めるほど、この言葉の持つ重みを痛感するようになりました。

なぜならどんなに懸命にアドバイスさせていただいても、夫との間に問題があると、不思議なほど効果が上がらないからなのです。

ＮＭＳを実践なさるとふつう、子育ては目にみえて改善されるものなのですが……。

●母親にとっての最大の問題は、実は子どもでなく、「夫」にあるのかも知れない、とあらためて痛感してしまいます。

老人ホーム情報センター便り

●四月から介護保険がスタートしました。各自治体によってかなりサービスにばらつきがあるようです。

老人ホーム情報センターでは、全国の市区町村の介護サービスの状況を調査して、より充実したサービス提供をうながしたいと思っています。皆さんの町が発行している介護保険のパンフレットを送ってくださいませんか。

六十五歳以上の方の保険料も書き添えてくださると有難いです。どうぞよろしくお願いします。

●送付先

〒一六二―〇〇六二
新宿区市谷加賀町二―五―二六
老人ホーム情報センター

●無料電話相談　毎週木曜日

●面接相談もお受けします（有料）。
電話でご予約ください。
〇三―三二三五―二八五四

募集します

特集テーマ

二八六号(二〇〇〇年十月一日発送)の特集テーマは「私の健康法」です。

テレビを見れば、新聞を読めば、健康を保つための情報が日々提供されています。雑誌や本も数多い。

成人病は生活習慣病といわれ、まず食習慣の改善、運動を継続して行なうこと、ストレスをためないように、などと指導されます。

情報が行きわたっているだけに、皆さんたいてい何かを実行していらっしゃると思います。何が原因でどういう方法を選び、いつごろから実行したか。それは効果があったか(例えば血圧やコレステロール値が下がったなど)。

日本人は世界一の長寿だということですが、それを元気に生き抜くためのあなたの実践をお寄せください。

字数　二千～四千字程度

締切りは二〇〇〇年八月十日です。

座談会　私も言いたい

二八六号のテーマは「家庭の中の会話」です。

昔、日本には食事中に「口を利いてはいけない」という、今から見れば奇妙な習慣がありました。七十歳以上の人なら、「ご飯は黙って食べなさい」と、叱られた経験者が相当いるはず。

そのためか、日本人は家族間の会話が乏しいのを余り気にしません。夫婦は「以心伝心」、言わず語らず分かり合うのが理想とされたり、子どもが何も言わなくても行き届いた世話をする母親が「よいお母さん」だったり……。

皆さんのご家庭では「会話」してますか？　している方、してない方、必要と思う方、思わない方、集まって話し合いましょう。

日時　七月十四日(金)午後二時～三時半

場所　「わいふ」分室

申込みは六月二十日までに電話で。

私の意見・あなたの意見

二八五号のテーマは、「世代間・ホンネのぶつけあい」です。

「世代間交流」なんてきれいごとの言葉を聞くことがありますが、違う世代の人間のホンネを知ることは実のところ至難のわざではないでしょうか。

若い世代だって、「今時の若い者は」なんて言われるばかりじゃかなわない。

ジュニア世代からはシニア世代が、シニア世代からはジュニア世代のどこがどう、やりきれないやなのか、あるいはそれほどでもないのか、ホンネのぶつけあいをしてみませんか。

もちろん個人的な愛憎の話ではなく(奥底にそれも潜んではいるでしょうが)、一般論としての世代間ギャップを論じてほしいのです。奮って意見をお寄せください。年齢明記。もの申したい相手の年代も特定をお忘れなく。

字数　八百字前後。締切り六月二十五日

きまり

定期購読を申し込まれている方はどなたも投稿できます。
投稿の前に以下を必ずお読みください。

◆グラビア「わが家の歴史写真」
どこのご家庭にもある古い写真とその説明をお寄せください。「父・母を語る」「子育てのころ」などのテーマにそってでも、ただ古い写真を並べてもけっこうです。
お申込みは電話で編集部まで。

◆特集
毎回テーマを設定しています。一四九ページをご覧ください。

一六〇〇字のコラム

（どのコラムも字数は目安で、多少長くても内容がよければ掲載します）

◆エッセイスト・クラブ
キマった文章、豊かな内容の随筆をお送りください。

◆ズバリ一言
オピニオン、評論を。独自の意見で。

◆家族のスケッチ
同居、別居を問わず、あなたの家族のことをお書きください。

◆子育てフォーラム
おさない子、思春期の子。どんなときも親にとって子どもの存在は気になるもの。ありのままの関係を描いてみませんか。

◆ワーキングライフ
あなたは、どんな働き方をしていますか。さまざまな仕事の喜びや苦労話を。

◆今これに夢中
人生八十年時代。趣味その他、仕事以外に生きがいを持つ方も多いはず。あなたは何に夢中ですか。

◆フリートーク
どんなテーマでもどうぞ。どのコラムにも当てはまらないテーマを。自由なコーナー。

八〇〇字のコラム

◆あなたへスマッシュ
本誌の投稿や記事についての感想、意見を載せます。何号のどの投稿に対するものかを明記して。

◆ことばでハッピー
ことばの使い方はとても難しいですね。時には人間関係をこわしたり。でも発想を変えて工夫することで、お互いの関係をよくすることも可能。失敗談も含めて明るい話題を。

◆パソコンワールド
急速に普及し始めたパソコン。楽しんでいる人、振り回されている人、体験談を。

◆おすすめの一冊
書評のコラム。どんなジャンルのものでも結構です。お読みになった本について感想を含めて、ご紹介ください。

四〇〇字のコラム

◆笑える！
嫌な話題の多い世の中。思わず笑ってしまう楽しい話を。

◆私の意見・あなたの意見
賛成か、反対か一四九ページにテーマを載せています。皆さんの率直なご意見を求めます。

その他

◆私もひとこと（一四六ページ参照）
どんなことでも気軽にお書きください。

◆わいふネット（一四六ページ参照）
教えて欲しい、聞きたい！　それに対するお答えも。読者参加のQ&A。

◆情報コーナー
お知らせ、募集など。要点を漏れなく整理してお寄せください。（一四字二〇行にまとめて）

投稿の

◆**特別寄稿**

字数自由。どのようなジャンルのものでも結構。本誌に適当と思われるものは掲載します。出版社に紹介することもあります。（ただし詩、短歌、俳句を除く）

◆**コミック、イラスト、写真**

一度作品をお送りください。本誌に合うものであれば依頼したいので。

注意

●原稿はお返しできません。

●投稿は一人一篇。ただし、「あなたへスマッシュ」「おすすめの一冊」「私もひとこと」「わいふネット」「情報コーナー」とはだぶっても可。

●締め切りは**原則として偶数月の二十五日**。郵送で当日必着。（読みにくいので、ファクスではお送りにならないようお願いします）

●他誌との二重投稿はお断りします。

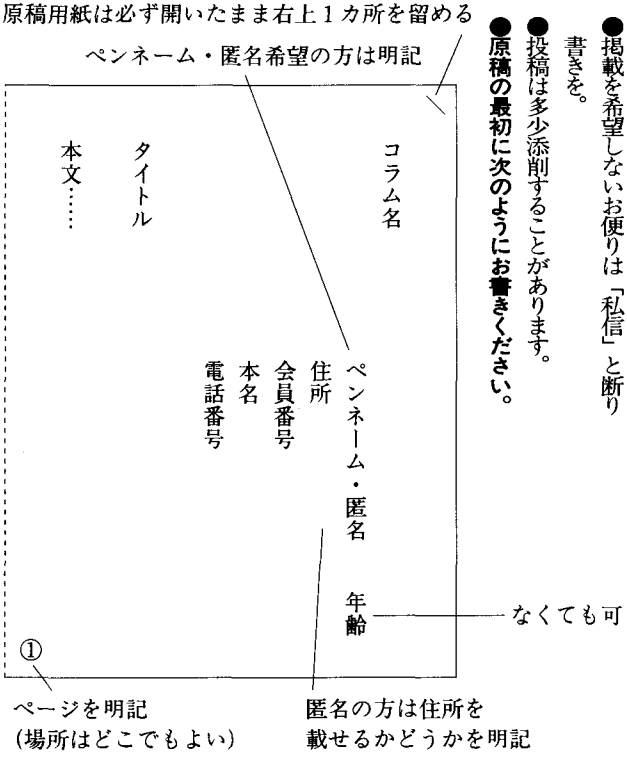
●写真や、イラストを用意できる方は原稿とあわせてお送りください。

●誌上での匿名、ペンネーム使用可。ただしいくつものペンネームを使い分けるのはご遠慮ください。

●掲載を希望しないお便りは「私信」と断り書きを。

●投稿は多少添削することがあります。

●**原稿の最初に次のようにお書きください。**



●四〇〇字詰原稿用紙に**縦書き**。ワープロ打ちは二〇字×二〇行を一枚に、行間一行おきにあけること。字間はとくにあけないで。

〈あて先〉〒162―0815 新宿区筑土八幡町一―二―二〇一
わいふ編集部

編集だより

◆「マンション買って住んでます」の特集は、残念ながらご投稿が一編しかなく、今号は特集抜きということになりました。

特集については、読者の皆さんからいろいろテーマをお寄せいただいているので、今後それらを十分検討して決めていきたいと思います。

◆グラビヤ「わが家の歴史写真」にも、もっとご応募いただきたいのです。前号今号ともお母さまのことがテーマになっていますけれど、どんなものでもけっこうです。子供の成長でも、夫婦の履歴でも、祖父母の時代の古い写真でも、アルバムに残る過去の記録をお待ちしています。

◆添削講座を始めました。お問い合わせくだされば内容の説明をお送りします。編集部へ電話でご請求ください。

◆しばしば横書きで投稿される方があります。「わいふ」は縦組みの本ですので、ぜひ縦書きでお願いします。投稿規定をお守りください。

◆今号の座談会、応募者がなくて一たんお流れになったのですが、日時が都合悪くて諦めたという方があり、編集部の面々もいろいろ経験があると言い出したので、急拠内々でやりました。

日時の調整は可能ですから、今後「出席したいがその日では……」という方は一応お申し出ください。何人かいらっしゃれば変更を考えます。

◆編集長の田中と、副編集長の和田の共著で、『自分を表現できる　文章の書き方』という本を、毎日新聞社から出しました（おすすめの一冊で紹介しています）。

文章講座の内容をまとめたものですが、最後の一章を投稿者から巣立ったライターの、佐藤ゆかりさんに書いてもらっています。ライター志望の投稿者は、その旨申し出ていただけば、こちらもそのつもりで考えます。誰でもなれるというわけではもちろんありませんけれども。

この本では「わいふ」に載ったよい文章を、いろいろ例文として引用させていただきました。皆さまに厚くお礼を申し上げます。

購読申込は……

ハガキか電話、ファクスでどうぞ。すぐに、本に郵便振替用紙を添えてお送りしますので、折り返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。限られた書店にしかおいてありませんので、直接お申し込みください。

購読中止は……

必ずお申し出ください。誌代が切れる際には、郵便振替用紙を同封していますが、送金をお忘れになる方があるため、誌代が切れても、引き続き送本しています。ご連絡がないと、お送りしてしまいますので、ぜひハガキかお電話を。

わいふ◆284（隔月刊）
●発行日　2000年7月1日
●編　集　わいふ編集部
●定　価　620円（本体590円）
●年間購読料　4224円（送料共）
●印　刷　平河工業社
●発行所　㈱グループわいふ
〒162−0815
東京都新宿区筑土八幡町
1−3−201
電話(03)3260−4771
FAX(03)3260−4773
●郵便振替　00150−3−110430
加入者名　わいふ編集部

あなたの子育て 診断します

母親の個性を生かした「子育て」を

◆子育てを診断するなんて、嫌な感じ！なんて思わないでくださいね。そうでなく、あなたの性格に合わせて一番やりやすい、いい子育てができるガイドブックなのです。

◆五種類のアンケートと、その答えからあなたのタイプがわかるチャートがついています。●権威型●保護型●受容型●放任型●流され型の五つです。もちろんどれがいい、どれが悪いという問題ではありません。自分のタイプを知った上で、自分に一番ふさわしい、そしてやりやすい子育てのしかたが見つかる本なのです。ぜひお試しください。

◆それぞれのタイプがよくわかる、すごく愉快な子育ての実戦記がついています。

田中喜美子＋NMS研究会著
定価一三六五円（税込み）　小学館刊

投稿誌 **わいふ** から
生まれた

ニュー・マザリングシステム（NMS）

ゼロ歳から満3歳までの子どもを持つお母さんを対象とする通信教育です

「生きる力」のある子を育てましょう!!

・実践と理論の両方を学べます
・子育ての悩みから解放されます
・徹底した個人指導で安心できます

お問い合せ先　**NMS研究会**　〒162　東京都新宿区市谷加賀町2-5-26
㈱グループわいふ分室内　☎03-3260-2509　FAX03-3260-9398

平成九年十二月十九日　第三種郵便物認可
二〇〇〇年七月一日（奇数月の一日）発行　わいふ　二八四号

体の中からキレイになるための
健康ダイエットQ&A
小西すず　体重を減らすことがダイエットの目的になっていませんか？　食は科学・食は文化！　食はいのちです。栄養学の専門家が、健康なやせかたの法則を紹介します！　一八〇〇円

水・空気・食品・生活・健康
暮らしの中の環境問題Q&A
山口英昌編著　生活者の視点に立って、身近な環境問題をわかりやすく解説する。　二二〇〇円

ケア・福祉のしごとまるごとガイド
田端光美監修　だれにでも分かる分類で、今注目の福祉の仕事を解説する98の職種・52の資格。　一五〇〇円

まるごとガイドシリーズ〈好評発売中！〉　各一二〇〇円

①
社会福祉士まるごとガイド
日本社会福祉士会監修／資格のとり方・しごとのすべて

②
介護福祉士まるごとガイド
日本介護福祉士会監修／資格のとり方・しごとのすべて

③
ホームヘルパーまるごとガイド
井上千津子監修／資格のとり方・しごとのすべて

介護休業でいい仕事いい介護
沖藤典子●家庭も自分も大切にするために　自ら狭間に立って悩んだ著者が、介護と仕事の両立を探る人たちに捧げる意欲作。読んでわかる介護休業制度。二二〇〇円

介護が変わるみんなで変える
樋口恵子編●女性が進める介護の社会化Ⅳ　高齢化を縦糸に男女共同参画社会の実現を横糸にして、介護保険施行前夜を幅広い範囲の専門家が語り合う。　二〇〇〇円

介護保険で拓く高齢社会
樋口恵子編●女性が進める介護の社会化Ⅴ　いよいよ実施された介護保険。日本全国で積み重ねられている介護保険への取り組みを、事例を中心に紹介。　二〇〇〇円

ジェンダーの心理学
「男女の思い込み」を科学する
青野篤子／森永康子／土肥伊都子　人の持つ思い込みをキーワードに、法や制度を整えても、なぜ伝統的な性別分業社会は人びとの意識に残るのかを解明。二〇〇〇円

現代日本女性の生き方
山縣喜代　宗教的・倫理的価値意識と心情　宗教的・倫理的価値意識からその特色を描いた希少な研究書。　二八〇〇円

女性が変える生活と法
佐々木静子編著　男女共同参画社会をめざして　介護、少子化、働きかた、環境問題、政治参加など16の例から学ぶ。　二八〇〇円

ミネルヴァ書房　〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1番地　宅配可・価格は税別
TEL075-581-0296 FAX075-581-0589 http://www.minervashobo.co.jp/

定価六二〇円（本体五九〇円）

雑誌 09859－7